

公益財団法人 日本習字教育財団

學術研究助成成果論文集

Vol.7

助成研究企画 審査所感

研究助成審査委員長 古谷 稔

テレビ報道などマス・メディアにおいて、小中学校の教育現場をよく見かけます。なかでも学校生活のメインとなる教室がクローズアップされ、生徒の習字作品が壁面に張り巡らされた映像の中に、現代日本の書教育の実情が伝わってくるようです。

江戸時代に、寺子屋とも呼ばれた手習塾では「読み」よりも「書く」ことから入り、文字学習の基礎が養われました。近世文人の条件には、漢学・儒学の教養が必要であり、医学はじめ学問の基礎は漢籍に依拠していました。その第一歩は四書（大学・中庸・論語・孟子）などの訓読体漢文を声を出して繰り返し、テキストを全て暗誦する、いわゆる素読の学習法がとられたのです。手習いではまず書き方（書法）を重んじ、漢文学習は素読によって、事前に漢文を身体に馴染ませ、学問の道へとつなげました。

二十一世紀も瞬く間に二十数年が経過しようとしています。デジタル化の波が世界的に押し寄せられ、他方、パンデミックに遭遇する昨今、わが国もそれに直面し、対応に迫られています。

現在、日本語は、外来語が年々増加傾向にありますが、現状は従来通り、漢字と仮名の字体が文字文化の核を成しています。私たちは、伝統文化に支えられた「書」をいかに活かしていくべきか、大きな宿命を背負われています。それは今、過去の書教育や現・学校教育での課題、また、日中の書文化研究成果を基盤に据えながら、世界を視座とした確たる方向性を再考する時機が到来しているといえます。

本年度もまた、各領域担当の先生方による厳格な審査が行われ、かつ査読委員による丹念な査読により、成果論文上梓の運びとなりました。次年度以後もまた、引き続き、充実した研究成果が発表されることを期待いたします。

査読審査を終えて

査読委員長 大橋修一

本年も『公益財団法人 日本習字教育財団 学術研究助成成果論文集』を刊行することとなった。本助成も第八回を数え、本年度は二年にわたるグループ研究二件が載録された。一件は日中書道史に関する研究の最終報告で、一件は書写書道教育に関する研究の中間報告である。各成果についての所感は以下のとおり。

①は、堀川英嗣を研究代表者とする「錢瘦鉄をめぐる日本文化人との交流について——一九二二から四九年を中心に——（下）」と題したグループ研究の最終報告である。多くの新資料にもとづき、錢瘦鉄と日本文化人との交流を克明に描いた力作である。附録の「錢瘦鉄が日本人に刻した印一覧表」も基礎的資料として充実している。

②は、三浦拓真が研究代表者の「漢字と仮名の調和における平仮名の表現方法に関する考察——中学校国語科書写と高等学校芸術科書道を縦断的につなぐ視点から——（上）」で、教育学の分析方法や学習理論の方面まで視野を広げ、堅実な論考となった。論の展開も無理なく適切である。

最近、近時に発表された新資料の整理研究が積極的に行われている。この傾向自体は非常に好ましいが、新資料を研究対象とする場合は、その信憑性について、真正であることを十分に確認してから、分析と研究を行うことが肝要であり、注意を促したい。

新型コロナウイルスの影響下ではあるが、助成対象者には、今後も着実に研究を進めて頂きたい。

目次

助成研究企画 審査所感
査読審査を終えて

研究助成審査委員長 古谷 稔
査読委員長 大橋 修一

〈論考〉

銭瘦鉄をめぐる日本文化人との交流について

——一九二二から四九年を中心に——（下）

堀川 英嗣・浅野 泰之・段毅琳・清原健・王亜峰

5

漢字と仮名の調和における平仮名の表現方法に関する考察

——中学校国語科書写と高等学校校芸術科書道を縦断的につなぐ視点から——（上）

三浦 拓眞・川瀬 英幹

94

英文タイトル

研究助成審査委員一覧

錢瘦鉄をめぐる日本文化人との交流について

——一九二二から四九年を中心に——（下）

堀川英嗣・浅野泰之・段毅琳・清原健・王亜峰

序論

「錢瘦鉄をめぐる日本文化人との交流について——一九二二から四九年を中心に——」と題した、二年に亘る課題研究の最終成果報告を行う時期となった。

日中書道交流史の角度から、一九二二年から四九年における錢瘦鉄と日本文化人の交流をめぐる諸相について、『錢瘦鉄自筆年譜』等の新出資料を駆使し、三者の専門領域に沿って研究を行った。

報告者は、研究内容の時代順に浅野泰之（湖北師範大学美術学部講師）、段毅琳（常州工学院外国語学部講師）、堀川英嗣（研究代表者・山西大学外国語学部教授）である。

浅野は前回の中間報告（以下、前稿）の第一章、第二章で、日中書道交流史における錢瘦鉄の位置、および来日初期に参加した日中共同開催の展覧会に着目して、当時どのような形で日本文化人と交流を重ねていたのかについて考察した。

堀川・段は前稿第三章で、錢の『書苑』雑誌参画から、逮捕拘留、帰国までの日本文化人との交流について考察し、獄中からの家族宛書簡及び当時の裁判記録等を用い、拘留時期の内情について論じた。また、堀川は前稿第四章で、一九四〇年代に上海へ錢を訪れた日本人、及び錢の戦後の再来日について論じ、日本軍占領下の上海においても、戦後の再来日にあっても一貫して「芸術を以て平和を求め」ていたことを

明らかにした。

今回は前稿の時代順、即ち縦軸からの考察を承けて、視座を横軸に移し錢と日本文化人との個人間交流に焦点を当てて検討していく。

本研究では一次資料として、前稿に引き続き錢晟、錢維多両氏より家蔵資料の提供を受けた他、飯田市美術博物館、小杉放菴記念日光美術館、さくら市ミュージアム―荒井寛方記念館―、武田科学振興財団杏雨書屋、千葉市美術館、新潟市會津八一記念館（五十音順）より館蔵資料の提供を受けた。初出資料はアスタリスク（*）を付したゴシック書体にて表示する。また、中国語の引用部分は各章の担当執筆者がそれぞれ翻訳を行った。

最終成果報告では、第五章「橋本関雪との交流」を浅野・清原健（山西大学外国語学部外教）（清原は「五、印影調査から見えた錢瘦鉄の交流範囲」を執筆）が、第六章「小杉放菴・石井林響との交流」を堀川・段が、第七章「會津八一との交流」を堀川・王亜峰（山西大学外国語学部講師）が、第八章「実業家との交流」を堀川・清原が、第九章「おわりに」を堀川が、第十章に替えて「附録 錢瘦鉄が日本人に刻した印一覽表」を清原がそれぞれ執筆担当した。

（堀川英嗣）

第五章 橋本関雪との交流

一、はじめに

本章では、錢瘦鉄と橋本関雪の交流について述べていきたい。本章に関連した代表的な先行研究は、西原大輔『橋本関雪 ― 師とするものは支那の自然 ―』（ミネルヴァ書房、二〇〇七年）、柿木原くみ『日本における錢瘦鉄』（『書学書道史論叢』萱原書房、二〇一一年）、徐泳霞・張燕飛「橋本関雪の中国情縁」（『美術大観』一二期、二〇一五年）（米）Aida Yuen Wong“A Chinese Seal Carver in Japan: Qian Shoutie and

the Literati World of Hashimoto Kansetsu”（『世変・形象・流風：中国近代絵画 1796-1949』学術研究会論文集、財団法人鴻禧芸術文教基金会、二〇〇八年）などが挙げられる。また、藤枝晃「関雪画伯の印癖」（『生誕一〇〇年橋本関雪展』朝日新聞大阪本社企画部、一九八四年）、水野恵『橋本関雪印譜』（東京堂出版、一九九一年）は橋本の自用印から二人の交流に言及している。橋本は銭と日本文化人の交流を語るうえで欠かせない人物であるが、先行研究では銭を日本に招き自宅に住ませ、印を制作させたことに止まっており、具体的な交流については検討されてこなかった。

以下、「橋本関雪との出会いから銭瘦鉄来日時間の特定まで」、「銭瘦鉄を招聘した理由」、「銭瘦鉄と橋本関雪の交流」、「印影調査から見えた銭瘦鉄の交流範囲」に分けて、二人の交流について作品資料を駆使しながら具体的に論じていきたい。

二、橋本関雪との出会いから銭瘦鉄来日時間の特定まで

橋本関雪（一八八三—一九四五）、日本画家。神戸に生まれる。幼名は成常、後に関一と改める。父海関は旧明石藩の儒者で漢学、詩文に長じていた。雅号「関雪」は父海関が名付けた。母フジも書を嗜んだ。祖父文水も書を能くし、南画の山水を描き俳句も作った。橋本は漢学の素養あふれる家系に育ち、幼時より漢籍の教養を身に付けていった。とりわけ漢詩においては、二十七歳（一九一〇）『関雪詩稿』（自家版）、四十五歳（一九二八）『続関雪詩稿並南船集』（自家版）、五十六歳（一九三九）『関雪詩存』（斎藤恵太郎編）を出版し、また『瘦鉄印存』（一九二四）、『続関雪詩稿並南船集』（一九二八）序文を漢文で記す等、漢学の教養の高さが窺える。日本画は一八九五年（十二歳）より片岡公曠に学び、一九〇三年（二十歳）に竹内栖鳳の竹杖会に入門する。その後、文展への入選、入賞を繰り返し、三十歳を過ぎた頃には、文展無鑑査、文展の特選連続三年と、画壇で一定の地位を築いた。^①

橋本は訪中について「私の支那旅行は日常生活の一端に過ぎない^②」と述べており、一九〇五年（二十二歳）、満州軍総司令部囑託として日露戦争に参加し、満州入りしたのを皮切りに、生涯に三十数回にわたり訪中を重ねた。

図1 愈原の錢瘦鉄宛餞別作品（『語霜遺墨』
文明書局、一九四〇年）



図2 錢瘦鉄「仙艶図」（個人蔵）



図3 錢瘦鉄「七言絶句詩」（個人蔵）



図4 『関雪先生癸亥画集』
（高島屋呉服店美術部、一九三三年）



初めての訪中から十七年後の一九三二年、橋本（四十歳）、錢（二十六歳）の二人は上海で潘琅圃を通じて面識を得、翌年橋本に帯同され錢は初めて訪日する。錢の来日について、「錢瘦鉄年表」に具体的な日時は記されていない。これまでは、柿木原くみ（二〇一一）が『瘦鉄印存』の橋本序文から「四月に初来日した」とし、西原大輔（二〇〇七）は錢が橋本に刻した印の側款から「五月には白沙村莊に来ていた」と考察する等定論^④はない。しかし、今回錢家蔵品等からその来日時間を限定することができた。その証左となる資料は以下の三点である。

①は愈原^{*}の錢瘦鉄宛餞別作品（図1）である。愈は錢の師であることは前稿で述べたが、同作の落款に「臘瘦鉄東行時癸亥花朝遼五日」とある。癸亥（一九二三）花朝（旧曆二月中旬頃）の五日後、つまり旧曆二月二十日前後に錢に贈ったことが記されている。これは新曆の四月上旬にあたる。

②は現在確認できる錢が日本で制作した最初の作品^{*}「仙艶図」（図2）である。落款に「癸亥三月木仏画于白沙村莊」とあり、癸亥三月に橋本関雪の邸宅・白沙村莊で制作されたことがわかる。①より新曆三月は来日前のため、②の制作年は旧曆三月（新曆四月下旬から五月上旬）を示すと考えられる。

③は一九三三年四月二十五日に京都銀閣寺前において開催された錢の「篆刻頒布会」である。当時の報道から四月下旬に橋本の後援で開催されたことがわかる。

以上の三点から、錢は二三年四月上旬頃から二十五日までの間に来日したとわかり、これまでよりも一歩進んで来日時間を限定することができた。

尚、錢瘦鉄がこの時期日本に滞在していたことを示す資料には他にも「七言絶句詩」（図3）がある。落款には「昭陽大淵猷之歳、端午後一日、随橋公関雪舟游保津川、口占録呈」とあり、ここから昭陽大淵猷（癸亥・一九三三年）の端午一日後（六月十九日）に錢が橋本と京都保津川で舟下りをした際、即興で詠んだ詩とわかる。同年六月、橋本が『関雪先生癸亥画集』（図4）を出版した際、錢がその標題「関雪先生癸亥画集」を篆書で揮毫した。これらは、二三年の錢の日本での活動を知ることができる資料であり、橋本が早くから錢を認めていたことがわかる。

三、錢瘦鉄を招聘した理由

錢瘦鉄の来日時間についてはある程度範囲を絞ることができたが、そもそも橋本関雪はなぜ錢を日本に招聘したのだろうか。この点について橋本は明確な理由を述べてはいない。しかし、橋本は錢を招聘した年に発表した「思い出す事ども」の中で「今夏支那から篆刻家を同道した。主として昨年支那で求めた大部の印材を彫らすつもりであつた」と述べている。中国人の篆刻家の誰かに印を刻させたいという目的があつたようだ。とはいっても、橋本は錢の絵画、篆刻について、訪日の翌年、即ち一九二四年に出版された『瘦鉄印存』序文の中で「今、その絵画を見ると才能に優れ、美しく氣品があり、深く古人の意を得ている、刻印もまた高雅である」と述べており、当時二十七歳の錢を高く評価しているのは、早くからその才能を見出したためであろう。その後も橋本は「呉昌碩、王一亭、俞語霜の逝いた今日、近く上海画壇を牛耳るものは錢瘦鉄だと考えている」といい、また「支那には、清朝中期以後画家らしい画家はいない——錢君は若いに似合わず、仕事に熱心です」等芸術に対する姿勢も含めて一貫して高く評価している。

橋本は「支那へ行つてもあまり人との交渉をせぬ様に心がけて居た」と述べているように、人と知り合うことを嫌つていたようだ。⁽¹¹⁾しかし、橋本の娘高折妙子は「錢さんが日本へ来られたのは、父関雪が度々中国を訪ずれている間に幾度も錢さんと逢いその人柄に惹かれて日本に来ることを奨め、はるばると京都の父の家へ伴つてきたのである」⁽¹²⁾また、橋本の長男節哉は「にこにことして人懐っこい」⁽¹³⁾、「彼の作品の全てに現われる彼の珍らしくおおらかな人柄が堪らなく嬉しいのだ」⁽¹⁴⁾等、橋本の周囲の人たちの回想から、篆刻、絵画の腕以外にも錢の人柄にひきつけられるものがあつたと思われる。

以上から、橋本自身は明確に錢を招聘した理由を記していないが、その人柄と才能に負うところが大きかつたといえるだろう。その一方で、橋本帰一が祖父関雪について「家族の愛情の薄かつた関雪が物に対する愛着心を大切にすることを否めないことのものである。（中略）終生、常に身边に動物を飼っていないと気が済まなかつたという」⁽¹⁵⁾と述べているように、橋本は幼くして母に去られ、祖母や妹とも早くに死別し、終生一抹の「寂しさ」を抱えていたようだ。「自分の心奥に何等交渉もない同胞の多くこそ外国人であ

ると云うことを表白して置きたい⁽¹⁶⁾」という橋本の言葉からも、心置きなく話し合える外国人を、身近に置いておきたかったのではないかと推測する。

四、銭瘦鉄と橋本閑雪の交流

続いて、時系列に基づき銭瘦鉄と橋本閑雪との主な交流について考察していきたい（表1）。二人の交流は、一九二二年から四五年までの二十四年間に及び、その交流は上述の通り多岐にわたっている。その中から以下に（1）銭瘦鉄刻橋本閑雪自用印（2）頒布会・個展の後援（3）詩書画の交流（4）銭瘦鉄の題箋揮毫と「橋本閑雪先生略伝」の四つに分けて検討していきたい。

表1 銭瘦鉄と橋本閑雪の交流年譜及び関連作品

年	関連事項	関連作品
一九二二	秋、上海で銭瘦鉄と橋本閑雪は潘琅圃を通じて面識を得る。	
一九二三	- 三月、橋本は梅清・梅翀「山水合冊」を購入。銭が題箋「梅瞿山鹿墅山水逸品画冊。白沙村莊珍藏」を揮毫する（揮毫日不詳）。 - 四月上旬頃から二十五日までの間に銭は橋本の招きに応じ、訪日し白沙村莊（京都）に滞在する。 - 四月二十五日、橋本の後援で銭の篆刻頒布会を京都銀閣寺前で開催する。 - 六月、銭は橋本作品集『閑雪先生癸亥画集』の題字「閑雪先生癸亥画集」を揮毫する。 - 十月、杭州で行われた呉昌碩八十賀筵に、銭、春珊、唐吉生が橋本とともに参加する。 - この年、銭は橋本の後援により京都、明石で書画篆刻展を開催する。 - この年発行の中日美術協会会員名簿に橋本、銭の名が見られる。 - この年、銭は一九二二年夏に橋本が購入した石濤「杜甫詩意冊」の題箋「石濤山水神品画冊。橋氏白沙村莊珍藏」を揮毫する。	三月「仙艷図」（図2） 四月「白描觀音像」 端午「七言絶句詩」（図3） 冬至「山水合作」

図5 吳昌碩等の集合写真（『西泠印社』総第二十九集、西泠印社出版、二〇一一年）
一列目左から一人目は錢瘦鉄、五人目は橋本関雪。二列目左から四人目は吳昌碩。



図6 錢瘦鉄「蘇軾詩意」（『浙江駿成・二〇一五秋季芸術品オークションカタログ』）



「落款积文」以石濤和尚画法写東坡居士詩意、時客橋氏白沙村莊、闕逢困敦之歲大梁之月、金匱錢瘦鉄。

一九二四	- 四月十四日、『申報』（同年四月十六日）に錢が熊野丸に乗船し来日し、橋本を訪問する予定との記事あり。 - 十二月、『瘦鉄印存』（西泠印社）出版、橋本が序文を書く。 - この年、吳昌碩等の集合写真に錢、橋本も同席している（図5*）。 - 四月二十一日、錢は上海文監師路の日本人俱樂部において個展を開催する。橋本、吳昌碩等が題字を書く。 - 九月二十六日、橋本等の招きで錢は日本丸に乗船し日本へ。 - 十月二十一日、橋本、横山大観、小室翠雲等六氏が主唱して「錢瘦鉄雅印会」を開催する。 - 十二月、『中央美術』誌上で橋本等の画家が發起人となり「錢瘦鉄氏篆刻頒布会」を開催する。 - この年、橋本が訪中した際、再び錢を日本に招く。この時錢のために画室を設けたことを伝える。錢訪日。	大梁月「蘇軾詩意」（図6） 端午「秋山訪碑図」（図7） 八月「白沙村莊」（図8）
一九二五	- 三月、橋本、小杉放菴、小川芋錢、石井林響、森田恒友、錢、王二亭、劉海粟が古画の研究と鑑賞を目的として「解衣社」を結成する。 - 七月十一日、解衣社第一回展を東京銀座松屋で開催する。 - 六月二十三日、錢は『東京日日新聞』の「現代の支那画（付、日本画家短評）」の中で橋本を好きな画家の一人として挙げる。 - 七月、橋本『石濤』（中央美術）出版。錢の題字「石濤」隷書あり。 - 七月三十一日、橋本、錢、王二亭等が上海で解衣社展開催の協議を行う。 - 十月末、橋本、錢、趙古泥等は廬山（江西省）にある王翬と黄公望の墓を尋ねる。 - 十一月十七日、錢瘦鉄と唐吉生が宴会を開催し橋本等が出席する。 - 四月、橋本は上海文監師路の日本人俱樂部において個展を開催する。『上海漫画』（四月六日）誌上に錢の「橋本関雪先生略伝」が掲載される。 春、錢は橋本、谷崎潤一郎等の後援により東京、大阪で個展を開催する。 - 九月一日から五日、橋本、小杉放菴、山中蘭径等の世話で上野松坂屋の画廊において錢瘦鉄個展が開催される。 - 十二月、橋本が上海を訪問した際、錢を中心に歓迎会が開かれる。	春「西谿秋泛図」（図9） 春「応真図」（図10） 二月「花影鼠趣図」（図11） 七月「落落乾坤」（図12）
一九二六		
一九二八		
一九二九		春「松下高士」（図13）

図7 錢瘦鉄「秋山訪碑図」(『匡時上海・二〇一七秋季オークションカタログ(吉金楽石―金石家)』)



「落款积文」甲子端午、金匱錢厓写於洛陽白沙村莊。

図8 錢瘦鉄「白沙村莊」(『搜挖会・二〇一九年春季芸術品オークションカタログ(中国書画)』)



「落款积文」甲子八月、瘦鉄画於白沙村莊。

一九三〇	- 十二月二十四日、錢と陳小蝶は長崎丸に乗船し訪日する。 冬、橋本は上海に別荘を購入し、錢に周囲に柳と桐と白桃を植えることを頼む。 - この年、橋本、錢ともに「第五回日華(中日)絵画聯合展覽会」に出品する。 - 九月、錢夫人韓秀の追悼式の際、橋本が供花を贈る。	
一九三一	- 四月二十三日、錢は王一亭等十二名と共に「日華古今絵画展覽会」の展覽会視察団員の一人として、スケッチ行脚の帰途につく橋本とともに上海丸で来日する。 - 七月、橋本等の後援により、東京の資生堂で「錢瘦鉄氏小品画及篆刻遊印展覽会」が開催される。	夏「山雨乍晴」(図14)
一九三四	五月、橋本、錢は「日華聯合絵画展覽会」に出品する。	
一九三五	- 六月、錢は橋本宅に居す(来日日時不詳)、同年七月初めに帰国する。 - この年(？)、錢瘦鉄が橋本関雪蒐集の石造美術品を紹介する自家版冊子の標題「白沙村莊残石譜」を隷書で揮毫する。	
一九三六	春、橋本、錢は上海で面会する。 - 五月、古川北華を中心に、橋本、津田青楓、正宗得三郎、牧野虎雄、錢の六人で「幽興会」を結成し、同年五月二十九日に上野松坂屋で第一回展を開催する。	
一九三七	六月七日、幽興会第二回展を上野松坂屋で、七月十九日に名古屋松坂屋で開催する。	
一九三九	九月十六日、錢は張珊宛書簡の中で橋本について記す。	
一九四〇	五月十六日、錢は張珊宛書簡の中で橋本について記す。	
一九四一	- 五月二日、錢は張珊宛書簡の中で橋本について記す。 - 五月十五日、錢は橋本等の尽力により釈放される。	
一九四三	- 五月、橋本は「上海雜記」(『朝日新聞』)で錢について記す。 - 六月十四日、錢等は「現代日本絵画展」を參觀、橋本の作品を称賛する。 - この年、橋本関雪最後の中国旅行、橋本と錢瘦鉄は上海で面会する。	

図9 錢瘦鉄・橋本閑雪「西谿秋泛図」(『北京永楽・二〇〇七年中国現代畫画オークションカタログ』)



「落款釈文」丙寅春時客居五松居、蓬萊采菓客瘦鉄(以下略)。

図10 錢瘦鉄「心真図」(『中国嘉徳・二〇一五秋季オークションカタログ』)



「落款釈文」歲次癸兆撰提格暮春之初、時客白沙村莊(以下略)。

図11 錢瘦鉄・橋本閑雪・滕固・王濟遠・張辰伯・楊清磐・薛珍「花影鼠趣図」(『西泠印社・二〇一七年秋オークションカタログ(従国立芸專到中国美院——「国」美」九十年記念)』)



「落款釈文」此作為丙寅二月、初次東遊入洛、在橋本閑雪老友歡宴席上合作(以下略)。

一九四五	・二月二十六日、橋本死去。 ・三月二十日、上海で「橋本閑雪遺作展」を開催。銭は発起人の一人として、同会場に近作を展示する。	銭は橋本のために「挽聯」を揮毫する。
一九四七	・八月、橋本節哉は父閑雪の意志を継ぎ、銭を支援するために京都で「瘦鉄書額頒布会」を開催する。 ・この年、『閑雪先生素描集』(高桐書院)が出版される。銭は題字「閑雪先生素描集」を行書で揮毫する。	

表は以下の資料をもとに浅野泰之が作成した。関連作品とは銭が白沙村荘で制作、または橋本との合作で制作年が明らかでない作品を指す。

【日本】『閑雪先生癸亥画集』高島屋呉服店美術部、一九二三年。『読売新聞』一九二三年四月二十五日朝刊。「美術界消息」『中央美術』第十一巻第十一号、一九二五年。『読売新聞』一九二五年十月二十一日朝刊。橋本閑雪「身辺雑記四——最近支那記遊——」『美の国』第二巻第十二号、一九二六年。『東京日日新聞』一九二六年六月二十三日。『朝日新聞』一九二九年九月六日東京朝刊。『芸術』第十二号第十五号、一九三四年。『国画月刊』第一巻第八期、一九三五年。『新潟新聞』一九三六年十一月七日夕刊。『朝日新聞』一九四三年五月二十日朝刊。橋本閑雪著、橋本節哉編『白沙村人隨筆』中央公論社、一九五七年。『生誕一〇〇年橋本閑雪展』朝日新聞大阪本社企画部、一九八四年。『没後五〇年記念橋本閑雪展』朝日新聞社、一九九四年。『橋本閑雪・錢瘦鉄交流回顧展』橋本閑雪・錢瘦鉄交流展実行委員会、一九九四年。鶴田武良「研究資料公刊『日華(中日)絵画聯合展覽會出品目録』——近百年來中国絵画史研究七(続)——」『美術研究』三八四号、二〇〇四年。西原大輔「橋本閑雪——師とするものは支那の自然——」『ミネルヴァ書房』二〇〇七年。大阪市立美術館・渋谷区立松濤美術館「上海——近代の美術——美術館連絡協議会、二〇〇七年。堀川英嗣、浅野泰之、段毅琳「錢瘦鉄をめぐる日本文化人との交流について——一九二二から四九年を中心に——(上)」『公益財団法人 日本習字教育財団 學術研究助成成果論文集』六号、二〇二一年。

<http://www.hakusasonso.jp/collection/sentenses/-voll.html> (二〇二一年八月三日閲覧)。

<https://auction.arttron.net/paimai-art5159551375/> (二〇二一年八月三日閲覧)。

<https://auction.arttron.net/paimai-art5159551363/> (二〇二一年八月三日閲覧)。

【中国】『申報』一九二四年四月十四日。『申報』一九二五年九月二十六日。『申報』一九二六年十一月十八日。『上海漫画』一九二八年四月六日。『申報』一九二九年十二月十三日。『申報』一九二九年十二月二十五日。『申報』一九四三年六月十五日。『申報』一九四五年三月二十日。王中秀編著『王一亭年譜長編』上海書畫出版社、二〇一〇年。薛曄、錢晟編『鉄骨丹青 錢瘦鉄紀念文集』上海社会科学院出版社、二〇一九年。関連作品は挿図に出典を記した。

図12 錢瘦鉄「落落乾坤」(『蘇州吳門・二〇一〇年春季芸術品・中国名家畫画(一)オークションカタログ』)



「落款积文」丙寅七月時客白沙村莊錢厓(以下略)。

図13 錢瘦鉄「松下高士」(『浙江南北・二〇〇六春季芸術品オークションカタログ(中国書画(二))』)



「落款积文」己巳春写於白沙村莊瘦寿楼、黄山採葉客錢厓(以下略)。

図14 錢瘦鉄「山雨乍晴」(『朵雲軒・二〇一六春季芸術品オークションカタログ』)



「落款积文」辛未初夏、瘦鉄画於東山白沙村莊之瘦寿楼中

(1) 錢瘦鉄刻橋本閑雪自用印

錢瘦鉄が橋本閑雪に刻した印の数について現在まで定論はない。橋本帰一は六十六顆⁽¹⁷⁾、藤枝晃は六十顆⁽¹⁸⁾、水野恵は五十七顆⁽¹⁹⁾、Aida Yuen Wong は味岡義人の統計に基づき百顆⁽²⁰⁾と述べ統一しておらず、その内訳も明らかにされてこなかったが、本稿の附録では錢印譜及び文献資料を通覧し、錢の橋本への刻印を八十八顆確認することができた。橋本が所持した印は三百九十顆余りとされているので、その四分の一が錢の刻といえる。刻印内容は姓名から雅号、齋号等の多岐にわたり、最も初期の印は二人が出会った二三年秋に刻された「書研家風」印である。その他、側款を確認できていないため年代が不明な作が多いが、橋本帰一は「一九二二年頃の二十歳代の作品と、昭和以降の四十歳ころの作品が多い」と述べている⁽²²⁾。それは、錢が初来日した頃と日本で逮捕される直前であろう。実際に、京都に到着後「錢さんはいつも種々の印材を沢山積んである大きな机に向って、背をまるめて、その中の一つに一心に何かを彫っていた⁽²³⁾」という高折妙子の回想もあり、来日当初は多くの印を刻していたことが想像できる。さらに、錢は橋本の長男節哉に五顆、娘高折妙子には二三年六月に「妙子」の小印を贈っている⁽²⁴⁾。

(2) 頒布会・個展の後援

橋本閑雪は周囲の人々に錢瘦鉄の印を推める等⁽²⁵⁾、その芸術を広めようと努め、来日間もない二三年四月二十五日に京都銀閣寺前において「篆刻頒布会」を開催した。

錢瘦鉄⁽²⁷⁾の篆刻頒布会

吳苦鉄(昌碩) 冰鉄を併せて江南の鼎足と称せられたる錢瘦鉄氏が橋本閑雪氏に伴われて来朝したのを機会に鉄筆の傍ら画を能くする氏の作品を京都銀閣寺前閑雪氏で頒つ

◇石印は一字白文一円、朱文二円(象牙、竹、木は同額)

◇銅印は一字白文三元、朱文六円(玉、水晶は銅印の倍額として朱文は半円を加う)⁽²⁶⁾

また、二五年十月には橋本等が主唱して「錢瘦鉄雅印会」を開催した。その際、篆刻の他に書画の揮毫にも応ずる旨が記されている。⁽²⁷⁾ 同年十二月、『中央美術』誌上においても橋本等は「錢瘦鉄氏篆刻頒布会」を開催している。⁽²⁸⁾ このように、橋本は錢の来日から二、三年の間は頒布会を通じて周囲へ推薦しようだ。さらに日本画壇で地位を確立していた橋本が積極的に頒布会を開催したことは、錢の名を日本で広めるには絶大な効果があったであろう。

潤格の推移をみると、二五年十月「錢瘦鉄雅印会」では、「石印、象牙印、木印とも白文一字三円、二字五円、四字十円。朱文一字四円、二字八円、四字十五円とし銅印は倍額（極細字や二寸角以上も同じ）」とある。また、會津八一は二九年九月三日、吉江喬松宛の書簡で錢の印の価格について「一字白文三円、朱文四円」⁽²⁹⁾、三五年一月十四日、丹呉康平宛の書簡で「一顆一四五円から二十円位に whichever も游印」⁽³⁰⁾と記している。当時の中国人篆刻家の日本での潤格と比較してみると、三八年に齊白石の印は「印材の外一字十円」⁽³¹⁾であり、一概に錢の潤格が齊よりも安価な設定であったとはいえないが、これらは当時の錢の日本市場での価格を伝えている。

次に、錢の個展について述べていきたい。管見によると、橋本が中心または後援者となり開催された錢の個展は四度（二三年、二九年（二度）、三一年）ある。まず、一度目は二三年、橋本の後援で京都、明石で書画篆刻展を開催した。同展については「錢瘦鉄年譜」に記されているのみで、詳細は不明。日本で開催された最初の個展である。

二度目は、二九年春に橋本、谷崎潤一郎、澤村幸夫等の後援で東京、大阪で個展を開催した。⁽³²⁾

三度目は、二九年九月一日より五日まで上野松坂屋の画廊において開催された日本での三度目の個展。⁽³³⁾ 橋本以外に洋画家の小杉放菴、美術研究家の山中蘭径等も世話人として名を連ねている。『文芸時報』⁽³⁴⁾には黄山に画趣を求めた作が多いと報道がある。

四度目は、三一年七月十一、十二日の二日間、資生堂ギャラリーにおいて「錢瘦鉄氏小品画及篆刻遊印展覧会」が開催された。後援者として、橋本の他に、外狩顕章、小川芋銭、奥村久朗（実業家、一八六八―一九三三）、汪榮宝（中国政治家、一八七八―一九三三）、河井荃廬、亀島広吉（三井銀行取締役、一八六七

図15 錢瘦鉄・橋本閑雪「観瀑図合作」(個人蔵)



「釈文」 水声出山山住此。閑雪題字。

図16 錢瘦鉄・橋本閑雪「山水人物合作」(『中国嘉徳・嘉徳四季二〇〇五オークションカタログ 中国書画二』)



「落款釈文」 閑雪題字 (中略) 金匱錢厓並題。

―?―、高草平助(虫明焼研究家か、生卒年不詳)、高嶋菊次郎、土屋計左右、矢部滋(生卒年不詳)、山中蘭径、正木直彦、小杉放菴、會津八一、白根松介(政治家、一八八六―一九八三)、森田恒友、関屋貞三郎(政治家、一八七五―一九五〇)の十八名が名を連ねている。⁽³⁵⁾ 日中聯合展覽会の中心メンバーであつた汪榮宝、正木直彦等も名を連ねており、錢が日本画家以外にも政治家、実業家等多くの日本文化人と交流していたことがわかる。また、錢は個展以外にも、日中共同開催の展覽会、日中共同設立の書画団体に積極的に参加したことは前稿で述べた。

さらに、橋本死後も息子節哉は父の意志を継ぎ、京都で「瘦鉄書額頒布会」を開催した。

橋本は錢の後援者として、錢の芸術を広めるために頒布会、展覽会を催した。これらの活動を通じて、錢は多くの日本文化人と面識を得ることができたのであろう。

(3) 詩書画の交流

錢と橋本は共に詩書画に精通しており、それは作品にも現れている。中でも書画の合作は現在までに十二点⁽³⁶⁾確認することができ、その特徴として以下の二点を挙げるができる。

一つ目は、橋本は「私自身は歳時月日は多く直写するようにしている」⁽³⁷⁾と述べているものの、十二点中、年月日が記されている作品は四幅(一九二三年の二幅、一九二六年の二幅)のみで、その他は日付が記されていない点である。最初の合作は二三年の「白描觀音像」⁽³⁸⁾である。錢が觀音像を描き、橋本が題賛した。錢の落款に「昭陽大淵猷之年四月維夏」とあり、閑雪の題賛には「閑雪識於白沙村莊」と書いてある。昭陽大淵猷(癸亥・一九二三年)四月に白沙村莊で制作されたことがわかる。また、二六年以降の合作には日付が記されていない。錢と橋本の交流の初期は記念として月日を記していたが、日常的に合作が行われるようになったため、自然と年月日を記さなくなったのだろうか。

二つ目は、一点を除くすべての作品に橋本が題跋を記している点である。二人の合作は基本的に橋本一人の題跋、或いは二人の題跋が記されており、錢一人の題跋作品は少ない。例えば「^{*}観瀑図合作」(図15)、^{*}「山水人物合作」(図16)である。また作品自体の存在は不明であるが「閑雪詩存」に「金沢客舎。中村魁

図17 錢瘦鉄・橋本閑雪「牧牛図合作」(個人蔵)



〔釈文〕閑雪、瘦鉄合作於淞濱。

図18 橋本閑雪「為錢夫人作墨梅図」(個人蔵)



〔釈文〕飲酒且憂国、対花方痛時。春風傷白髮、狂唱少年詩。痛字錯感、錢夫人指笑閑雪老狂。

車来訪。席間同瘦鉄作画。余書其余白。(以下略)⁽³⁹⁾という詩題も確認できた。しかし、「*牧牛図合作」(図17)のみ、「閑雪、瘦鉄合作於淞濱」と錢の題跋だけが書かれている。橋本は「画面に詩を題する場合とは特に切り離して考えることが出来ぬ。詩のみならず落款も印章も画面の一部であり、韻律の連続である」と、題跋に対する強いこだわりを有していた。合作も詩書画がそろって初めて一つの作品と考えていたことから、橋本主導で制作が行われていたようだ。また、作品調査の過程で橋本、錢を含む多人数での合作「花影鼠趣図」(図11)も確認できた。橋本が上海を訪問した際、錢主催で歓迎会が開かれ、そこでも書画合作が行われる等、書画合作が頻繁に行われたようだ。

次に、詩の交流についてみていきたい。二三年に橋本が錢等と共に杭州に出かけた際「錢君は舟過黃葉村と吟じた。私は家在白花塢と和した⁽⁴²⁾」と詩の応酬をしている。また橋本が錢の妻張珊に与えた「*為錢夫人作墨梅図」(図18)が伝わる。収蔵者錢維多氏の父錢大札氏(一九二七—二〇一六、錢瘦鉄の甥)は生前同作について「四三年頃、橋本先生は上海の自宅を訪問されたことがあります。家で食事をし、お酒を飲んでから、裏打ち済みの宣紙に描かれました。その時に鈴印はしませんでした。数年後に錢瘦鉄の印を捺した」と語っていたようだ⁽⁴³⁾。この作品は、錢が橋本を招待し、家族ぐるみの付き合いをしていたことを示す作品である。作中の詩は『閑雪詩存』に「題北京客舍壁」という題で収録されている。「飲酒且憂国、対花方感時。春風傷白髮、狂唱少年詩(酒を飲むも国を憂う、花に対して時の情勢に心が動かされる。春風は白髪を傷つけ、気ままに少年の日の詩を歌う)」⁽⁴⁴⁾。という内容からも、当時の橋本の心境を窺うことができる。橋本は錢家で酒を酌み交わし、とても楽しい気分であったと想像される。この作品が制作された一九四三年、上海は日本軍占領下にあり、抗日氣運が刻一刻と高まっている時期であった。橋本は年老い次にいつ錢と再会できるかわからないと思い、そんな憂いを紛らわすためにこの詩を書いたのではないだろうか。当時橋本は自用印を持ち合わせていなかった点から、橋本は酒に酔い興に乗り、錢夫人張珊に書き与えたようだ。この年を最後に橋本は再び中国を訪れることはなかった。詩書画に精通していた者同士だからこそ成立した文墨交流であり、二人の友誼の証であった。

図19 梅清・梅翀「山水合冊」題箋 (https://
auction.arttron.net/paimai-art5159551363/
二〇二一年八月四日閲覧)



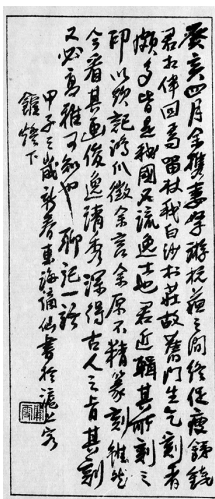
図20 石濤「杜甫詩意冊」題箋 (https://auction.
arttron.net/paimai-art5159551375/
二〇二一年八月四日閲覧)



図21 錢瘦鉄「橋本閑雪先生略伝」『上海漫
画』一九二八年四月六日



図22 橋本閑雪「序文」(『瘦鉄印存』西冷印
社、一九二四年)



(4) 錢瘦鉄の題箋揮毫と「橋本閑雪先生略伝」

錢は橋本に印を刻しただけでなく、画集、書籍等に題箋の揮毫もしている。中でも注目したいのは、橋本旧蔵の梅清・梅翀「山水合冊」(図19)と石濤「杜甫詩意冊」(図20)の題箋である。橋本が自ら題字を書かず、錢に依頼したのは、それだけ錢の書を高く評価していたからであろう。

最後に錢「橋本閑雪先生略伝」(図21)についてみていきたい。橋本は二八年四月に上海日本人俱樂部で個展を開催した⁽⁴⁵⁾。それに関連して四月六日の『上海漫画』に「橋本閑雪先生画展特刊」が組まれ、特集の中で錢は「橋本閑雪先生略伝」を、劉海粟等も橋本の紹介記事を執筆している。橋本は『瘦鉄印存』^{*}「序文」(図22)等、錢について直接言及した文章は数点確認することができる。しかし、錢が橋本について直接記した文章は、作品批評を除くと「橋本閑雪先生略伝」のみである。文中では橋本の略歴と共に詩、絵画に対する評価、出会って十年近くになる事等が記されている。ここで、橋本の詩作と人となりについて記している部分に注目したい。錢は「その詩名は知られており、趣きのつるままに筆をとり詩を書き始めれば、突然風雨が舞うようである。詩の格律にはこだわらず、盛唐の詩を自得する⁽⁴⁶⁾」とあるように、詩作についても高く評価し、その人となりについては「大声で歌を歌い、奇気を表わし、自由な境地で、晋人の品格を備えている⁽⁴⁷⁾」と記している。錢の目に橋本は自由で大胆な人物に映ったようだ。このような略伝は橋本について理解をしていないと執筆することができない。特に詩に対する評価は、頻繁に書画合作をしていた錢だからこそ、実感のこもった評価ができたのであろう。

五、印影調査から見えた錢瘦鉄の交流範囲

錢が橋本に少なくとも八十八顆刻したことは先に述べたが、ここではもう少し錢がどのような人たちに印を刻していたのかを考察していきたい。

二年間の調査を通じて、錢が日本人に刻した印は現在までに計一三〇名四〇七顆を確認することができた(附録「錢瘦鉄が日本人に刻した印一覧表」を参照)。その中には、印影のみのもの、側款と印面を確認できたもの、文献資料のみに記されていて実体が確認できなかったものがある。これらの整理を通じて、錢

瘦鉄と日本人の交流がどのように広まっていったのか、その交流の広がりがある程度明らかにすることができる考えた。

銭が二二年秋に橋本に刻した「書研家風」印は現在判明している最も早期に銭が日本人に刻した印である。銭は日本で開催された「第二回日華（中日）絵画聯合展覧会」（一九二二年五月二十五日）に出品していたが、同展に参加するために訪日していた中国人画家たちが帰国する際に、橋本も同船し上海へ赴き銭と面識をもった。また、同年春には台湾生まれで日本で半生を過ごした收藏家の林朗庵に「林朗庵鑑蔵印」を刻している。

日本人に刻した印が銭の印譜に登場するのは、二十七歳の時に出版した『瘦鉄印存』（西泠印社、一九二四年）からである。呉昌碩の題字、橋本と曾熙の序文、符鉄年の跋文がある。書画篆刻潤格と連絡先として友人の唐吉生の住所と電話番号が記されている。中国人からの依頼を見据えてのことであろう。橋本の序文には、「一九二三年四月に妻子を携えて杭州、蘇州を遊覧し、銭瘦鉄を伴い白沙村荘に戻ったこと」、更には「古い門弟の中で銭瘦鉄の刻印を依頼する者が頗る多かつた」と記されている⁽⁴⁸⁾。銭の刻印はまずは橋本への刻印から始まり、京都を中心とした橋本の弟子へと広まっていったようである。

そのことを裏付けるように、制作年を確認できた印を見ていくと、一九二三年春には橋本へ「走井居」朱文印、そして五月には白沙村荘にて橋本の弟子野原櫻州をはじめ、金島桂華、上村松園など多くの日本画家に印を刻している。これらの日本画家と橋本の関係をみていくと、竹内栖鳳門下の同門や橋本の弟子であるが、主には京都市工芸美術学校に関連した顔ぶれとなっている。正に、当時の橋本の交遊圏に銭を紹介したのであろう。

その他にも書家・漢学者の富岡鉄斎や長尾雨山、仁賀保香城、更には洋画家の岸田劉生や中村不折、片岡美登への刻印が見られる。

そして二四年に銭が銀座松屋で個展を開催し、二五年には石井林響、小杉放菴、高嶋菊次郎等の関東一帯の文化人、そして二六年には有島武郎、谷崎潤一郎といった文学者、二九年には坪内逍遙、會津八一等の関東の学者と面識を持つに至った。

また錢瘦鉄は『書苑』雑誌に参画していたにもかかわらず、書道家に刻した印は、日本画家に比べると非常に少ないことも判明した。更に書家では泰東書道院の職員が多く、これは三一年三月二十七日からはじまる泰東書道院訪中の折に刻したものと考えられる。当時は河井荃廬、江川碧雲、川村驥山、仁賀保香城、生田太璧、柳田泰麓、武田霞洞、松本翠芳、柳田泰雲、西川吉羊、西脇呉石、山本李邨、三浦蘭英の十三人が上海から蘇州に到着し、二十八日には駐日公使の汪榮宝の紹介により、滄浪亭美術専門学校にて宴会が催されたとある⁽⁴⁾。

その二週間後の記事には泰東書道院一行と錢との交流を示す手がかりが記されている。「錢瘦鉄鐫印臂酸（錢瘦鉄は刻印し臂が痛い）」によると、河井一行は江東（現上海浦東地区一帯）を観光し、西華徳路の某ホテルにて「連日瘦鉄に一寸の巨印を争い求め」、その数は十数顆にのぼり、錢は日夜急ぎ刻し腕が痛くなるほどであったという⁽⁵⁾。附録に挙げた川村、仁賀保、西脇等への印はこの時に刻したものであろうか。また河井、西川といった書壇の中心人物はこの時、錢に刻印の依頼をしなかったのであろうか。現在までに錢が彼らに刻した印は見られない。印影調査は今後も継続していきたい。

六、おわりに

本章では錢と橋本の交流について当時の新聞、雑誌記事、作品資料から考察を行い、これまで語られてこなかった二人の交流の詳細を論じた。

錢と橋本の交流は一九二二年から四五年まで、ほぼ毎年途切れることなく続いたが、本章では錢の初来日の時間については、これまでよりも一歩進んでその時期を限定した。橋本が錢を招聘したのは、早くから錢の才能を見出した以外にも、その人柄にひきつけられるものがあつたと考えられる。二人の交流について、橋本は錢の後援者として、錢の芸術を広めるために頒布会、展覧会を催し、その芸術を広めようと務めていたことを指摘できた。また、錢と橋本は詩書画に精通していたことから、頻繁に書画合作が行われ、そのなかにも交流の軌跡が認められた。更には錢の印影は橋本を中心として、錢がどのような日本人と交流を行っていたかを示唆するものであつた。

錢と橋本の交流は文墨の相互交流には止まらなかった。錢の絵画に対して「石濤の画風を憧憬している事が、明らかに窺えるが、又一面に於いて関雪氏の影響が多分に見られる⁽⁵¹⁾」とあるように、錢は橋本からの影響を受けていた。例えば、錢の「小鳥石榴」(図23)は落款に「以石濤画法図之」と書かれ、石濤の画法によって描かれたことが記されているが、淡い色づかいには橋本の影響をうかがわせる。また、澤村幸夫は「『勉強するんですよ』と、幾度か関雪氏が戒めていたのを、私は、傍で聞いていたこともある⁽⁵²⁾」と述べているように、二人には師弟関係という一面もあった。

(浅野泰之・清原健)

第六章 小杉放菴・石井林響との交流

一、錢瘦鉄と小杉放菴の交流

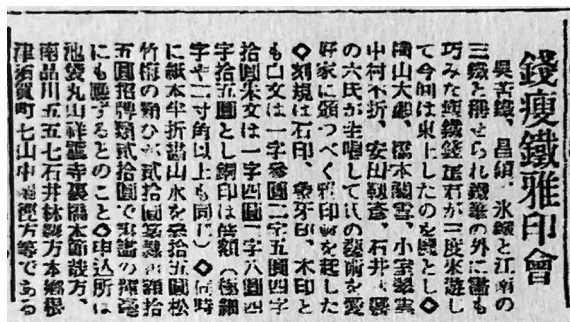
これまで錢瘦鉄と日本文化人の交流は、橋本関雪と會津八一を中心に語られ、小杉放菴や石井林響等との交流についてはあまり語られてこなかった。本章では、錢瘦鉄と小杉放菴、石井林響の交流について、その出会いから交流の模様、錢に対する評価等について、小杉放菴記念日光美術館所蔵『小杉放菴日記』抜粋(迫内祐司氏整理、以下『小杉日記』)等を用い検討していきたい。

(1) 小杉放菴と錢瘦鉄の出会い

小杉放菴(一八八一—一九六四)、栃木県日光の人。日本画家。本名は国太郎、別号に未醒、放庵。享年八十二歳。錢瘦鉄の十六歳年上。長男一雄は東洋美術史家で、早稲田大学にて會津八一につき学んだ。

本章に関連する先行研究は蔡家丘の「小杉放庵の『東洋趣味』について」(二〇一四)のみである。蔡は『小杉日記』及び『申報』を手掛かりに、一九二六年から二九年における小杉と錢その他中国人との交流について論じている⁽⁵³⁾。しかし、蔡文では出会いの日時について「知られていない⁽⁵⁴⁾」と記している。二六

図24 「錢瘦鉄雅印会」



年二月から二人の交流は「頻繁に行われた」とあるが、まずは二人の出会いの日時の確定から始めていきたい。

小杉が初めて銭について記したのは、『小杉日記』二五年十二月三日である。そこには、「夜山中蘭徑、錢瘦鉄を伴い来る」とある。この時期の銭に関する記事を見ると、二五年十月二十一日付『読売新聞』に「^{*}錢瘦鉄雅印会」（図24）と題した篆刻作品頒布会の通知があり、

「瘦鉄銭厓君が三度来遊して今回は東上したのを機とし、横山大観、橋本関雪、小室翠雲、中村不折、安田鞠彦、石井林響の六氏が主唱して氏の芸術を愛好家に頒つべく雅印会を起した⁽⁵⁵⁾」とある。

この時銭と小杉はまだ面識がなかったようで、小杉の名は記されていない。すると、やはり二五年十二月三日を二人の出会いの日とするのが相応しいように思われる。そのことを裏付ける資料を見つけることができた。小杉「界方事件⁽⁵⁶⁾」である。同文は、小杉が友人から『聊齋志異』にある「界方」一語の意味を聞かれ、それについて銭に尋ねようと四苦八苦しながら手紙をしたためたという随筆である。以下に順を追ってみていきたい。

冒頭部分、友人に「界方」一語の意味を聞かれた小杉は、「先夜橋本君の紹介で錢瘦鉄という支那の刻印の名人が来た、まだ東京に居る筈だから、聞合してみようか」とすぐに銭の名を思い浮かべている。これは小杉が発表した文章の中で、初めて銭について記した一文である。当時二人が出会って間もなかったこと、橋本関雪の紹介によるものだと思われる。小杉は中国語例文集『現代支那書翰文例解』（一九二四年、文求堂書店）を片手に、錢宛の手紙を書き「根津の山中氏氣付」で発送した。「山中氏」とは橋本と交遊があり、銭の展覧会世話役も担った美術研究家の山中蘭徑（一八八三—一九七五）を指す。この時の小杉の錢宛書簡の内容は『小杉日記』十二月八日付に、

夜錢瘦鉄に手紙をかく。瘦鉄先生左右。啓者。前夜駕臨、柴門生光、高風余韻、甚切懷思。茲在一事瑣瀆清神。頃僕読『聊齋志異』織成篇中、有「洞庭龍王賜書生某水晶界方云々」之条。「界方」二字僕迂愚不得詳解。竊思中国文房常用之物乎。否乎。並其形状用法、伏乞指教。

（瘦鉄先生。先日はお越しいただきまして、家門が光り輝くようでした。高雅な余韻を切に思っております。ここにひとつお手を煩わせたいことがあります。近日、『聊齋志異』織成篇を読みました。その文中に「洞庭龍王が書生に水晶の界方を与えた云々」とあるのですが、「界方」二字についてわたくしには意味が分かりかねます。一般に使用される中国の文房具かと考えておりますがいかがでしょうか。その形状や用法をお教え頂ければ幸いです）

と非常に丁寧な漢文で書かれている。「界方事件」には続けて、「此山中氏が前夜鉄君（マツ）を連れて来た仁だが……錢君との筆談で、小生の苦心慘憺を笑いながら見て居るという人の悪い先生だ」とある。「前夜」とは『小杉日記』にある一九二五年十二月三日を指す。ここから小杉は橋本から錢を紹介され、橋本と懇意であった山中が錢を伴い小杉宅を訪れたという流れが明らかになり、初対面の日時を確定することができた。

「界方事件」では「今朝になりて家の娘が、錢さんと水谷さんとが来ましたと云う……錢さんは小生の頼んだ放庵半禿の印を持ってきた」と続く。同様の記載が『小杉日記』十二月十日に「錢君来る。放庵半禿の刻印持参」とあり、「界方事件」の「今朝」が十二月十日だとわかる。三日の初対面から一週間後のことであった。

錢が小杉に刻した印は計十二顆見られ、そのうちの五顆に年款が刻されている。もつとも早期の印は二五年の「^{*}放庵半禿」朱文印（図25）である。

「水谷さん」とは小杉の門人・水谷清（一九〇二―七七）である。二人の訪問について小杉は、「橋本君の息子さんが池袋に棲んで居る、錢さんは其処の賓客、水谷は即ちヤングハシモトの友人なるほど二度目の錢さんの田畑訪問につかまつたわけと合点が行く」と記している⁽⁵⁷⁾。「ヤングハシモト」とは洋画家で、当時池袋に居していた橋本の長男節哉（一九〇五―六五）である。一九二五年十月から二六年二月まで、錢は東京滞在の折は、池袋の橋本節哉宅や後述する石井林響宅に居していたようである⁽⁵⁸⁾。

『錢瘦鉄年譜』からは一九二五年には二月から九月まで中国に帰国しており、同年十月から二六年の二月

十四日頃まで日本に滞在、再度帰国し同年五月初旬の再来日となる。

(2) 解衣社結成前後

錢と小杉は一九二六年二月頃から頻繁に交流を重ね、二月三日、五日、七日、九日、十四日と立て続けに面会を重ねていたが、それは「解衣社」結成へと繋がっていく。『小杉日記』二月十四日には「錢瘦鉄君の為に祖道の宴。石林、森恒、外狩君等。日支南画展の名を、橋本君の解衣社と名づく……」と、この時に解衣社と命名されたことがわかる。同展は二六年四月二十五日に中国側作品が上海で展示され、同年七月には銀座松屋で「解衣社展」が開催される。

解衣社展について小杉は、錢送別会の一週間後の二月二十七日に行った談話「放庵雑話」⁽³⁹⁾の中で言及している。以下に、同文を参考にしながら当時の小杉と錢の交流を検討していきたい。同文の冒頭ではまず、

錢瘦鉄君といえば、支那人には珍しい純良な好人物で、日支聯合南画展を開きたいという事で、日本側では橋本関雪、小川芋錢、森田恒友、石井林響の四君に私とて解衣社という小集も出来たので、錢君はこれから支那側をまとめるといつて数日前支那へ帰った。

と記しており、『小杉日記』二月十四日の記述と一致する。「支那側をまとめる」というのは、『読売新聞』「同時に支那側の愛蔵家から特に借りて来る筈の石濤とか八大山人の傑作展観を……」⁽⁴⁰⁾のことであり、解衣社展に併設する作品を中国收藏家から借り出してくることである。続けて、

錢君の為に永代橋の都鳥で、石井、森田両君と私とで送別会をした、その時都鳥の主人から頼まれて、錢君は額を書く。石井林響君も石濤上人の飛下一舟来という語を書いた。

とある。森田は森田恒友のこと。森田は石井林響の逝去後、「上海の画家錢瘦鉄氏来京の時、未醒、素心庵

図26 錢瘦鉄と韓秀の結婚報道



▲婚禮誌 五月二十四日金石家錢瘦鉄、與松江韓潤秀女士、行結婚禮於靜安寺路海軍總會、冰人為孫雪泥楊了公二君、請會慶賀君證婚、來賓多數爲海上文藝美術兩界名人、並有中日海軍界要人、頗形熱鬧、(見圖)

などと共に一夕隅田河畔に集まり、其時は専ら画談をしました」と回想しており、彼らはしばしば永代橋のかかる隅田川一帯で画談に花を咲かせていたようだ。⁽⁶¹⁾ 解衣社の結成や錢の送別会については、『小杉日記』二月十四日と一致している。尚、前稿第二章で解衣社の出品作点数について、「日本側は各二点、中国側は各一点を出品しているのに対して、錢瘦鉄は一人で二十点あまり出品している」⁽⁶²⁾と記したが、小杉によると、石井宅に寓していた錢について、

この中華の賓客は、おしきせ物らしい、ネルのつつっぽうを着て、書ための画三四十枚をつかんで出て来た。……その内この瘦鉄子のかきための絵は、解衣社後援という名目で展観される事になつてゐる。⁽⁶³⁾

とある。ネルはネル生地、つつっぽうは筒袍、即ち、袂がない筒形の袖。日常着のこと。錢が品川の石井林響宅に居していた際に書き溜めた作品を、解衣社展に展示した。これが、錢の出品点数が突出していた理由である。小杉が錢を石井宅に訪ねたのは二六年五月十日のことである。『小杉日記』には「一度かえりて又品川の石井君宅を訪い、錢君将来の新古の支那南画を見る。是のみにては解衣展の主体となすに足らぬほどの下作多し」と記している。小杉は「支那現代の南画」の中で呉昌碩の作品を「呉毒」と称するなど海派作品に対する評価は低く、錢が上海から借りてきた現代作家作品に満足できなかったようだ。

ここまで『小杉日記』等から小杉と錢の出会いの日時を確定し、「解衣社」結成に向けて頻繁に交流を行っていたことを記した。しかし二六年五月十日以降しばらくの間、『小杉日記』に錢に関する記述はない。

次に錢が『小杉日記』に記されるのは三年後の二九年八月十二日のことである。しかし、その間も二人の交流が途絶えたわけではなかった。二七年五月二十七日に錢は韓秀と結婚(図26)した。錢三十一歳のことである。小杉『支那の青年画家』には、「支那の画友錢瘦鉄から、新婚の通知とともに、老友劉海粟君觀光貴国諸希相援為禱草此上言云々と云う手紙があつた」⁽⁶⁴⁾とある。同文は二七年八月に発表されているこ

とから、銭は結婚式の後間もなく小杉に新婚の知らせを送っていた。

（3）銭瘦鉄拘留に関連した小杉放菴の動き

次に銭の拘留をめぐる小杉の動きを検討していきたい。前稿では当時の公式文書及び銭の家族宛書簡等を用い考察を加えてきたが、これまでに池田古日の土屋計左右宛書簡以外に、銭の周囲の人物がどのように銭の釈放に尽力したか、その具体的な動きは明らかになっていなかった。しかし、『小杉日記』を通じて、これまで知られていなかった銭拘留をめぐる小杉らの動きがわかってきた。

一九三七年八月十日に銭は治安維持法違反等で拘留された。『小杉日記』八月十五日に、「東京より山中氏たよりありて、銭瘦鉄スパイのけん凝^{けんぎょう}にて拘留されるとあり」と、五日後に山中から知らせが届いた。この知らせを受ける前日、即ち十四日に小杉は荒井寛方宛に銭の刻印を送っている。小杉の荒井宛書簡（図27）には「瘦鉄子刻印出来に付きし上申し候。十金にてよろしきかと存候。天下さわがしきこと也。十四日。放庵。寛老兄」とある。同封された「荒寛」朱文印の印影には銭の手で「丁丑（一九三七年）夏、叔厓為荒井道長作」と識語が付されている。翌日に銭拘留の知らせが届くとは、この時の小杉には思いもよらなかったであろう。この日から九月まで、『小杉日記』には度々銭についての記述がある。

翌日八月十六日の『小杉日記』には、「湯沢氏あて手紙を持参さす。瘦鉄の為也」とある。湯沢三千男（二八八八―一九六三）はこの時、内務次官（当時の官僚の最高位）を退任したばかりの有力者であった。小杉は同郷の湯沢を通じて銭に便宜を図ろうとしていたようだ。続けて、『小杉日記』八月十八日には「瘦鉄の事容易ならぬもようと感じ、夜十二時にて立つ」と事態の深刻さを思い、小杉は夜行列車に乗り東京に向かった。翌日『小杉日記』八月十九日には東京に到着し、その足で、

會津氏と共に湯沢氏の紹介の警視庁特高部長菊地氏を訪う。きけば瘦鉄のスパイの実情、既に委曲調べられあり。……只我等の疎愚迂遠を恥るべきのみ。加え瘦鉄罪状を明白につきつけられ、是迄とや思ひけん、卓上の鉄製灰皿をもつて主任警部の眉間をたたき破り。其人目下入院中というに到つては、

彼の生命も又知るべからざる也。會津氏と土屋氏の会社を訪い、又唐沢氏を訪いて別る。

とある。會津八一と小杉がともに警視庁の特高部長菊池、内務省警保局長の唐沢俊樹、土屋計左右を訪ね、情況把握や対策に奔走している様子が認められる。当時の會津の動きについて、これまでは大鹿卓が、「（會津）先生は錢さんの解放について心労し、わざわざ足を運んで要路の某氏に諄々と道理を説いて運動されたという。これまた先生の師弟の情に篤く正義に厳なる所以であつた」と記していたが、具体的な動きは不明であつた。しかし、『小杉日記』の記述から初めて、小杉とともに會津も実際に動いていたことを裏付けることができた。小杉の記す「卓上の鉄製灰皿をもつて主任警部の眉間をたたき破り」は、前稿で挙げた錢の殺人未遂に関する四つの見解の内、上田操の見解を補足するものとなつた。⁽⁶⁵⁾『小杉日記』八月二十日には、小杉は東京を起つが「瘦鉄のこと念頭を往來す」とあり、錢のことが頭から離れず心配している様子がわかる。

続いて『小杉日記』九月五日に、「予が錢瘦鉄にやりたる手紙について、おついで(66)の節登庁ありたし。処理し置きたしと菊池氏の手紙ありたれば、何やら気がかり故」と、小杉は警視庁特高部長の菊池から錢宛の書簡に関して連絡を受け再び東京に向かつた。「おついで(66)の節」と菊池は小杉に対して非常に謙虚な姿勢を保っている。九月六日東京に到着し、「朝菊池氏に電話す」るも六、七日と不在であつたため菊池宛に速達を発送した。

『小杉日記』九月八日には、小杉が警視庁で受けた取り調べについての詳細が記されている。以下に抜粋する。

朝菊池氏より電話ありて警視庁に出かく。外事課へ直接に行く。小さき室に通さる。肥えて体格よろしき警部氏の取調べを受く。……要点は予が錢瘦鉄に与えたる新聞抜卒の書翰についてなり。先の瘦鉄の家宅搜索ありたる時、此の書翰出で、瘦鉄のスパイ行動に触れたるものとしてすぐにも処理さるべかりしを、菊池氏、予の仕事と経歴とを知り居たる為に「おついで(66)の節」となし置かれたる也。新

聞拔卒は、瘦鉄旅中、此の事変に際会してさぞや不安に暮し居るべく、日語も完全には話せず、仮名交りの新聞も読めざらんといい、二三新聞記事を漢訳して送りたる也。一はロコウ橋事件について北支の連中、再々翻覆不信の為、満州、朝鮮、本国等より軍を出す。二は警視總監の会に、支那宿敵にあらず、在留の支那人をおだやかに扱へ。三は為替相場に大変動なければ事件は拡大さざる見込みの由、と云うやうなる意味なりと記憶す。取調べの警部氏の眉間に新傷痕あり。即ち知る此人瘦鉄に暴行せられたる当事者なり。予の書翰はややもすればスパイに助力せる物となり得るとてさまざまの調べあり。九時より一時に及ぶ。最初先生、次にはあなた、後には君と呼ぶ。次第に容疑者の扱いなり。予としてはただ愛すべき文雅人の不安の為に新聞を代読しやりたるまでのみ。スパイと知らば、新聞の代読はおろか、つきあいもせざらん。直ちに告発もなすべからん。又まことスパイならば新聞の記事は吾輩の漢訳などを要すべきや。されどそれは予一人の事なり。瘦鉄スパイを行うにつけて予及び予の友人の愛護と信用とを利用し得べき時に利用せざらんや。警部氏の云わるる如く、容易ならざるスパイの大物なることを。夢にも知らで交際し居りし事まこと迂愚疎漏の極みなり。是に同情して新聞の抜翠をまで送りしこと、年甲斐もなき馬鹿らしさというべし。山中氏、會津氏は彼れの寓居に於て何となく気に入らぬ男共を見かけたりと云えり。予は彼の家を夏一度訪いたるだけ故かかることも心づかざりし。とかく申わけなきこと。以後はくれぐれも注意すべき也。此の意味を申述ぶるより外なし。調書もかくの如く記されて拇印を捺さしめられたり。(後略)

このように小杉は午前九時から午後一時までの四時間に及んだ取り調べの様子を赤裸々に記している。小杉は日中関係が悪化する中で、日本語の不自由であった錢を慮り、親切心から盧溝橋事件、警察の在留中国人に対する扱い、為替相場変動と盧溝橋事件が拡大しない見込みについての記事を漢訳して錢に送っていたが、それがスパイ活動に協力したと疑われた。取調官は錢に鉄製灰皿で眉間を殴られた段野義男。小杉は段野から「先生」、「あなた」、「君」と徐々に容疑者扱いをされていく。錢がスパイと知り、自分や周囲の人たちを利用していたのであろうと、一時なりとも錢に対する信頼が崩れていく様子が見える。小杉

は「夢にも知らで」と銭のスパイとしての一面を微塵も知らなかったようだ。また、「山中氏會津氏は彼れの寓居に於て何となく気に入らぬ男共を見かけたりと云えり」とあるが、これは銭が「王凡生偽参事と面識を持ち、彼は私を煩わし、情報を伝えるようにとし、また私の寓居を利用し日本の人士と面会を行った⁽⁶⁷⁾」と回顧しているように、銭の自宅が情報交換の場として利用されていたために関連する諜報員の出入りがあったのであろう。小杉は一度しか銭宅を訪問したことがなかったので、これらを目にすることはなかった。

『小杉日記』九月九日には、息子一雄に当該記事を探させた上で、「昨日の三四時間の状態は甚だしく予の心を傷けたり」と嘆息している。翌九月十日、小杉は日記の中で取り調べ時の屈辱を吐露している。

生れて五十七年。未だ此の如く予の自尊心を傷けたる事なし。二日来の不安と懊悩とは一に予自身の価値についての疑問なり。又すぐ可らざる予の歴史の汚点なり。一心の安定を保つ為に、予はあらゆる世事のめんどろを避け、避け得ざるめんどろを賢くあきらめ来りたる事、内々の自賛なりし。何ぞ甲斐なき自賛なりしや。世上のめんどろ中一番のめんどろに引かかり、世上の厭うべき一番の厭わしさの位置に三四時を経たるなり。何をなして此の陰暗の心を医さん。此のままにては予の自尊心の苦みに耐えざらん。

「一番のめんどろ」とは犯罪に巻き込まれたことであろうか。心の安寧を求め面倒を避けて生きてきた小杉にとって、この数時間は苦痛以外の何物でもなかったようだ。その数日後、「一雄より新聞の転写を送り来る」、そして

菊池氏より、いやな印象をサツパリと忘れられよと手紙あり。新聞の転写にて、予の新聞抜卒がまことに単に新聞の抜卒以外のものならざりしを認め得べき也。菊池氏の手紙にて以後余りめんどろなる引かかりなきことを知り得たり。

とここで漸く小杉の潔白が証明された。その後、銭が釈放される一九四一年まで『小杉日記』に銭についての記述は見られない。銭が帰国した後の四年七月二十一日の『小杉日記』に「瘦鉄は既に出でて上海にかえれりと聞く。惜しき印刀なりし」と銭を惜しんだ。

『小杉日記』四年二月九日に「数年前の錢瘦鉄子の一件を思い出でて同情」とあり、一時は利用されたのではとショックを受けていた小杉も、数年を経て同情に変っていたのだろうか。その後も二人の交流は戦後まで続く。

ここまで小杉放菴と錢瘦鉄の交流について『小杉日記』を中心に検討してきたが、二人の交流の初期には、しばしば石井林響の名前が出現している。石井も解衣社の一員であり、銭が東京に滞在した折には石井宅に寓する等、深く交流を持った。以下に、続けて銭と石井の交流について考察していきたい。

二、石井林響と錢瘦鉄

石井林響（一八八四—一九三〇）、千葉県山辺郡の人。日本画家。本名は毅三郎、師は橋本雅邦。四十五歳で急逝した。以下に（１）石井林響との出会い、（２）錢瘦鉄「中秋」に分けて検討していきたい。

（１）石井林響との出会い

石井林響と錢瘦鉄の交流について、柿木原くみ（二〇一二）は二人の出会いを一九二四年に銭が初めて東京で個展を行ったところと推測している⁽⁸⁸⁾。

現在見られる最も早期の二人の共通点には、日華（中日）絵画聯合展覽会への出品がある。錢瘦鉄は同展に二二、二三年に参加し、石井は二二、二四年に参加している。この時二人に面識があったかどうかはわからないが、出品者として互いの作品は認識していたかもしれない。銭が石井に刻した印は十顆確認できるが、もつとも早期のものは「山骨」白文印である。側款「瘦鉄乙丑九月」から、一九二五年の刻とわかる。「山骨」は石井の書齋「山骨精舎」のこと。

銭は二五年九月二十五日に上海で、劉海粟らと「中国の芸術問題討論会」に参加しているので、その直

後に来日したのだろうか。当時は、新暦と旧暦を混用していたため、石井に刻した「山骨」印の側款「九月」はおそらく旧暦であろう。新暦では九月十八日から十月十七日に当たる。

二五年十月の「^{*}錢瘦鉄雅印会」(図24参照)には橋本節哉、山中蘭径とともに錢刻印の申し込み先として「南品川五五七 石井林響方」とある。発起人を引き受けていることからこの時点で二人はすでに懇意であったことがわかる。

(2) 錢瘦鉄「中秋」について

錢瘦鉄の石井林響への刻印は、一九二五年十月から二六年に集中しているが、その他にも二五年の中秋節に錢が石井に贈った書「中秋」(図28)が千葉市美術館に収蔵されている。

同作には行書で、「中秋翫月跨鯨鼈、秋老蓬萊紅葉姣。海国知音如旧朋、落筆千古氣雄豪」、落款に「石井林響先生高人逸士也。一見如故、席間口占、以贈、書出請正。金匱錢厓、未是草」とある。同作は『生誕一三五周年 石井林響』に二五年の作と紹介がある。二五年の中秋節は十月二日に当たる。錢の自作詩である。「如旧朋」、「一見如故」の語から出会ったばかりで旧友のようであると親しみを込めて記している。「口占」は即席の詩、「未是草」とは意を尽くし切れていない草稿の意である。錢は出会ってすぐに意気投合した石井との出会いを喜び、その画風を「千古の雄豪」、人柄を「高人逸士」と称賛している。詩の内容から見ると、出会って間もなく書かれたものと考えられる。或いは出会いの時を思い起こし書かれたものであるか。

錢は二五年十月に再来日した時に、一時期、石井宅へ居した。この時に錢は同年三月に石井が入手し翌年十月まで収蔵していた石濤「^⑩黄山八勝画册」の内箱蓋裏に題と識語を書しており、この時点で錢は石井に深く信頼されていたことがわかる。^⑪

二人の出会いの上限を示す事物は、二五年九月から十月(旧暦乙丑九月)に集中しているが、それ以前から同じ展覧会に出品しており、また錢が京都に寓していた時にも石井の名を耳にしていたであろう。そして、二五年に錢の東京訪問を機に急速に親交を深めた。出会ってまもなく石井は錢に刻印を依頼し、錢

図29 錢瘦鉄「嚴先生」及び落款部分

の「雅印会」発起人の一人となり、自宅に長期滞在させ、更には愛蔵の石濤「黄山八勝画册」題字まで依頼した。二人の交流を促進させた背景には、錢の人柄、技芸の高さが大いに関係していたことであろう。

三、小杉放菴、石井林響と錢瘦鉄の交流

石井林響との交流はその後も続き、錢瘦鉄「嚴先生」(図29)の落款「丙寅正月写於五松居」から錢が二六年の正月を石井宅で迎えていることがわかる⁽⁷²⁾。

一九二六年夏、石井は千葉県山武郡大網町(現・大網白里市)にアトリエ「白閑亭」を新築し居を移した。錢は同年、石井に「白閑亭」印を刻している。同年五月十日には小杉らが石井宅を訪問し、解衣社展の中国側出品作品を検し、七月六日にも小杉が石井宅を訪問し、錢近作等を見ている。

一九二七、二八年は、錢が活動の舞台を中国に移したために彼らの交流は見られない。二九年春に錢は再来日し、三月には大阪松坂屋で個展を開催、石井は二九年三月二十四日には脳腫血症で危篤に陥り、一時的に回復するも、翌三〇年二月二十二日に再び脳溢血を起こし、三日後に逝去した。よって、錢と石井の交流は、二五年から二六年のわずか一年間のみであった。

二九年、小川芋錢の小杉宛書簡には「錢瘦鉄氏後援何かくつもりなりしもご来示にて心安く今度はなまけさして貰う候」と小川が何か書こうと思ったが、書くのを止めたとあるが、これは同年九月に上野松坂屋で開催した錢瘦鉄展覧会の推薦文等であろうか。小杉はその後も、二九、三〇、三六年にも錢に刻印を依頼しており、四一年に錢が帰国してからも、弟子の水谷清を通じて刻印を依頼する等、交流を重ねた⁽⁷³⁾。

四、戦後の交流

一九四六年九月に、錢が連合国軍の中国駐日本代表団の一員として再来日したことは前稿で述べたが、四九年まで、日中間を度々往復している。その間、會津八一と小杉放菴の四通の往復書簡(一九四七年五月一日から四九年一月三日まで)に錢の名が見える。一通目は一九四七年五月一日付の小杉の會津宛書簡である。そこには、「錢君とのれんらくおぼつかなきやうに思いますがやうて見ませう」⁽⁷⁴⁾の一文がある。同年六



月十五日に銭は會津の『渾斎印譜』に跋文を記しており、會津はこの時に印譜の跋文を依頼をしたかったのかもしれない。

しかし、同年五月二十日付の小杉の會津宛書簡には「東京にて瘦鉄子とのれんらく何やら心重くついそれなりに帰山致しました」と述べている。連絡はしたかったができなかったであろう。翌年の『小杉日記』一九四八年四月十八日には、「ひる松下氏大鹿氏に誘われて銀座うらの家に錢瘦鉄氏と会す。支那人弱い者いぢめする故。彼も亦戦勝国人の顔するにやと危ミたりしが依然として旧日の瘦鉄にてなつかしかり」とある。大鹿氏は大鹿卓のこと。四七年に小杉は「心重く」、銭と連絡できなかったが、遂に二人は再会を果たした。その時に、小杉は銭が戦勝国の人間として横柄な態度をとるかと思惧していたが、実際は「依然として旧日の瘦鉄にてなつかしかり」と、変わらない銭の姿にどれほど安堵したであろう。その後の二人の面会については定かではないが、四八年十一月三十日の小杉の會津宛書簡には、會津の新宿中村屋個展への賛助出品についての記述がある。

最後に銭と小杉の交流が認められるのは一九五七年の銭の小杉宛書簡(図30)*である。

放庵兄如面、弟近来遊三峡、經秦嶺來長安、訪古迹甚樂、賤軀頑健、對於水墨画略有心得、人書俱老、漸入佳境、遙念我兄、特此上書、敬祝康健、弟瘦鉄頓首、丁酉六月。

(放庵兄 私は近頃三峡に遊び、秦嶺を経て西安に至り、古跡を訪れること頗る楽しんでおります。身体は健康で、水墨画について少し得るところがありました。人と書はともに老い、ようやく佳境に入りました。遙かに兄を思い、ここに手紙を記します。兄のご健康をお祈り申し上げます。弟瘦鉄頓首。丁酉六月)

一九五六年六月、毛沢東の提議により、周恩来は國務院に北京と上海の中国画院の成立を申請し通過する。同年九月八日、銭は上海中国画院の画師に招聘される。五七年四月下旬から七月初めまで、銭と朱屺瞻(一八九二—一九九六)は四月下旬より写生旅行に出る。

小杉宛書簡は六月二十五日に西安に入ってから発送されたものであろう。書簡から、銭が写生旅行を楽

「関于右派分子摘帽子後本人表現及群衆反映」部分（個人蔵）



しんでいる様子が伝わってくる。この書簡が錢瘦鉄と日本文化人の交流を示す最後の痕跡である。

同年秋、旅先で上海中国画院からの電報を受け、上海へと戻ると、右派とされ、錢の立場は一変した。画壇の不平を唱えた「壇香扇事件」や四六年の再来日が国民政府の代表であったこと、元日本南満鉄俱樂部の所在地であった黄浦路七十三号に居していたことが災いし、漢奸と見做された。以降、六一年九月に右派の濡れ衣を晴らすも、六六年には文化大革命により更なる批判にさらされ、失意の中で逝去した。

*「関于右派分子摘帽子後本人表現及群衆反映（汚名をそそいだ右派分子の本人の表現と群衆の反映）」（図31）は錢瘦鉄が右派の濡れ衣を晴らした後の調査記録であるが、その中にも、「日本へ行き絵画展を開催し、中日文化交流を促進したい」と一九二〇年代から六〇年代まで、一貫して芸術によつて文化交流を行なおうとした姿が見られる。

五、おわりに

本章では錢瘦鉄と小杉放菴、石井林響の交流に着目し考察を加えてきた。石井は一九二五年十月前後から、小杉は同年十二月三日から錢と交流を始めた。石井は一年余りの交流の中で、愛蔵品に題字を依頼するほど深く錢を信頼するに至った。小杉は橋本から山中を通じて錢を紹介され、後に錢を會津八一へ紹介した。小杉と錢の交流は三十数年間の長きに及んだが、その詳細を『小杉日記』等から検討することができた。錢の拘留をめぐる日本文化人の動きはこれまでほとんど明らかになつていなかったが、小杉や會津が実際に警視庁を訪問し、錢の釈放に尽力していた他、小杉が取り調べを受けていたことも明らかになった。

（堀川英嗣・段毅琳）

第七章 會津八一との交流

一、はじめに

會津八一（一八八一—一九五六）は新潟の人。美術史家、新潟大学教授、夕刊新潟社社長。号は秋艸道人、渾斎等。これまで、本章に関連した先行研究には、吉池進『會津八一先生伝』（會津八一先生伝刊行会、一九六三年）、安藤更生『書豪 會津八一』（二玄社、一九六五年）、宮川寅雄『秋艸堂印譜』（二玄社、一九七九年）がある。また近年、角田勝久は「錢瘦鉄との関わり」『孤高の書家 會津八一』（龍鳳書房、二〇一四年）、「錢瘦鉄と會津八一」『金石書学』二十四号（芸文書院、二〇二〇年）等で、會津研究の一環として錢について言及している。本章ではこれらの先行研究を踏まえ、新資料を加味しながら二人の交流について検討していきたい。

二、會津八一と錢瘦鉄の出会いについて

錢瘦鉄刻の會津八一自用印は三十四顆認められ、その他にも養女の紀伊子に刻した二顆があり、山田正平刻會津自用印の三十六顆⁽⁷⁶⁾とほぼ同数となっている。「道人の最も愛した現代の篆刻家は、日本では門下の山田正平、中国では錢瘦鉄だったと云つてもいい」⁽⁷⁷⁾の言葉の通り、會津が如何に錢を重視していたかわかる。二人の出会いについては、安藤、宮川及び角田がそれぞれ言及しているため、まずはそれらを整理していきたい。安藤は一九二九年十月以前のこととして、「小杉放菴などの紹介で錢瘦鉄を認めており、進んで、諸方の知人に刻印をたのむように紹介したりしていた……」⁽⁸⁰⁾と、小杉の紹介により二人が出会ったと記している。宮川は二九年九月九日の會津の関塚惣吉宛書簡を引用し、「すでにこのころ、秋艸道人と錢瘦鉄とは深厚の交際があり」⁽⁸²⁾と述べている。角田は二九年九月三日の會津の吉江喬松宛書簡「支那から錢瘦鉄という篆刻家来り本日面会致し候ところ、書画もよくし人物も温雅にてことに篆刻精妙にて候」⁽⁸³⁾を

引用し、この時に二人は初対面を果たしたとし、また「會朔審印」白文印の側款「己巳（一九二九）夏為會津先生⁽⁸⁴⁾」から初対面の前に會津は錢に刻印の依頼をしていたと述べている。また角田は、出会いから三週間弱の間に會津が佐渡電灯会社の渡辺湖畔、相馬御風、関塚惣吉等にも錢の篆刻を推薦していたと指摘している。⁽⁸⁵⁾ 先行研究では、二九年九月を會津と錢の初対面の年としているが、実際はその数年前から會津は錢の存在を意識していたようである。そのことが以下の二点にみられる。一つは會津自身の言葉である。

私は、かねて色々な機会に錢君の書画を見又『近代名賢印選』等で篆刻を見たりして、その格調に対して非常に興味を動かしていたところ、五六年前の暮秋の或る日、錢君は初めて落合の秋草堂に私を訪ねられましたので……⁽⁸⁶⁾。

この文章は一九三六年に新潟で開催した錢瘦鉄個展に合わせて書かれたものだが、會津は二九年以前にすでに「かねて色々な機会に錢君の書画を見」てと、錢の書画を見ていたこと、また『近代名賢印選』^{*}（図32）に収録されている錢の篆刻を見ていたと記している。⁽⁸⁷⁾「五六年前の暮秋の或る日」とは、二九年十月を指す。

二つ目は、錢個展に対する會津の関心である。二九年九月一日から五日まで、錢は上野松坂屋にて個展を行った。前章では『小杉日記』を用い、同個展が小杉の紹介で実現したことを述べた。当時の報道には「小杉未醒、橋本閑雪、山中蘭徑諸氏の世話で⁽⁸⁸⁾」とあり、「諸氏」の中に會津がいたかはわからない。もしも會津が世話人の一人であれば、二人の出会いの日は現行の説よりもさかのぼることができる。この点については更なる検討を要するが、その可能性を示す記述がある。それは二九年九月九日の會津の関塚惣吉宛書簡である。同書簡で會津は「右錢君近作供覧。先日錢君書画展覽會松坂屋にて催し、席上篆刻は八九分通り悉く売約相成り候⁽⁸⁹⁾」と述べている。會津は初対面前から行われていた錢展覽會の作品頒布状況まで気にかけている。角田の指摘するように、九月三日が二人の初対面であるとしたら、出会って間もない錢の作品「売約」状況まで気にかけるものだろうか。

會津が二九年以前から、錢の作品を目にしていたこと、錢の個展への関心が伺われることから、二人の初対面の日は一九二九年九月三日以前だと考えられないだろうか。少なくともそれまでに二人が交流を深める下地は十分に練れていたようだ。一月後の十月に會津が『瘦鉄印存』跋文を記したのもこれらを踏まえてのことであろう。同跋文には、

錢君瘦鉄治印書画名重于蘇浙。所作清新遒勁。自還得古意、予常忻賞焉。己巳十月君東遊來訪吾廬。予見其人俊秀儒雅頗有前賢之風。度始知其作有所因矣。憶当今法家其志唯在技巧。涵養漸疎。是以倚樣枯板不能入真実、令錢君独擅名。世可不鑑乎。君今輯次近製印数十方成譜。雖袖珍小冊是以為文場之秘玩。乃記一言於其尾。秋艸道人朔。

とある。「己巳十月君東遊來訪吾廬（一九二九年十月、錢君は東京に遊び私の廬を訪れた）」とあるが、これは會津の二九年九月九日の関塚宛書簡にある「錢厓、号瘦鉄、京都を経て再び入京し来り、……独山、関雪等に調法がられ居り候。草廬へも來訪の筈につき……」⁽⁹⁾に一致する。會津は西暦を用いていたので、錢が會津を訪問したのは二九年十月として問題ないであろう。つまり、その一月前九月九日の時点で、會津は錢の秋艸堂訪問を承知していたことがわかる。「独山」は橋本独山（一八六九—一九三八）、新潟県の人。富岡鉄斎の弟子で日本画家を志したが、中年出家して臨済宗・橋本峨山和尚の法を嗣いだ。⁽¹⁰⁾「再び」の語からも、會津がそれ以前から錢を知っていたことを示している。錢は跋文依頼という訪問意図を予め會津に説明した上で訪問したのではないだろうか。

同時期に錢は「帝展寸感」と題した「第四回帝展」（一九二九年十月十六日—十一月二十日開催）についての随筆がある。その中で、

しかも此間も、會津山中両老と帝展を見て感じたことですが、近頃の日本の東洋画は技巧偏重に傾く人多きに過ぎはせぬかと思う……此の技巧偏重の嘆きあるも少なくはない、塗る事あつて描く事な

きの弊……

と当時の日本の東洋画（日本画）が技巧に偏っていることを指摘している⁽⁹²⁾。また、銭が「會津山中両老」、つまり會津、山中とともに会場を訪れていたことがわかる。銭が會津に印譜跋文を依頼した前後のできごとであり、この時に「技巧偏重」についての話題が出たのかもしれない。それを思わせる一文が會津の銭印譜跋文に見える。「……憶当今法家其志唯在技巧。涵養漸疎。是以倚樣枯板不能入真実、令錢君独擅名。……現在の芸術家は技巧のみを志し、涵養がない。味気なく真実味がない。錢君はこの点においても名高い人物である」と會津は現代の人々が技巧のみを追求していて、その中に涵養が少なく、対して銭には涵養が伴っており、先賢の風格があることを称えている。銭が「帝展寸感」で指摘した「技術偏重」と一致する内容である。會津と銭の出会いについて角田は「ふたりの交流は思いのほか、短期間のうちに深まっているようだ⁽⁹³⁾」と述べているが、決して「短期間」ではなく、少なくとも初対面を果たす数年前から、會津は銭の作品を目にしており、また山中や小杉からも銭について聞き及んでいたことだろう。一九三〇年代に入ってから、會津はしばしば銭を周囲の人々に紹介している⁽⁹⁴⁾。

會津はかねてより、「篆刻界の現状打破の必要⁽⁹⁵⁾」について深く考えていたようであり、篆刻家では石川蘭八、山田正平、銭の世話をしている。特に山田と銭へは生涯を通じて諸人に紹介し、その刻印を勧めた。書画篆刻に加えて、銭の人格面でも會津が高く評価していたことも二人の距離を近づけた原因となったであろう⁽⁹⁶⁾。

三、錢瘦鉄の個展と會津八一個展への賛助出品

銭は日本で幾度も個展を開催しているが、會津の錢個展への具体的な参画は、一九三二年七月十二日、十二日に資生堂ギャラリーで行われた「錢瘦鉄氏小品画及篆刻遊印展覽会⁽⁹⁷⁾」に見え、會津は後援者の一人に名を連ねている。その後、二人の関係を示す展覧会活動には銭の三三年の個展、三四年夏の銀座資生堂個展⁽⁹⁸⁾、更には①「錢瘦鉄書画篆刻展」（三六年十一月七、八日、新潟新聞社三階ホール）②「秋艸道人書画展覽

が其の前に一つ新潟へ出かけて、御郷里の方々に自分の作品を見て頂きたい。

ということでは新潟での個展が決定したとある。数日前の訪問から展覧会の開催とはいささか唐突のように思えるが、十月十四日の時点で既に関塚惣吉に個展開催の知らせをしていることから、少なくとも三週間前には決定していたことがわかる。当時のインタビューの中で銭は日中の交流について、「同種、同文、同一佛の日支の両大民族が文化、芸術を通じて、親善、提携して行くところに東亜の和平が保たれよう」と確信し、今春関雪画伯が上海に来遊の際にこの点を語り合いました」と述べている。関雪は橋本関雪のこと。『同種、同文』の一語は一九四三年に上海で行われた『現代日本絵画展』の銭の評論でも用いられている。橋本関雪との「語り合い」が、後々まで銭の芸術により平和を求めた態度に影響している。

② 「秋艸道人書画展覧会」(一九四九年三月十六―二十一日、新宿中村屋、銭瘦鉄賛助出品)

* 同展の目録(図34)によると、會津の書画四十四点と賛助出品として銭篆刻八点が展覧されたとある。また、展覧会初日には中央公論社主催で、會津と銭の対談が行われ、『中央公論』一九四九年六月号に「この美術のこす美術」と題して掲載された。

會津が同展の打ち合わせに初めて中村屋を訪れたのは、四八年十月十八日のことである。同日の中山蘭子宛書簡に「今日初めて新宿の中村屋を訪いしに」とある。同書簡には続けて「……帰れば、銭瘦鉄が訪ね来り、自分の宅へも一泊に来よという。これは次回上京の時にゆづることとしました」と、銭は會津が福田雅之助宅に居していたことを知り訪ねてきたことが記されている。

一九四八年十一月三十日の中村屋相馬安雄の會津宛書簡には、

先生の個展の件について昨日小杉先生に御目にかかり御相談致しました……尚只今東京へ来て居られる篆刻家の銭瘦鉄氏を小杉先生と同じ立場で参加させては如何か、若し會津先生がご同意ならば一層面白いではないかとの御意見がありました。

とあり、錢の贊助出品は小杉の提案であつたとわかる。同日付で発送された小杉の會津宛書簡（一九四八年十一月三十日付）にも、

……元（原）則的に八朔道人の書展であり協師（侍）の如くさしみのつまの如く放禿小品六七点を点綴する。尚尊台よしと思われなば錢君の遊印を加える。あの人も我等に縁浅からず又今後留日の希望の如くなればかたかたあの人の為にも若干よろしかるべし。見物にもにぎやかだらうと思われます。^(四)

とあり一致する。もともとは小杉と錢が贊助出品する予定であつたようだ。會津は小杉、錢の参加を喜び十二月十六日の桑山太市宛書簡にも「放菴、錢瘦鉄等贊助出品してくれるよしにて候」、^(四)十二月十七日の大鹿卓宛葉書に「放菴、瘦鉄も贊助出品をなすよし」と伝えている。ついで一九四九年一月三日の小杉の會津宛書簡には「貴台個展に錢瘦鉄の遊印のこと、彼氏よろこび居ようす」とあり、錢が展覧会参加を楽しみにしている様子が記されている。しかし同展の目録には、小杉の贊助出品については記載がなく、そのことについても他に記述を見ない。

③対談「のこる美術のこす美術」^{*}（『中央公論』一九四九年六月号）（図35）

本対談は、②「秋艸道人書画展覧会」の初日（一九四九年三月十六日）に東京で行われ、後に「のこる美術のこす美術」と題し『中央公論』（一九四九年六月号）に掲載された。展覧会の初日であつたが、會津はその当日の晩に汽車で新潟へ戻つた。^(四)対談は後日、會津の修正が加えられて掲載された。^(四)

同対談は「1」古美術の保存、「2」日本美術の源流、「3」新しい浮世絵、「4」書画の味わい、「5」早呑み込みの文化の五つに整理されており、二人の芸術創造や美術家に対する考え方が示されている。例えば、四九年一月二十六日の不審火により焼失した法隆寺壁画の復元について、會津は、

現代の美術家の中からほんとに手腕のある人を十二人選んでその人たちに一枚ずつこれを描かせる…新しく描く絵の題材はもとの通り四方浄土の仏菩薩にしてもこれを描く人たちの感激で描かせるのがいい。…それが将来の日本のために誇るべき古美術になるかも知れない。

と失われた文物をそのまま復元するのではなく、現代人の感覚を用いて新たに描き直すべきだと自由で進歩的な意見を唱えている。銭も現代の画家は現代に合うものをテーマとするべきだとし、

現代作家のものは千年後にはやはり国宝です。現代の作家は現代の事情を描く。今の世の中の苦しいこと、ファシズムや軍閥の事、この社会の苦しい面、それを描く。

と、現代に仏画は必要なく、今の政治や生活を描くことが必要だと述べている。当時、六十九歳の會津と五十三歳の銭は、それぞれ立場は異なっていたものの、新しい芸術を求めようとする姿は共通している。銭は当時の中国美術の状況について述べた後、日本の美術家について、

お国の南画家は中国のほんとうの美術を知らないように考える。洋画家はなかなか詳しく勉強されているように思います。例えば、小杉、梅原両先生などそうです。今の上海で流行の画かきはみな古いものの真似をするのを第一としていて、創造ということを忘れている。

と小杉や梅原龍三郎といった洋画家を高く評価している。これについて、會津は、

銭さんが認めていられる注意すべき人物は多くは南画以外の人、それから、ただひたすらに古を摸しておるだけでない人、それから洋画に出発してそして中国の美術を勉強しておる人などで、その点が重大なことです。

図35 対談「のこる美術のこす美術」『中央公論』(一九四九年八月号)



とここでも共通の認識を示している。更に臨模について會津は、

練習ばかりしたところで、いいことばかりではない。かえって悪くなることもある。練習では美術家はできませんよ。感激でなければ美術はできるものではない。

と新しい芸術は感激から創造していくということを強調した。また、日本の現代書道について、銭は、

今の日本の人は鄧完白や趙之謙の味を出すことは上手です。何子貞、伊秉綬、呉昌碩さんを学んでいる人もおる。しかし一番感心したのは會津先生の書かれたものです。北魏そのままの味、あるいはその以前の時代の風があります。京都の内藤湖南先生の字は少し小さく大きな字はないが字はよい。これは唐の時代の風です。唐以前の字は會津先生一人だけです。中村不折先生も六朝の字の感じはあります。ただこの先生のは習気がある。書に大切な韵致がなくて、覇気が多すぎる。

と、書道について評する時も、會津、内藤、中村といった学者、画家を挙げており、書家の名前は出てきていない。銭は『書苑』雑誌の「顧問及客員」に名を連ねており、書家との交流もあったが、この対談を含めて現在に伝わる銭の言論の中に、ほとんど書家の名が出てこない。このことは銭と日本文化人との交流範囲を知る手がりになるであろう。また、銭が日本人に刻した印もそのことを示しており、現在まで川村驥山、西脇吳石、吉田苞竹、小林斗盦、松丸東魚以外に書家に刻した印は目にしていない。

四、會津八一が銭瘦鉄に与えた書

銭瘦鉄は會津八一に多くの印を刻したが、會津も銭に書を贈っている。銭維多氏のもとには會津が銭に書き与えた書が三幅伝わる。これらについては、角田勝久（二〇二〇）が紹介をしているが、筆者は角田氏の論考とはやや異なる見解を有している。加えて銭家にはかつてもう一幅、會津が銭に書き与えた作品



図37 會津八一書「瘦鉄長寿」(個人蔵)



図38 會津八一書「石華万春」(個人蔵)

が存在していた。以下に錢家蔵の會津書三幅、①「瘦鉄通神」②「瘦鉄長寿」③「石華万春」、錢家旧蔵の會津書④「贈韋穆十八」、加えて⑤會津の錢宛書簡について記していきたい。

①「瘦鉄通神」(図36)

「瘦鉄通神」落款に「丙子十一月秋艸道人題」とある。半切縦書き。「丙子」は一九三六年。この年の秋に錢は「錢瘦鉄書画篆刻展」(十一月七、八日新潟新聞社三階ホール)を開催しており、この時に書かれたものである。「通神」とは「非凡な才能を有す」の意味である。⁽¹⁶⁾

角田は「本作は錢瘦鉄の個展にあわせて揮毫した賛助作品と考えられる」としているが、會津は芸術家の創作についての感興を重視しており、⁽¹⁶⁾そこからも錢の展覽会会期中或いは準備の段階で作品を目にした感興から、書き与えた作品ではないかと考える。同展の紹介で會津は錢について「今では日本の名流巨匠で、錢君を知らぬ者はなく、知つて推重しない者はない位になりました」と紹介しており、「瘦鉄通神」の文言からも、會津が如何に錢を重視していたかがわかる。尚、錢を讃える文言を書いたのは會津ばかりではなく、橋本はかつて錢に「支那聖手」、「東亞奇才」の二幅を贈っている。⁽¹⁷⁾

②「瘦鉄長寿」(図37)

「瘦鉄長寿」落款に「甲申八月。秋艸道人」とある。半切横書き。「甲申」は一九四四年。大鹿卓と水谷清は一九四四年春に、會津の手紙を携えて上海に錢を訪問し、⁽¹⁸⁾その時も錢は水谷に向つて「會津先生げんきですか」と気にかけている。水谷も「會津先生は帰国後の錢さんの動静について、今なお気にかかれて居られる様子だった」と、會津も変わらずに錢を気にかけていたことを述べている。錢は大鹿に「私の近作、會津先生に見せて下さい」といって、山水画を託したが、この時期に會津も錢に作品を送っている。會津の丹呉康平宛書簡(一九四四年十二月二十八日付)に「上海の錢瘦鉄は便あるごとに人に托して画一二枚寄贈し来りが、最近さらに人に托して鶏血の材にてこの印を贈り来り候。当方からも大額面を書きて送り候」とある。「瘦鉄長寿」や次に示す「石華万春」はこの時に送られた「大額面」であろう。

③「石華万春」(図38)

「石華万春」落款に「瘦鉄先生正字。秋艸道人」とある。半切横書き。書写年代は不明であるが、「六十

以後所作」は錢四一年（會津六十歳）の刻である。「石華」は石刻、金石の意。「万春」⁽¹²⁾は万年、永代の意である。作品の体裁からも②「瘦鉄長寿」と同時期の作と考えられる。

④王維詩「贈韋穆十八」（図39）

規格、書写年代ともに不詳。黄色蠟宣に行草書で書かれている。同作は錢家の所蔵であつたが、八〇年代に日本の某氏に売却したという。当時撮影したばやけた写真のみが残る。内容は「與君青眼客、共有白雲心。不向東山去、日令春草深」落款に「秋艸道人朔」とある。「青眼客」⁽¹³⁾と阮籍を韋穆に例えている。「白雲心」とは塵世から離れた心。「東山」は晋の謝安がかつて東山に隠居したことから、隱者の居住地を指す。「不向東山」の二句は、韋穆の帰山を促している。會津は王維が韋穆に送つたこの詩を書き与え、自身と錢の姿を投影したのだろうか。同じ「白雲心」を持つ錢との再会を期待している姿が目に見え、

⑤會津八一の錢瘦鉄宛書簡

會津は書簡の中でたびたび錢に言及しているが、錢自身に送つた書簡は現在までに一通しか見られない。一通は「一九四五年一月二十日付書簡」、もう一通は「一九四一年十一月十四日付書簡」である。錢瘦鉄宛「一九四五年一月二十日付書簡」

瘦鉄道長見下。久違雅教、暢叙果期何時、況還將改曆、渴想奚勝。僕今春罹災、滿室圖書・器玩渾為灰燼。流寓鄉里、寄身故旧、纔以翰墨充米塩資耳。数寄真可駭絶。此間有骨尚健在、幸莫為念。但恨前年吾兄所賜諸印、悉歸烏有、復無可用。請更惠以兩三枚、救濟窮乏、欣躍何如。專此併頌文祺。十二月卅一日。會朔頓首。

「會朔」白文印、「渾齋」白文印、「秋叟」朱文印

吉池進は「先生の中国人宛の尺牘はこの一通のみ残されている」⁽¹²⁾と述べている。一九六三年の時点ですでに通しか見られないため、今日では會津の錢宛書簡を採することはより困難であろう。ここに示す書簡は日付から一九四四年十二月三十一日に書き、四五年一月二十五日付で発送したことがわかる。書簡の中



図41 銭瘦鉄の橋本関雪宛書簡草稿
(個人蔵)



図40 會津八一の銭瘦鉄宛「一九四一年十一月十四日付書簡」(新潟市會津八一記念館蔵)

で、會津は春に罹災し郷里に流寓したこと。銭に刻してもらった印もすべて烏有に帰し手元にはなくなってしまったとして、「會朔」と「渾齋」白文印、「秋叟」朱文印を依頼している。尚、この書簡は『書論』第七号(書論研究会、一九七五年)に図版が掲載されており、収蔵者は「京都・某氏」となっている。

銭*
瘦鉄宛一九四一年十一月十四日付書簡(図40)、新潟市會津八一記念館所蔵。釈文は次の通り。

瘦鉄先生閣下。久違光儀暢叙不可期、渴想奚勝。偶友人松下英磨君將解纜游滬浜、乃托以薄貲参拾円敬請高篆三枚。一云「秋艸堂金石記」朱文細線、一云「北越會朔」白文仿漢、一云「渾齋老人」朱文。專此併頌文祺。

十一月十四日。會津八一頓首。

封筒表…銭瘦鉄先生台収(「會朔」白文印)

封筒裏…(朔「白文印」辛巳十一月十四日夜

一九四一年五月十五日に釈放され、上海へと帰国していた銭に対して、松下英磨の上海訪問時に托し篆刻の依頼をしたものである^(註)。書簡に記されている三顆は、會津の自用印には見られない。依頼したものの後に散佚したのだろうか。或いは同書簡は発送されなかったのだろうか。銭の橋本宛書簡草稿(図41)が銭家に伝わっている等、書簡自体が手元に届かなかったとも考えられる。同書簡からは會津がどのように銭に刻印の依頼をしていたのかを知ることができる。

五、會津八一の日夏耿之介宛葉書(一九四一年四月二十六日付)

銭の拘留について會津は一九四七年十二月一日に回顧文を記している。

……するとそれから東京へ帰って間もなく、妙な目で役人達から睨まれるようになって今少しでかな

會津八一の日夏耿之介宛葉書、一九四
一年四月二十六日付
(飯田市美術博物館所蔵)

りひどい目に遇われるところを、私が役所へ出かけて東洋の永遠の平和の根本は、中日の親和の上に在るという持論をまくし立ててようやく救い出して帰国して貰ったのであるが、それはもう十一年の昔となった。^(四)

前稿では、會津が錢釈放に奔走をしていたことに触れたが、錢の家族宛書簡には會津の名が一切記されていないことから、會津の錢釈放への具体的な動きは不明であった。しかし前章で『小杉日記』を通じて、會津は錢拘留の一報を聞きすぐに小杉と共に動き始めていたことがわかった。この時の模様について會津は一九三七年八月二十三日関塚惣吉宛書簡に以下のように記している。

先年特別の御援助を受けし錢瘦鉄は親日家でもあり妻君身重でもあり、この際は東京に留まりて閉門読書に平和の再来を持つ方よろしからんと拙者数回勧告致し、その方針にてありしに許世英君等の強要に基づくものか、八月七日スパイの嫌疑にて引致せられ、只今警視庁に拘留中にて候。実は新聞等も記事さしとめ尚取調べにて、拙者は十三日初めて伝聞し赤倉から小杉放菴を招きて十九日二人にて登庁して相ただしたるに、事実は確定的にて今にしては如何とも致しかぬる情勢につき空しく引き上げ申候。彼としては一死を以て祖国に貢献するに悔無きかも知らざるも、此種のことにつきては首謀的素質を有する人とも思われざる点より甚だ氣の毒にも思われ候。^(五)

書簡の内容は、前章で示した『小杉日記』の記述と一致する。文中の「妻君身重」とは妻張珊が錢明直氏（一九三七年生）を身籠っていたことを指す。會津は日中の情勢が激化する中で静かに「平和の再来」を待つように錢に諭している様子が伝わってくる。現在までに會津自らの言葉で錢の拘留について語ったものはこの関塚宛書簡一通である。さて、ここにもう一通、当時の會津の動きを記す資料を挙げたい。飯田市美術博物館所蔵の會津の日夏耿之介宛葉書（一九四一年四月二十六日付）（図42）である。

葉書表…杉並区阿佐ヶ谷四ノ四五五

日夏耿之介様

「ゴム印」東京市淀橋区下落合三丁目一三二二番地 會津八一

葉書裏…四月廿六日夜

猷寿秋艸道人。

卯月廿六夜英磨於秋艸堂。

錢瘦鉄近作印影。

葉書には、印影十一顆が捺されている。内訳は次の通り。

「六十以後所作」朱文印、「庚辰以後」白文印、「紀伊」白文印、「紀伊子」朱文印、「養素」白文印、「雅生」朱文印、「福田雅之助」白文印、「會津朔印」白文印、「秋艸道人」朱文印、「雅」白文印、「福田」白文印

會津の養女紀伊子、福田に刻した印は、現行の錢印譜には収録されていない新資料である。葉書の発送日時からもこれらの印が獄中で刻したものとわかる。錢は一九四一年五月十五日に釈放されたので、その二十日ほど前に會津から日夏へ発送したものである。「卯月廿六夜英磨於秋艸堂」は松下英磨が四月二十六日に秋艸堂を訪れていたことを示している。「猷寿」はお祝いの品を贈るの意味。大鹿卓は錢の印譜作成について次のように回想している。

下落合の會津先生の秋草堂を思い出していた。いつのころであつたか私は嘗てその二階の書齋で、先生自身常用の夥しい刻印を取り出して印譜を作られるのに、松下英磨君^(マモ)とともに同座したことがあつた……これらは錢さんが事に累され獄中に在ったとき特に許されて刀を振つたもので、当時會津先生

図43 錢瘦鉄「落合山莊図」



は一箇の刻が出来るごとに一々その批評を書き送って、これを彼舞鞭撻したのだという。⁽¹⁶⁾

前稿で、銭は拘留中にもアトリエが与えられ刻印が許されていたことを述べたが、大鹿の回想から、會津は大鹿や松下とともに、銭から送られた印を用いて印譜を作成していたことがわかる。この早稲田大学の元同僚で親交のあった日夏への葉書も印譜作成の一環であろう。會津は印譜を作成するついでに知人に銭の篆刻を紹介していたのであろう。

會津は銭の拘留を巡り、その初期から関係者との折衝に尽力し、また獄中の銭から送られてきた印を用いて印譜を作成し、知人に紹介していたのであった。⁽¹⁷⁾

五、おわりに

會津八一と錢瘦鉄の交流は一九二九年頃から四九年の二十年にわたり、その間交流が途絶えることはなかった。本章では、展覧会や対談から會津と銭の交流の模様を記すとともに、『小杉日記』や日夏耿之介宛葉書を通じて、これまで知られていなかった會津の錢積放への動きの一端を明らかにすることができた。また、會津が銭に書き与えた四点の書作品及び諸人への書簡等から、二人は戦時中も交流を続けていたことを指摘できた。

一九四六年九月末に銭が再来日すると、會津は半月余り後の十月十六日には、神谷正治宛書簡の中で「友人の錢瘦鉄君、駐日代表団の一員として来朝して東京に在り、月末にも当地へまいり候ことにも何相成かと存じ候⁽¹⁸⁾」と述べている。また、安藤更生に対しては「錢君はもちろん書画篆刻の依頼に応ずる用意あるべしと存候へども、その潤規出来居らば御たしかめ被下⁽¹⁹⁾」と潤格を確かめるように指示を出しており、會津の銭に対する態度はそれまでと何も変わってはいない。

戦後の二人の再会は、會津の予想に反して約一年後の四七年の初頭、會津の『寒燈集』（四季書房）出版準備の際に、銭と連絡を取っている。『寒燈集』には銭の「落合山莊図」⁽²⁰⁾（図43）が収録されているが、同書を巡り当初は表紙の題簽も「錢君にたのまれたし⁽²¹⁾」と、會津は銭への依頼を想定していた。しかし、「錢君

が上海へ行きて十二月下旬には再び帰り来るといふことなりしも、彼等も今は政治家にて国事に奔走し居るものなれば、東奔西走もするなるべくそれを待ち居るともいつ来るかわからぬことなれば……⁽¹²⁾」と、題簽の依頼をあきらめている。

また一九四七年四月二十八日の福田雅之助宛葉書には「五月には拙者個展を開き、小杉放菴、錢瘦鉄、その他いろいろの人その頃来る筈にて候⁽¹³⁾」と記している。四七年五月一日付の山田博信・武田繁太郎宛葉書には「錢瘦鉄は小杉放菴の新宅を知らず、そのために連絡無きが如し。両方とも新潟へ来るならば同時に来てくれる方が何かと都合にて候⁽¹⁴⁾」、四七年六月十一日安藤更生宛書簡には「近日放菴老人、錢瘦鉄、松下英麿等諸君続々来訪の予告あり⁽¹⁵⁾」と會津の五月の個展にあわせて、錢が新潟を訪れる予定を周囲に伝えている。大鹿卓は「昨年の春⁽¹⁶⁾」即ち、四七年四月十七日に錢と面会した際⁽¹⁷⁾に、錢は「私、新潟へいつて先生に逢います」と語ったとあるが、或いは會津の言は大鹿から聞き及んだ話を承けてかもしれない。

七か月後の十一月三十日に錢は新潟に會津を訪ねた。四一年の帰国以降はじめての再会である。會津は「昨日の午後、私は電話に呼び出されて、相手が錢瘦鉄君であるのでひどく驚いた⁽¹⁸⁾」と突然の訪問に驚きながらも、「つやつやとしたもとより少し小肥りにふとつて、至つて元気なものである⁽¹⁹⁾」と、錢の生活が改善された様子を喜んでいる。

その翌年にも二人は連絡を取り合っており、四九年の錢帰国まで、交流が途絶えることは無かつた。⁽²⁰⁾

會津は錢に対して、「日本として昔からこの国より親しい関係で切つても切れぬものは中国だということとは忘れてはならない。これは日本人ばかりでなく、あちらでもやはりそんな風に、よくあとさきの事を考えて物をして貰いたいものだ。私は先年、一盃を錢君に勧めながら、これを繰り返し主張して別れた⁽²¹⁾」と述べている。加えて前述した橋本関雪との間で交わされた「同文、同種、同一仏」、これらの言葉は錢に強く影響を与え、日中間を往来する際の信念となつた。だからこそ、抗日機運が高まっていた四〇年代の上海においても、錢は平然と芸術により平和を希求すると発信し続けることができたのではないだろうか。

會津は四四年十二月二十八日の丹呉康平宛書簡の中で「彼（錢瘦鉄）及び彼の周囲には拙書の礼讀者多

く候間、他日彼地へ筆を載せて一遊し揮毫のもとめに応ずることも文化の逆輸にて面白かるべしと存じ候⁽¹⁾と自身の書が錢の周囲で推賞されていたこと、訪中の日を心待ちにしている様子が認められる。

錢も「中国の内戦が終つて平和になれば會津先生を一度敦煌にご案内したい。西安まで行けばそれから向うは自動車で行かれます。甘肅省から向うは仏教美術の古いものが保存されております⁽²⁾」と対談のうちに會津に伝えた。しかし、會津の訪中が実現することはなかった。また、四九年以降二人の直接の交流は見られない。

(堀川英嗣・王亜峰)

第八章 実業家との交流

一、はじめに

錢瘦鉄が日本人に刻した印を職業別に見ていくと、現在までに確認できたなかでは日本画家四十三人、政治家十二人に続いて実業家八人となっており、実業家が書家その他の職種よりも多く、依頼した印の総数も四十顆近くに上っている。そこで、本章では錢と実業家の交流について叙述していきたい。

本章に関連する先行研究としては、角田勝久は「未見の會津八一書簡…渡邊湖畔宛錢瘦鉄に関するもの」『書叢』十六号(二〇〇二年)及び同「補遺」『書叢』十七号(二〇〇三年)で會津の渡辺宛書簡五通及び五顆の自用印について考察しているが、その他の実業家と錢の交流については現在まで関連する論考を見ない。以下に錢と高嶋菊次郎、土屋計左右、武田長兵衛、外山捨造をめぐる交流について、文献資料及び実施調査等から得た知見を交え考察していきたい。まずは高嶋との交流である。

二、高嶋菊次郎(一八七五—一九六九)との交流

(1) 高嶋菊次郎について

日本人の書と、中国人の書は、まるつきりちがいます。どこことなく、筆の持ち方もちがうし、第一、気持ちがちがう。支那人は、根強くて急がない性質でしょう。日本人は、根強い点はあるかも知れないが、やはり気が早い。それが、どうしても書にあらわれる。日本人の草書は、字が走っている。支那人は、走らないで、字をもつて行く。走るようではしらないのが草書です。⁽¹⁶⁾

高嶋菊次郎はこのように、日中書法の差異を指摘している。高嶋の書画界への貢献は、東京国立博物館への槐安居コレクション寄贈を始めとして、広く世に知られている。関連する先行研究は、実業家の一面について論じたものが多く、書画については槐安居コレクションを中心に検討した松村茂樹⁽¹⁷⁾（一九九二）の論考がある。松村は収蔵家としての高嶋に注目し、その根底となった学問素養について叙述している。

高嶋菊次郎は福岡県の人。四三年（六十九歳）の時、中支那振興株式会社の総裁に就任し、四五年まで上海に滞在した。戦後は六九年に九十五歳で逝去するまで、鶴沼の邸宅で読書と散策を楽しみ過ごした。

高嶋は十五歳頃から本格的に漢学を学び、二十六歳から中国、台湾に長期滞在する等、早くから中国文化に親しんだ。収蔵については「王子在職当時から書道を研究されたが、同時に、中国の書・画の蒐集に熱心だった。ながいあいだ、すくなくならぬ私財を投じて集めた逸品は、おそらく数百点にのぼるであろう」とあるように、三十代後半から書画の蒐集をはじめていたことが窺える。また「一九一七年頃（四十三歳）から集めはじめ、第二次世界大戦頃には相当な規模になっていた⁽¹⁸⁾」と言われており、二十年以上かけてコレクションを形成したことがわかる。高嶋は自身のコレクションを鑑賞するだけでなく、臨書を日課としており、年譜には二七年（五十三歳）頃より、「書に対する関心を深め、もっぱら松翁の心経を習⁽¹⁹⁾」い、一九年（五十六歳）には「書について自得するところあり、これより一段と書に専念⁽²⁰⁾」していたとある。

（2） 錢瘦鉄と高嶋菊次郎の交流

続けて錢と高嶋の交流について、①錢瘦鉄刻高嶋菊次郎自用印、②高嶋菊次郎の上海時代における中国人との交流、③沈子丞、錢瘦鉄画「高嶋菊次郎像」に分けて検討していきたい。

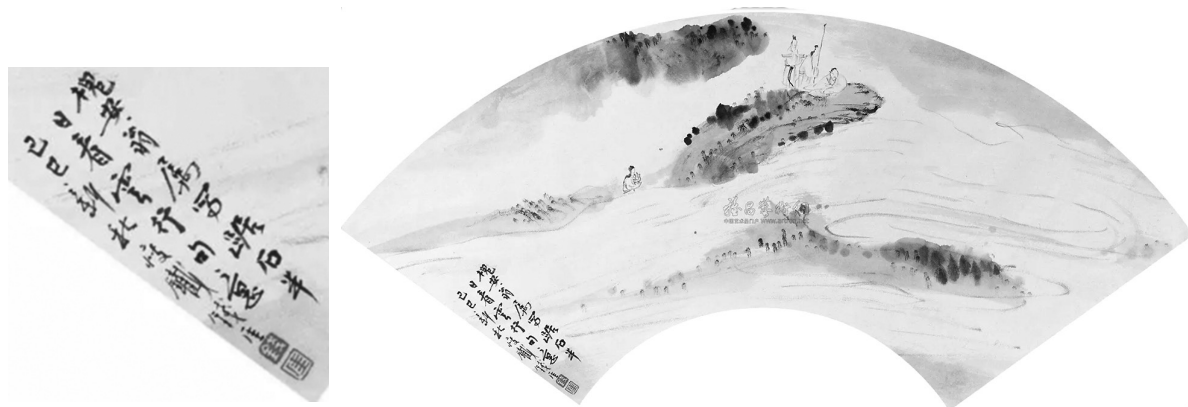


図 44 銭瘦鉄扇面作品と落款（『二〇一二年横浜国際オークションカタログ』）

① 銭瘦鉄刻高嶋菊次郎自用印

銭と高嶋の出会いについて明確な記載はない。銭が刻した高嶋の自用印は、対印を含めて計十四顆確認でき、側款からのもとも早期のもので「乙丑十月」、つまり二五年十一月下旬頃である。現在までにそれ以前の二人の交流を示す痕跡はないため、暫定的に出会いの下限を一九二五年としたい。時に高嶋は五十一歳、銭二十九歳のことであった。

二五年四月二十一、二十二日に銭は上海の文監師路の日本人倶楽部で展覧会を行っており、橋本も参観している。⁽¹⁸⁾この年、橋本の招待で二三、二四年に続き、十月に銭は三度目の訪日を果した。銭は二三年に京都、明石で個展、二四年にも銀座松屋で個展を開催しており、その名は橋本らの推薦を受け日本文化人の間で広まっていき、当時書に興味を有していた高嶋の知所となつたのであろう。銭が高嶋に刻した印の側款から、その後も高嶋は二九年秋、三一年夏と銭が訪日するたびに、ほぼ毎回篆刻の依頼をしていた。また、二九年秋に銭は高嶋に扇^{*}面作品（図44）、「槐安居主間閤」冊子を描いている。その後、高嶋と銭の交流は、四三年三月に高嶋が中支那振興株式会社総裁として六十九歳で上海へ赴任してからも続いている。

② 高嶋菊次郎の上海時代における中国人との交流

高嶋の上海赴任は当時『申報』にて大きく報じられた。中支那振興株式会社は「名前こそは株式会社であるが、実際はほとんど日本政府の代行機関のようなもので、中支那におけるいっさいの経済問題、ことに産業の開発については、すべてを指導監督する立場にあつた」⁽¹⁹⁾ため、非常に強い権力を有していた。高嶋は上海到着後、最初はガーデンブリッジ近くのブロードウェイマンション、その後フランス租界の海格路の総裁公館に寓した。

栖原文子（本州製紙栖原専務取締役夫人）の回想には、高嶋の公館での生活の様子が描かれている。「軍、官、民の要人を始め、中国の著名な方々、そして、御趣味の深いお集まりと、その御接待の数は、大変なものでした」⁽²⁰⁾と、多くの人が高嶋を訪ねてきたことがわかる。南京政府の要人では「褚民誼、周仏海、梅

図45 沈子丞、錢瘦鉄「高嶋菊次郎像」(個人蔵)



思平、林柏生等⁽¹³⁾」の訪問を受けたが、高嶋の楽しみは何といつても上海の文人墨客との交流であった。「公館のお二階一間に、畳をしいて、ここでよく中国の文人墨客の方々と、詩や、絵の、お話しを、交わされたり、書かれたり、されました。閨秀画家周煉花(筆者注:「花」は「霞」の誤り)女史が、扇面に立葵の花を彩色されたのにおじ様が、「うす衣の姑娘行くなり並木街」とお書きくだされたのを、今でも大切に致しております⁽¹⁴⁾」とあり、高官から文化人まで多くの人々が公邸に集い、さながら日中友好サロンの様相を呈していた。錢瘦鉄も度々高嶋邸を訪れ旧交を温めたことであろう。

③ 沈子丞、錢瘦鉄「高嶋菊次郎像」

錢維多氏の手もとには当時、錢と高嶋の交流を偲ばせる作品が伝わる。沈子丞、錢瘦鉄画「高嶋菊次郎像」(図45)である。

同作は、着物をまとい帽子をかぶった高嶋が落ち着いた様子で座しており、遠く一点を見つめている。くつきりと描写された人物を引き立てるように穏やかな筆致で淡墨を用いて太い幹と立派な根、鬱蒼と生い茂った葉が描かれており、背景も高嶋の人物像を髣髴とさせる。

落款には錢の筆で「槐安居士七秩造象。癸未冬。子丞画。叔厓補景」とある。七秩は七十歳、癸未は一九四三年。子丞は沈子丞⁽¹⁵⁾を指す。叔厓は錢の字である。この年、高嶋は数えて六十九歳であった。翌年を待つて渡そうとしたのだろうか。しかしその機会を失したまま、同作は錢家に伝わることとなった。敗戦の雰囲気は刻一刻と漂う中で、二人の交流もままなくなっていたのであろうか。

一九四五年、高嶋菊次郎は上海を引き上げ、戦後GHQにより公職追放の身となる。そして、翌年に錢が再来日した時には、立場上面会が叶わなくなっていた。そこで、錢が戦時中に上海で高嶋から預かっていた呉讓之の『包世臣像』を西川寧に託すという佳話が生まれた⁽¹⁶⁾。

(3) 小 結

高嶋の次男泰二(一九二二—二〇一一)は父とともに上海に居していたが、陸軍上海部に勤務していたた



め戦犯として抑留され、二年後の一九四七年によりやく巢鴨拘置所から釈放された⁽¹⁵⁾。

銭家には高嶋泰二の一九九二年十一月十七日、銭大礼宛書簡^{*}(図46)が伝わる。そこには中国語で当時の銭瘦鉄との交流を懐かしむ内容が書かれている。関係する箇所を訳出すると以下の通りである。「……當時私も上海におり、しばしば海格路の家父公館で瘦鉄先生と会い、食事をともにしました。五十年前のことですが、本当に懐かしい思い出です。以前家父は中国画の鑑賞をこの上ない楽しみとしていました。多忙ななかでも、瘦鉄先生と中国芸術を議論することは、父にとってもつとも楽しい時間でした」とあり、ここでも高嶋と銭の芸術を通じた友誼を感じさせる。そして、沈子丞、銭瘦鉄「高嶋菊次郎像」についても以下のような感想を述べている。「手紙に書かれていた家父七十歳誕生日を祝う絵画についてはまったく存じ上げませんでした。同封頂いた絵のコピーにうつる家父は、中国の文人のように描かれていますね。感無量です。機会があれば是非この肖像画を拝見したいものです」とある。しかし、当時すでに八十歳を過ぎていた高嶋泰二がこの肖像画を目にすることはなく、同作が公にされることはなかった。

銭と高嶋の交流は、一九二五年の刻印依頼から四三年の高嶋帰国まで続いた。戦時の厳しい状況下で、二人はどのような芸術談議に花を咲かせたのだろうか。公務に追われていた高嶋にとって、銭とのひとはつかの間の休息であつたのではないだろうか。

三、その他実業家との交流

(1) 土屋計左右(二八八八—一九七三)

土屋計左右は、一九二二年に東京高等商業学校(現一橋大学)専攻部を卒業し、三井銀行に入行。一九一六年、同行上海支店設置と同時に赴任、二二年同支店長、三〇年に帰国し本店外国営業部長に栄転。三四年に体調不良のため四十七歳で退職⁽¹⁶⁾。後、四〇年四月に第一ホテルの創業に携わり、同年九月に取締役社長に就任した。

前稿でも土屋と銭の交流に触れてきたが、それらは全て土屋が帰国をしてからのことであつた。土屋は一六年から三〇年の十四年間にわたる上海滞在の中で、かなり早い時期から銭と交流があつたと思われる。

関連する記事を『申報』から見てきたい。

一つ目は、二九年十一月十日に上海の六三園で行われた呉昌碩の三回忌である⁽¹³⁸⁾。土屋の名が出席者の一人として記されている。同記事に錢の名は記されていないが、当時上海に帰国していた錢が参加していたことは十分に考えられる。

二つ目に、その同年十二月十三、十四日には、上海の毎日新聞社三階で『中日画家聯歡絵画展覽会⁽¹³⁹⁾』が開催される予定との記事がある。同展には倉橋西峯、渡辺晃堂の作品を中心に日中の現代書画家の作品数十点が出展された。土屋は発起人の一人に名を連ねている。錢の名はここにも記されていないが、出品していたのではないだろうか。

一九二九年十二月に上海で行われた橋本関雪歓迎会に「日賓土屋計左右暨其夫人」と土屋夫婦の参加がみられる⁽¹⁴⁰⁾。十二月十一日、橋本関雪は夫人とともに大連から上海を訪れ、上海美專学校の同人が中心となり送迎会が催され⁽¹⁴¹⁾、橋本はその翌日に帰国した。歓迎会は汪英宝（一八九七—一九七一・『時事新報』総経理）の延赴大西路にある私宅で行われた。日本側参加者には橋本、橋本夫人をはじめ、土屋とその夫人富美子、澤村幸夫⁽¹⁴²⁾、田中喜平等⁽¹⁴³⁾が参列、中国側は任董叔、謝公展、張善孖、王濟遠、張辰伯、錢瘦鉄とその夫人韓秀、孫雪泥、鄭午昌、許徵白、王个簃等書画家四十余人が参加した。

中国側参加者の中で錢だけが日本語に通じ、その他の人は筆談であった。座席では紙片が蝶のように飛び交い、任董叔、王个簃と詩の応酬が行われ、謝公展、王濟遠は画を論じたとある。宴会は王一亭のあいさつから始まり、興に乗り筆会も行われた⁽¹⁴⁴⁾。錢は接待の責任者であり、錢の妻韓秀は女性客の接待をしていた。錢は日本語を理解していたものの、身振り手振りで指示を出し、また筆会では筆を揮いながらも指示を出していたという⁽¹⁴⁵⁾。

一九三〇年に土屋は帰国するが、十一月五日に上海の日本総領事重光葵は私邸にて土屋の歓送会を行った。中国側の出席者には王一亭、黄賓虹、錢瘦鉄等の「芸術界名流」が集い盛大に行われた⁽¹⁴⁶⁾。その返礼として、十一月二十六日に土屋も上海の日本人倶楽部にて三百人を招待し宴会を開催した。馬孟容は土屋の上海における功績を踏まえて、次のように記録している。

（土屋は）上海に在任すること十四年。大胆でありながら和やか、礼儀正しく文雅である。我が国の人士との友誼は篤く、書画を雅好する。中日芸術の発展について、氏は提唱するところ余すところなかった。中日芸術同志会成立の際には、多くの賛助を頂いた。近日、本社の命により榮転帰国となる。芸術会の同志は梓園に集い、一頁ずつ作画をし、餞別として冊子を贈った。昨日、氏は返礼の宴会を日本人倶楽部にて開催し、海上各界の名流及び芸術の同志を招待した。……来賓は三百人となり、中国人、日本人が半数ずつ参加し賑やかに行われた。⁽¹⁰⁾

中日芸術同志会については、前稿第二章で既に述べた。同文にある「冊子」は現在も日本に伝わる。⁽¹¹⁾ 三百人という大規模な宴会から、土屋の上海における貢献が如何に大きかったかが想像できる。

銭との交流が何時から始まったのかは分らないが、土屋の上海滞在期間と上海書画家との交流を鑑みると、銭との交流も一九二〇年代の、それかなり早い段階から行っていたのではないだろうか。

土屋が銭について記したものはほとんど残っていない。また、これだけ深い交流があつたにも関わらず銭が土屋に刻した印も目にする事ができていない。だが、二人の交流の一端を土屋の息子計雄（一九二一—一九八九、第一ホテル社長等を歴任）の一九八四年十二月三日付の銭大礼宛書簡^{*}（図47）に見ることができ、関連する箇所を訳出すると以下のようになる。

錢瘦鉄先生のことにははつきりと覚えています。日中戦争が始まる前、錢先生が日本に滞在中、我が家に半年ほど居られました。錢先生について、先父は私に多くのことを話してくれました。今でもその時のことを懐かしく思います。前回、訪中した時に上海芸術院を参観し、そこで錢瘦鉄、王一亭、吳昌碩諸先生の思い出を話したところ、彼らはとても驚いていました。その時に、彼らは私に、錢先生は上海芸術院の重要な会員であることを教えてくれました。日中戦争の間、錢先生についての消息が途絶え先父は心配していました。しかし後に、錢先生が中国でご活躍だと知り、安堵していました。私は錢先生の数枚の画と篆刻を蔵しています……⁽¹²⁾

図48

①錢瘦鉄刻「杏雨書屋圖書之記」
朱文印（武田科学振興財団杏雨書屋所蔵）



図49

②錢瘦鉄刻「杏雨書屋」朱文印
（武田科学振興財団 杏雨書屋所蔵）



図50

③錢瘦鉄刻「杏雨書屋」朱文印
（武田科学振興財団 杏雨書屋所蔵）



土屋計雄は上海で生まれ、父計左右とともに三〇年に帰国した。一九三七年、日中戦争勃発以前には、錢が土屋宅で半年間逗留していたことはこれまで「錢瘦鉄年表」等にも一切記されていない。また、印文や個数は不明であるが、やはり土屋も錢の刻印を蔵していたことがわかった。

（2）五代目武田長兵衛（一八七〇—一九五九）

五代目武田長兵衛（武田和敬）は武田薬品工業の第五代目当主。同工業は初代により一七八一年に大坂で薬種商として創業し、以来その名は六代目武田長兵衛（一九四三—七四）まで継承された。

五代目武田長兵衛と錢の直接の交流を示す文献はないが、五代目が行った文化事業の一つ、杏雨書屋の設立と同書屋の蔵書印がその接点である。

杏雨書屋蔵書印についての先行研究には平松賢二（二〇一六）の論考がある。平松は「杏雨書屋の蔵書印」展示会と講演会を開催しているが、その中で、五代目の蔵書印は十五顆あること、京都の篆刻家・石川蘭八（一八六七—一九三二）の印を好んで使用していたこと、一九三六年九月に錢瘦鉄が「杏雨書屋圖書之記」朱文印を刻したことを指摘している⁽¹²⁾。しかし今回、錢の日本人に刻した印の実地調査を行う中で、その他に二顆の錢刻蔵書印の所蔵を確認することができた⁽¹³⁾。

①（図48）には側款に「杏雨書屋主人正之。丙子九月叔厓刻」とある。杏雨書屋主人は五代目武田長兵衛のこと。一九三六年九月刻。錢が杏雨書屋に刻した印の中で、唯一年款のある印である。その前年、三五年に錢は『瘦鉄印存』を刊行しており、同印譜が五代目の旧蔵品として杏雨書屋に伝わることから、五代目は同印譜を見た上で錢に刻印を依頼したと考えられる。同印にはもうひとつの側款「庚寅正月。瘦鉄撫漢画」が刻されている上に、印側面に虎図が施されている。「庚寅」は五〇年。錢は四九年に香港へ、一九五〇年には上海へと帰国しており、その後は前章で記した五七年の小杉放菴宛書簡一通を除いて日本人との交流の足跡は一切みられない。錢がどこでこの側款を刻したのかはわからない。また五代目が当時上海に赴いたという記述もないが、「庚寅」側款は五〇年代初期も錢が日本人と交流をしていた可能性を示すものとなった。

② (図49*) はこれまで刻者が不明とされていたが、実地調査から側款に「杏雨書屋主人雅属。叔厓刻」と確認することができ、銭の刻と判明した。

③ (図50*) はこれまでも印影が書籍に収録されていたが、実見により木印と確認することができた。①と②は未発表の印影であり、銭の印譜を補足することができた。このように銭は五代目武田長兵衛に、杏雨書屋蔵書印三顆を刻していたことがわかった。しかし、この他にも銭の武田への刻印の存在がうかがわれる記述がある。それは五代目武田長兵衛編集、錢瘦鉄『杏雨書屋蔵印』印譜である⁽¹⁰⁾。同印譜は三六年の出版とあるが、杏雨書屋にも蔵されておらず、現在まで確認できていない。

(3) 外山捨造 (一八八三—一九四一)

外山捨造は大阪の実業家、外山脩造 (一八四二—一九一六、阪神電鉄初代社長) の三男。父脩造は收藏家であり、「翁は晩年価うを厭わず書画を蒐輯して逸品甚多かりしもの如し就中尤も宝愛せしは澄清堂帖と廬象昇の書幅なり⁽¹¹⁾」と、その古玩愛好が知られている。子の捨造も同じく骨董趣味を有していたのである。捨造には関連する文献は少なく、蔵品が『書苑』誌に数度掲載されている他は、簡単な紹介が残る程度である⁽¹²⁾。

五代目武田長兵衛同様に文献資料から外山捨造と錢瘦鉄の交流を確認することはできないが、銭が外山に刻した印が『瘦鉄印存』に収録されており、一・一から三・六センチまで、大きささまざまな十顆 (白文、朱文印各五顆)、更に妻治子の用印として二顆が確認できる。外山はよほど銭の印を気に入ったのであろうか、一度に依頼をしたものと考えられる。尚、銭の外山への刻印はこの時以外は見られず、一九三五年以降刻印の依頼は見られない。

四、おわりに

本章では錢瘦鉄と実業家の交流をテーマに、高嶋菊次郎、土屋計左右、五代目武田長兵衛、外山捨造に焦点を当てて検討を加えた。高嶋、土屋は一九二〇年代から銭と交流をし、また時期は異なるが、ともに



図51 錢瘦鉄刻「男爵三井寿太郎」朱文印

上海に長期間滞在しており、その間も錢と交流を保っていた。

土屋は三〇年に上海から帰国したが、一六年からすでに呉昌碩や王一亭と親しく交流しており、錢が同年二十歳で上海題襟館金石書画会に参加したことを考えても、日本人の中で錢と最も早く面識を有した一人であつたと考えられる。土屋の名は現在の書画界では語られることもなくなつたが、高嶋同様に日中書画界の懸け橋となる人物であつた。

五代目武田長兵衛との交流については、杏雨書屋藏書印を実地調査し、新たに二顆の錢刻印を発見することができた。更に調査の途中で、五代目武田長兵衛編集、錢瘦鉄『杏雨書屋藏印』印譜（一九三六年出版）の存在を知つたが、未だ実見できていないため、今後調査を継続していきたい。

外山捨造のように、妻の印と併せて小ささまざま一度に十数顆を錢瘦鉄に刻印を依頼するという情況は珍しく、外山の錢印の氣に入りようが想像できる。

錢瘦鉄の刻印を調査する中で、これまで錢の印譜に収録されていなかった三井寿太郎（高德）への刻印も目にする事ができた。^{*}「男爵三井寿太郎」朱文印（図51）、側款には「己巳夏六月為三井男爵篆。瘦鉄」とある。一九二九年の刻。言わずと知れた三井財閥の第十一代当主で、中国書画收藏家である。

（堀川英嗣・清原健）

第九章 おわりに

本研究では日中書法交流研究の角度から、一九二二年から四九年まで日中間を往来し多くの日本文化人と交流を続けた錢瘦鉄を中心に、第一章から第四章までを縦軸として、年代ごとに錢の日中間における活動の模様を明らかにした。そして、第五章から第八章までを横軸として、錢と交流をした書画家、実業家たちの動きも視野に入れて、当時の錢をめぐる日本文化人との交流について多角的に検討を加えた。

本論の第二章「錢瘦鉄来日から展覧会参加（一九二二—一九三六）」では、二三年の錢来日から三七年に『書苑』に参画するまでの交流を、錢が参加した書画団体を中心に、その動きをたどった。錢はまだ二十代

であつたが、中日共同開催の美術展、民間の書画団体に積極的に参加し、その交流は三二年の上海事変後も継続した。銭は日中間が緊張状態に陥っていく中でも、常に芸術による平和を希求し、そのことが後の幅広い日本人との交流につながっていたのではないかと考えられる。

第三章「錢瘦鉄の『書苑』 参画から検挙、帰国まで（一九三七—一九四一）」では、『錢瘦鉄自筆年譜』や当時の裁判記録、銭の家族宛書簡等を用いて、銭の検挙から釈放までの動きについて考察を行った。その結果、銭が拘留されていた間も、周囲の日本人の刑務所との交渉や刑務所側の中国美術への理解も重なり、銭は刑務所内にアトリエを与えられ引き続き書画篆刻に従事し、刑務官や裁判官さえも獄中の銭に書画の依頼をしていたことを指摘できた。

第四章「錢瘦鉄の帰国と再来日及びその後（一九四二—一九四九）」では、釈放され中国に帰国した銭を訪問した日本人及び戦後の銭の再来日時動きについて考察を加え、四〇年代の日本占領下の上海においても、抗日機運が高まる中で、一貫して芸術と戦争が無関係であると主張し日本人との交流を続け、その態度は一九四六年に連合国占領軍代表団の一員として再来日してからも変わることが無かったことを明らかにした。

第五章「橋本関雪との交流」では、日本に銭を招待した動機や合作を通じて、それまでの中国に学ぶ一方通行的な日中芸術交流ではなく、彼らが芸術思想を含めて新たな相互交流の形を築いていたことを明らかにすることができた。

第六章「小杉放菴・石井林響との交流」では、『小杉放菴日記』を用いて、銭拘留をめぐる小杉取り調べの詳細や小杉や會津が銭の逮捕後、直ぐに關係部署へ足を運び土屋計左右等とともに対策を練っていたことを明らかにするとともに、これまで語られてこなかった會津の銭釈放への尽力を裏付けることができた。

第七章「會津八一との交流」では、これまでは會津と銭は一九二九年に初対面し、そこから急速に交流を深めたとされていたが、実際にはその数年前から會津は銭の存在を認識し、交流の下準備はそれまでに十分整っていたこと、二人の初対面の日時が現行の説より早い可能性を指摘することができた。また、會津の諸人へ宛てた書簡からは、二十年間の交流の中で途絶えることなく銭を周囲の人々に推薦し、その芸

術を広めようとしていた會津の姿を認めることができた。そして、その根底には錢の人格、芸術の高さに加えて會津の「篆刻の革新」という思想があつたのではないかということがわかった。

第八章「実業家との交流」では、高嶋菊次郎、土屋計左右、五代目武田長兵衛、外山捨造との交流について検討し、とりわけ土屋は一九一六年から十四年間にわたり上海に滞在し、最も早期に錢と面識を持った一人と思われることがわかった。また高嶋は四〇年代の上海でも、自邸に日中の芸術家を招き、さながら日中文墨サロンのような賑わいを見せていたことを指摘できた。また、高嶋、土屋ともに二代にわたり錢と交流を持っていたことが錢家に伝わる書簡から判明した。

最後に第十章に替えて附録「錢瘦鉄が日本人に刻した印一覧表」からは、現行の印譜資料等を駆使して、錢瘦鉄が日本人に刻した印を計一三〇名四〇七顆にわたり確認することができた。

一九二〇年代から四〇年代にかけての日中における錢瘦鉄をめぐる日本文化人との交流について、中国では政治的配慮から、近年までは一九五〇年代以降の書画作品が研究対象とされ、それ以前の状況はほとんど論じられることもなかった。また、日本では錢と日本人との交流が個々に研究されてきたものの、中国語資料を用いた研究はあまり行われてこなかった。

中国では二〇一八年より毎年、杭州・上海にて錢瘦鉄及びその文化交流をテーマとした書画展が開催されている。日中国交正常化五十周年に当たる本年も、引き続き開催が予定されており、それにともない、今後より一層錢と日本人の交流が注目されていくであろう。

本研究により錢瘦鉄と日本文化人との交流の模様を、基礎的な段階ではあるが、一定程度明らかにすることができ、日中書道交流史研究の空白を埋めることにも貢献できたと思われる。

(堀川英嗣)

〈注〉

(1) 橋本関雪の経歴については橋本関雪著、橋本節哉編『白沙村人随筆』(中央公論社、一九五七年)、『墨美』第二五六号(墨美社、一九七五年)、『没後五〇年記念橋本関雪展』(朝日新聞社、一九九四年)、西原大輔『橋本関雪——師とするものは支那の自然——』(ミネルヴァ書房、二〇〇七年)を参照。

(2) 橋本関雪著、橋本節哉編『白沙村人随筆』中央公論社、一九五七年、一三三頁。

- (3) 柿木原くみ「日本における錢瘦鉄」『書学書道史論叢』萱原書房、二〇一一年、一六七頁。
- (4) 西原大輔『橋本閑雪——師とするものは支那の自然——』ミネルヴァ書房、二〇〇七年、一二三頁。
- (5) 『読売新聞』一九二三年四月二十五日朝刊、七面。
- (6) 橋本閑雪「思い出す事ども」『中央美術』第九十五号、一九二三年、一三四頁。
- (7) 原文「今看其画俊逸清秀、深得古人之旨、其刻又必高雅可知也」(『瘦鉄印存』西洽印社、一九二四年)。
- (8) 橋本閑雪「上海雜記」(三)『朝日新聞』、一九四三年五月二十日朝刊、四面。
- (9) 澤村幸夫「錢瘦鉄 韓秀」『上海人物印象記』第一集、東亜研究会、一九三〇年、四十七頁。
- (10) 橋本閑雪「身辺雜記四——最近支那游記——」『美の国』第二卷第十二号、一九二六年、五十二頁。
- (11) 橋本閑雪「上海雜記」(二)『朝日新聞』、一九四三年五月十九日朝刊、四面。
- (12) 高折妙子「錢瘦鉄さんのこと」『橋本閑雪印譜』東京堂出版、一九九一年、二〇八頁。
- (13) 橋本節哉「錢さん」『閑雪遺印 錢瘦鉄展』白沙村莊発行、一九七五年、二頁。
- (14) 同右、三頁。
- (15) 橋本帰一「閑雪コレクション概説」『墨美』第二五六号、墨美社、一九七五年、五頁。
- (16) 橋本、前掲文、『中央美術』第九十五号、一九二三年、一三四頁。
- (17) 橋本帰一「序文」『橋本閑雪印譜』東京堂出版、一九九一年、三頁。
- (18) 藤枝晃「閑雪画伯の印癖」『生誕一〇〇年橋本閑雪展』朝日新聞大阪本社企画部、一九八四年、九十九頁。
- (19) 水野恵「橋本閑雪の印について」『没後五〇年記念橋本閑雪展』朝日新聞社、一九九四年、一一三頁。
- (20) Aida Yuen Wong "A Chinese Seal Carver in Japan: Qian Shoutie and the Literati World of Hashimoto Kansetsu"『世変・形象・流風：中国近代絵画1796-1949 學術研討會論文集』財団法人鴻禧芸術文教基金会、二〇〇八年、四三〇頁。
- (21) 水野恵「正直なる事鈴の如し」『橋本閑雪印譜』東京堂出版、一九九一年、二二二頁。
- (22) 橋本、前掲文、『墨美』第二五六号、墨美社、一九七五年、七頁。
- (23) 高折、前掲文、『橋本閑雪印譜』東京堂出版、一九九一年、二〇八頁。
- (24) 同右、二〇九頁。
- (25) 橋本、前掲文、『中央美術』第九十五号、一九二三年、一三四頁。
- (26) 『読売新聞』一九二三年四月二十五日朝刊、七面。
- (27) 「錢瘦鉄雅印会」『読売新聞』一九二五年十月二十一日朝刊、四面。
- (28) 「美術界消息」『中央美術』第十一卷第十一号、一九二五年。
- (29) 會津八一『會津八一全集』第九卷、中央公論社、一九八三年、四十四頁。
- (30) 雁魚来往研究会編集『雁魚来往』二号、新潟市會津八一記念館、二〇一四年、十三頁。
- (31) 「齊白石老篆刻取次」『美術』第十三卷第一号、美術発行、一九三八年。
- (32) 澤村、前掲文、『上海人物印象記』第一集、東亜研究会、一九三〇年、四十八頁。
- (33) 『読売新聞』一九二九年九月六日朝刊、五面。『書画骨董雜誌』第二五六号、一九二九年を参照。

- (34) 「錢瘦鉄氏個展」『文芸時報』一九二九年、三面。
- (35) 株式会社資生堂企業文化部『資生堂ギャラリー七十五年史 一九一九—一九九四』求龍堂、一九九五年、一一四頁。
- (36) 『橋本関雪・錢瘦鉄交流回顧展』（橋本関雪・錢瘦鉄交流回顧展）実行委員会、一九九四年、『中国嘉徳・嘉徳四季二〇〇五オークションカタログ（中国書画二）』（中国嘉徳オークション、二〇〇五年）、大阪市立美術館・渋谷区立松濤美術館『上海——近代の美術——』（美術館連絡協議会、二〇〇七年）、『北京永楽・二〇〇七年中国現代書画オークションカタログ』（北京永楽オークション、二〇〇七年）、『誠軒・二〇一七年春季オークションカタログ（中国書画（二））』（北京誠軒オークション、二〇一七年）、『西洽印社・二〇一七年秋オークションカタログ（従国立芸專到中国美院——「国」「美」九十年記念）』（西洽印社オークション、二〇一七年）、『中鴻信・二〇一八年秋オークションカタログ』（中鴻信オークション、二〇一八年）、『解衣磅礴——錢瘦鉄 橋本関雪交流回顧展』（浙江美術館、二〇二〇年）を参照。
- (37) 橋本関雪著、橋本節哉編、前掲書、一九五七年、三二五頁。
- (38) 大阪市立美術館・渋谷区立松濤美術館『上海——近代の美術——』、美術館連絡協議会、二〇〇七年、一六二頁を参照。
- (39) 斎藤恵太郎編『関雪詩存』、出版社不詳、一九三九年、一一七頁。
- (40) 橋本関雪著、橋本節哉編、前掲書、一九五七年、三〇八頁。
- (41) 馬孟容「歆宴日本画家橋本関雪記」『申報』一九二九年十二月十一日。
- (42) 橋本関雪著、橋本節哉編、前掲書、一九五七年、二五九頁。
- (43) 錢維多氏には、二〇二〇年四月四日に浅野がSNSを通じて話を伺った。
- (44) 斎藤、前掲書、一九三九年、一九六—一九八頁参照。
- (45) 一九二八年三月三十一日『申報』では橋本関雪が同年四月四日に上海に到着する予定であること、同年四月七日『時報』では展覽会に出品された三十点が完売したことを伝えている。当時、上海で大いに注目を集めていたことが窺える。
- (46) 原文「以詩名於時、興酣落筆如風雨驟至、不拘拘格律而自得唐賢三昧。」（『上海漫画』一九二八年四月六日）。
- (47) 原文「放歌長嘯、以抒奇氣、暇輒解衣磅礴、具晋人風着」（同右）。
- (48) 原文「癸亥四月余携妻奴子游杭蘇之間、終促瘦鉄錢君相伴回婦留杖我白沙村莊。故旧門生乞刻者頗多。皆是我國名流逸士也。君輯其所刻之印以題記鴻爪征余。言余原不精篆刻維然、今看其画俊逸清秀渾得古人之旨。其刻不必高雅可知也。聊記一語」。
- (49) 『申報』一九三二年三月二十八日。
- (50) 『申報』一九三二年四月十七日。
- (51) 「展覽會記」『中央美術』第十二卷第九号、中央美術社、一九二六年、一七四頁。
- (52) 澤村、前掲文、『上海人物印象記』第一集、東亜研究会、一九三〇年、四十九頁。
- (53) 蔡家丘「小杉放庵の「東洋趣味」について——東アジア旅行、中国絵画への認識と受容をめぐる」『美術史』一七六号、美術史学会、二〇一四年、三一一頁。
- (54) 同右、三一一頁。
- (55) 前掲文、『読売新聞』一九二五年十月二十一日朝刊、四面。
- (56) 小杉放庵「界方事件」、『芸術』第四卷一号、一九二六年一月五日。

- (57) 小杉、前掲文、『芸術』第四卷一号、一九二六年一月五日、七頁。
- (58) 尚、白沙村莊HPには、橋本節哉は一九二八年以降池袋に居たとされているが、小杉文からは一九二五年には池袋に居ていたことがわかる。<https://hokusablog.kyo2.jp/e439166.html> 二〇二二年二月十七日閲覧。また「錢瘦鉄雅印会」『読売新聞』一九二五年十月二十一日第四面にも、錢瘦鉄印の申し込み先として「池袋丸山祥雲寺裏橋本節哉方」とある。
- (59) 小杉放庵「放庵雑話」『アトリエ』第四卷第七号、一九二六年三月五日、二頁。
- (60) 『読売新聞』一九二六年三月十四日朝刊、五面。
- (61) 森田恒友「林響氏と私」『土筆』第四卷九月号。柿木原くみ「錢瘦鉄と有島生馬の周辺・補訂…住友寛一と石井林響と」、『相模国文』三十九号、二〇二二年を参照。
- (62) 堀川英嗣、浅野泰之、段毅琳「錢瘦鉄をめぐる日本文化人との交流について——一九二二年から四九年を中心に(上)——」『公益財団法人 日本習字教育財団学術研究助成成果論文集』六号、二〇二二年、四十二頁。
- (63) 小杉未醒「支那現代の南画」『支那時報』五卷二号、一九二六年八月、二十六頁。
- (64) 放庵「支那の青年画家」『アトリエ』四号、一九二七年八月、一三八頁。
- (65) 大鹿卓「錢瘦鉄氏のこと」『桃源』十一号、一九四八年、二十六頁。
- (66) 堀川、浅野、段、前掲論文、『公益財団法人 日本習字教育財団学術研究助成成果論文集』六号、二〇二二年、五十四頁。
- (67) 原文「相識了王芑生偽参事、他相煩我伝致情報、利用我寓所与日本人士会面之所」(錢瘦鉄『我五十七年以来回憶』一九三七年の項)。
- (68) 柿木原くみ「錢瘦鉄と有島生馬の周辺・補訂…住友寛一と石井林響と」『相模国文』三十九号、二〇二二年、五十三頁。
- (69) 薛暉、錢晟編『鉄骨丹青——錢瘦鉄紀念文集』、上海社会科学出版社、二〇一九年、二六六頁。
- (70) 『生誕一三五年 石井林響』美術出版社、二〇一八年参照。また石井がこれだけの短期間で同作を手放した理由について金井紫雲は「林響氏は情の人である。…それから品川時代に石濤の画冊を手に入れたことがある。素晴らしいもので、氏はこれを手に入れるために、相応多くの蔵幅を手離した。すると間もなく氏の後援者某氏の家が破綻して、どうしても大金が入る。氏はこれを見るに忍びぬと、涙を揮って生命から二番目の石濤を手離してしまった」と記している。(金井紫雲「白鵬亭林響を憶う」『美術』十四号、美術発行所、一九三九年五月、八頁)。
- (71) 関連する先行研究には出光佐千子「小杉放庵の名勝画冊…石濤筆『黄山八勝画冊』の周辺」(『出光美術館研究紀要』十九号、二〇一三年、一二五—一四〇頁)、柿木原の前掲文がある。
- (72) 外狩顕章『現代南画大結集画冊』(中外商業新報社、一九二六年)の目録に「中華賓客 錢瘦鉄先生」とあり錢の絵画作品「嚴先生」が収録されている。同作の落款には「丙寅正月写於五松居。瘦鉄並題」とあり、ここから一九二六年正月に錢が石井林響宅に寓していたことがわかる。
- (73) 水谷清の錢瘦鉄訪問については大鹿卓「錢瘦鉄氏のこと」『桃源』一九四八年、十一号二十四—二十九頁参照。
- (74) 雁魚来往研究会、會津八一記念館編『雁魚来往』、新潟市會津八一記念館、二〇一三年、一〇五頁。
- (75) 同右。
- (76) 原文「希望到日本去開画展、以促進中日文化交流」。

(77) これまで、錢瘦鉄刻會津八一自用印について宮川寅雄は三十一顆(『秋艸堂印譜』、八頁)、角田勝久は二十九顆(角田勝久『孤高の書人 會津八一』、一〇三頁)としているが、清原の調査により三十四顆と判明した(附録「錢瘦鉄が日本人に刻した印一覧表」参照)。

(78) 宮川寅雄、『秋艸堂印譜』、二玄社、一九七九年、六頁。

(79) 安藤更生、『書豪會津八一』、二玄社、一九六五年、六十一頁。

(80) 同右。

(81) 尚、『小杉放菴日記』に錢瘦鉄を會津八一に紹介した記録は見られないが、同日記には一九二九年八月十二日に錢が小杉宅に泊したとあり、小杉はその前後に錢を會津に紹介したと思われる。

(82) 宮川、前掲書、二玄社、一九七九年、八一頁。

(83) 安藤更生他『會津八一全集』九卷、中央公論社、一九八三年、四十四頁。

(84) 角田勝久『孤高の書人會津八一』(二〇三頁)に、刻印の時間を「夏とは陰曆で四月から六月」と記しているが、具体的には一九二九年は五月六日が立夏、八月七日が立秋であるため、八月をその下限としたい。

(85) 角田勝久『孤高の書人會津八一』龍鳳出版社、二〇一四年参照。

(86) 會津八一「個展をひらく 錢瘦鉄君を伝う」『新潟新聞』一九三六年十一月六日。

(87) 錢季寅『近代名賢印選』(一九二五年、千頃堂書局)に、錢瘦鉄の印は吳昌碩の次に掲載されている。

(88) 「支那画家錢瘦鉄氏個展」『朝日新聞』、一九二九年九月六日第五版。「錢瘦鉄氏個展」『文芸時報』、一九二九年九月十八日、三頁。「錢瘦鉄氏の個展」『書画骨董雜誌』第二五六号、一九二九年十月号、十九頁等に広告が掲載されたが、これらの世話人に會津八一の名前は見られない。

(89) 安藤他、前掲書九卷、中央公論社、一九八三年、四十七頁。

(90) 宮川、前掲書、二玄社、一九七九年、九頁。

(91) 「橋本独山」『日本美術年鑑』、美術研究所、一九三九年、一一〇頁。

(92) 錢瘦鉄「帝展寸感」『アトリエ』十二号、アトリエ社、一九二九年、三十六頁。

(93) 角田勝久「錢瘦鉄と會津八一」『金石書学』二十四号、芸文書院、二〇二〇年、三十八頁。

(94) 例えば、①一九三五年六月一日付の日相馬御風宛書簡に「先年渡来の中人錢瘦鉄再び来朝し只今京都にあり近日出京の筈にて候。篆刻等の御用御坐候はば御紹介可申上候。」(安藤更生他、前掲書、九卷、一四五頁)、②一九三五年十二月十一日付の相馬御風宛書簡「先年来世話し居る錢瘦鉄というものの近作印譜成り候間壹部供覧候。人物なかなかよろしく篆刻も年々上達致し候」(安藤更生他前掲書、九卷、一五一頁)、③一九三五年十二月十一日付、増村度次宛書簡「支那から渡来の錢瘦鉄と申すものの印譜壹部御笑覧に供し候。年はまだ四十才に達せず候えども筋はなかなかよろしく先年来小生も少しく世話致し居り候」(雁魚来往研究会、會津八一記念館編『雁魚来往』八号、新潟市會津八一記念館、二〇二〇年、二十一頁)等がある。

(95) 一九二二年四月二十二日「伊達俊光宛書簡」(植田茂雄『秋艸道人會津八一書簡集』、恒文社、一九九一年、三〇四頁)、更には一九二二年四月三日、小泉清宛書簡に「近来、篆刻の革新ということを考え居り候」(植田茂雄前掲書、四九九頁)とある。

(96) 「書画もよくし人物も温雅」(吉江喬松宛書簡、一九二九年九月三日付)、「書がともによく人物も温雅」(渡辺湖畔宛書簡、

一九二九年九月三日)、「実に高雅なる君子」(関塚惣吉宛書簡、一九三六年十月十四日付)、「玉の如き人格者」(「個展をひらく錢瘦鉄君を伝う」)等、會津の錢に対する人格面の評価は一貫して高かった。

(97) 株式会社資生堂企業文化部、前掲書、資生堂企業文化部編集、一九九五年、一一四頁。

(98) 會津八一の丹呉康平宛書簡(一九三五年一月十四日付)に「過日は錢瘦鉄のことにつき御下問にて候ところ……昨夏銀座資生堂にて個展を催したる際出陳の印二十顆ばかり有之。いづれも一昨年に比して非常なる進歩にて小生も激賞致し候ほどにて候。一顆十四五円から二十円位にていづれも遊印にて用うるに堪へたるもの二三顆もとめおきて……日本人は彼に親切なるも、上海の支那人等は日本人に交際する同国人を迫害するために候」とあり、ここから錢が一九三三、三四年と個展を開催していたことが判明し、そのいづれにも會津の支援があつたことがわかつた(雁魚来往研究会、會津八一記念館編『雁魚来往』二号、新潟市會津八一記念館、二〇一四年、十四頁)。

(99) 「瘦鉄氏個展 作画と篆刻の発表」『新潟新聞』夕刊、一九三六年十一月七日。

(100) 會津、前掲文、『新潟新聞』一九三六年十一月六日。

(101) 前掲文、『新潟新聞』夕刊、一九三六年十一月七日。

(102) 「扱て又御熟知の錢瘦鉄来月末新潟に到して個展相開き……」(角田、前掲書、龍鳳出版社、二〇一四年、一〇五頁)。

(103) 前掲文、『新潟新聞』夕刊、一九三六年十一月七日。

(104) 堀川、浅野、段前掲論文、『公益財団法人 日本習字教育財団學術成果論文集』六号、二〇二二年、六十九頁。

(105) 安藤他、前掲書十卷、中央公論社、一九八三年、一五〇頁。

(106) 雁魚来往研究会、會津八一記念館編『雁魚来往』六号、新潟市會津八一記念館、二〇一八年、七頁。

(107) 雁魚来往研究会、會津八一記念館編、前掲書一号、新潟市會津八一記念館、二〇一三年、一〇七頁。

(108) 安藤他、前掲書十卷、中央公論社、一九八三年、一六五頁。

(109) 同右、一六六頁。

(110) 中山蘭子宛葉書(三月九日)には開幕式の「十六日がまだ七日の後であり、他人の家に厄介になり居ることが気苦勞です」、中山蘭子宛葉書(三月十二日)には「せめて個展の初日(十六日)だけ見て帰るようにしてくれという意見が有力となり……だいたい十六日夜行で帰国するものという風に承知しておいて下さい」、中山蘭子宛葉書(三月十三日)「十六日から予定の通り開会。その第一日だけ私自身隣席ということになりました。その晩に出発して帰郷ということに変更しました」(以上、安藤更生他、前掲書十卷、一八〇頁)、吉野英雄宛葉書(三月十日)「十六日があまりに遠くいかに閑職といっても一ヶ月にわたりて新潟を離れることは、……気がねすべきところと存じ候間、開会を待たずして数日中に帰郷可致すと存じ居り候」(安藤更生他、前掲書十卷、一七八―一八〇頁参照)と、更には料治熊太宛葉書(三月十日)には「展覧会のことについていろいろご配慮をかけてすみませんが、中村屋の態度がいつまでも不安定不決定で私の考に一致しないので私は開会前に東京を去ります」(雁魚来往研究会、會津八一記念館編『雁魚来往』三号、新潟市會津八一記念館、二〇一五年、四十頁)と、一ヶ月の東京滞在中で気疲れをしていたのに加えて、中村屋と會津の考えが一致せず不愉快に感じ、開会式前に帰ろうとしていたことがわかる。角田勝久の述べるように「上京した直後」(角田勝久『孤高の書家 會津八一』龍鳳出版社、二〇一四年、一〇八頁)に対談が行われたのではない。

- (11) 一九四九年四月二十六日の松下英麿の會津八一宛葉書に「全篇にわたり整理相加え錢氏の部分は再度錢氏の御話承り書加え申候」(雁魚来往研究会、會津八一記念館編『雁魚来往』五号、新潟市會津八一記念館、二〇一七年、一一五頁)、と松下英麿の整理に加えて、一九四九年七月六日の吉野秀雄宛葉書に『中央公論』六月号に錢君との対談出で候。：あれなども速記清書後殆ど拙者ハ七分通り書き直し候」(安藤更生他前掲書、十卷、二〇二頁)と會津が対談原稿を修正していたとわかる。
- (112) 角田、前掲論文、『金石書学』二十四号、芸文書院、二〇二〇年、三十八―四十一頁。
- (113) 漢・王延寿『魯靈光殿賦』に「非夫通神之俊才、誰能剋成乎此勳」、また唐・李商隱『王昭君』詩に「毛延寿画欲通神、忍為黃金不顧人」とある。
- (114) 角田、前掲論文、『金石書学』二十四号、芸文書院、二〇二〇年、三十九頁。
- (115) 対談「のこる美術のこす美術」『中央公論』、一九四九年六月号。
- (116) 會津、前掲文、『新潟新聞』、一九三六年十一月六日。
- (117) 錢維多氏によると、橋本関雪が錢瘦鉄に書き与えた「支那聖手」、「東亜奇才」の二幅は文化大革命の際に廃棄された。また會津八一の作品もこの時に、廃棄されかけたが「八一」の二文字が八月一日、つまり中国人民工農紅軍成立の記念日であったため難を逃れたという。
- (118) 大鹿、前掲文、『桃源』十一号、一九四八年参照。
- (119) 雁魚来往研究会、會津八一記念館編、前掲書二号、新潟市會津八一記念館、二〇一四年、三十三頁。
- (120) 南朝宋・劉義慶『世說新語』排調に「昔与汝為鄰、今与汝為臣、上汝一杯酒、令汝寿万春」、唐・閻朝隱『三日曲水侍宴应制』詩に「三月重三日、千春統万春」とある。
- (121) 『晋書』阮籍伝に「籍又能為青白眼。見礼俗之士、以白眼对之。及嵇喜来吊、籍作白眼、喜不慚而退。喜弟康聞之、乃齋(攜帶)酒挾琴造焉。籍太(大)悦、乃見青眼。由是礼法之士、疾之若讎」とある。
- (122) 吉池進『會津八一伝』、會津八一伝刊行会、一九六三年、六五六頁。
- (123) 同書簡には松下英麿宛に、土屋計左右の近信として、錢瘦鉄が兄貴分の医師と同じく上海南京路大慶里四二号に棲んでいるが、もしも分からなければ三井洋行(三井物産)時代に土屋の部下であり、同行秘書部に勤務していた王廷珪を訪ねればわかるとの言伝が同封されている。(安藤更生他、前掲書、九卷、二九八頁)ここからも會津八一が錢帰国後もその所在を把握していたことがわかる。
- (124) 吉池進、前掲書、六五六頁。
- (125) 安藤他、前掲書九卷、中央公論社、一九八三年、一六〇頁。
- (126) 大鹿、前掲文、『桃源』十一号、一九四八年、二六六頁。
- (127) 會津八一が知人に紹介した錢の印影は他にも大橋誠一に与えた『瘦鉄錢厓手拓自用印八贈』(書論編集室『書論』七号、書論研究会、一九七五年、三三八頁)、丹呉康平宛書簡の「秋艸道人」印(雁魚来往研究会、會津八一記念館編『雁魚来往』二号、新潟市會津八一記念館、二〇一四年、三三八頁)等がある。
- (128) 安藤他、前掲書十卷、中央公論社、一九八三年、六十頁。
- (129) 同右、六十二―六十三頁。

- (130) 錢瘦鉄「落合山莊図」は一九三四年発行の『村莊雜事』に収録されている。同作の『寒燈集』への収録について會津八一は山田博信宛書簡（二九四七年一月六日付）で、「これを影印して巻中に収め、永く両友の好意を謝し、また以て読者の興をたすけんとす」（雁魚来往研究会、會津八一記念館編『雁魚来往』五号、新潟市會津八一記念館、二〇一七年、五十二頁）と述べている。
- (131) 「一九四七年一月六日、山田博信宛書簡」（安藤他、前掲書十卷、中央公論社、一九八三年、七十七頁）。
- (132) 「一九四七年一月二十日、山田博信・武田繁太郎宛書簡」（同右、八十頁）。
- (133) 同右、九十六頁。
- (134) 同右、九十七頁。
- (135) 同右、一〇五頁。
- (136) 大鹿、前掲文、『桃源』十一号、一九四八年、二十九頁。
- (137) 松下英磨の會津八一宛書簡（一九四七年四月二十一日付）に「去る十七日中国代表团錢瘦鉄氏に面会の機を得久々にて文事を語り愉快でありました。同氏ハ近々中先生の御座右に何う由でありました。大鹿氏も同座。専ら秋艸堂の懐旧談に耽った次第であります」とある。（雁魚来往研究会、會津八一記念館編『雁魚来往』五号、新潟市會津八一記念館、二〇一五年、一〇頁）。
- (138) 會津八一「錢瘦鉄と私」（一九四七年十二月一日）（吉池進、前掲書、六五五―六五六頁）。
- (139) 一九四八年六月二十六日付の常盤登丁宛葉書に「錢公は月末拙者を訪ねて来越のよしなれども、時日は未だ確定に至らず候」（安藤他、前掲書十卷、中央公論社、一九八三年、一四二頁）。
- (140) 角田勝久は會津の「私は先年、一盃を錢君に勧めながら」を引用して、その一年前にも「対面があつたようである」と述べている（角田勝久「錢瘦鉄と會津八一」『金石書学』二十四号、芸文書院、二〇二〇年、四十一頁）が、これは先年を「一昨年」と解した誤読である。ここで「先年」とは、一九四一年の錢瘦鉄歸国前のことを指す。
- (141) 雁魚来往研究会、會津八一記念館編、前掲書二号、新潟市會津八一記念館、二〇一四年、三十三頁。
- (142) 対談、前掲文、『中央公論』一九四九年六月号。
- (143) 高嶋菊次郎「書と国民性」『思い出すまま』、高嶋菊次郎回顧録刊行協賛者同人発行、一九六七年、一四八頁。
- (144) 松村茂樹「高嶋槐安論——その收藏と素養——」『大妻国文』二十三号、一九九二年、七十九―一〇八頁。
- (145) 同右、一六一頁。
- (146) 松村、前掲論文、『大妻国文』二十三号、一九九二年、八十三頁参照。
- (147) 『槐安居春秋』槐安居春秋刊行会、一九七〇年、一三三頁。
- (148) 同右。
- (149) 「芸術新聞」『申報』、一九二五年四月二十日。
- (150) 河野幸之助「高嶋菊次郎伝」日本時報社出版局、一九六二年、四二四頁。
- (151) 前掲書、槐安居春秋刊行会、一九七〇年、八十八頁。
- (152) 河野、前掲書、日本時報社出版局、一九六二年、四二四頁。

(153) 前掲書、槐安居春秋刊行会、一九七〇年、八十八頁。

(154) 沈子丞（一九〇四—一九九六）浙江省嘉興の人。上海中華書局図画部主任、上海中国画院画師等を歴任した。人物画を善くした。

(155) 西嶋慎一『風姿花伝』、芸術新聞社、二〇一五年、五十四頁。

(156) 『槐安居春秋』槐安居春秋刊行会、一九七〇年、二三五頁。尚、高嶋泰二の終戦前後の抑留等については、『上海寄情』（求龍堂、一九九五年）に詳しい。

(157) 『三井銀行土屋営業部長引退』、『読売新聞』、一九三四年十二月二十七日。

(158) 王介籙「安吉吳昌碩先生己巳追薦会記事」、『申報』、一九二九年十一月二十二日。

(159) 「中日画家聯歡絵画展覧会」、『申報』、一九二九年七月九日。

(160) 馬、前掲文、『申報』、一九二九年十二月十一日。

(161) 「錢瘦鉄年表」には「九月上旬：大連から上海へ至る」（薛曄、錢晟『鉄骨丹青——錢瘦鉄紀念文集』、上海社会科学院出版社、二〇一九年、二七〇頁）とあるが、十二月十三日の『申報』掲載の藕篋『宴雪記』に「日昨来滬」（昨日上海に到着した）とあり、十二月十二日に上海に到着したことが確認できる。

(162) 澤村幸夫は大阪毎日新聞記者。上海に長期滞在していた。

(163) 田中喜平、長崎の人。上海で旅館勝田館を開く。中国の革命を支援する日本人がしばしば同旅館を利用した。西華徳路は現在の長治路、当時は日本人が多く住んだ虹口地区に当たる。

(164) 原文「合作精美。関雪翁最喜乘輿揮毫、此次与海上書画家。聚著一堂。不可不結墨縁叩留紀念、瘦鉄已備紙筆……」（馬、前掲文、『申報』、一九二九年十二月十一日）。

(165) 原文「瘦鉄周旋忙、此宴会雖為同仁所發起。而瘦鉄實為主幹。接洽招待。多瘦鉄任之。其夫人步伊女士。則招待女賓。瘦鉄雖能日語。然尚須作手勢以助之。一方握筆揮灑。一方則口講指画」（馬孟容、「飲宴日本画家橋本関雪記（下）」、『申報』、一九二九年十二月十三日）。

(166) 俞劍華「重光錢土屋」、『申報』、一九三〇年十一月九日。

(167) 原文「留滬任職十有四年。竟敢謙和。彬彬爾雅。与吾華人士交誼甚篤。且雅好書画。举凡關於發展中日芸術之舉。氏尤提倡不遺余力。中日芸術同志会之成立。氏贊助之力居多。近奉總行命。榮調回滬。芸術同志会公餞之於梓園。復各作画一葉。精裝成冊。以贈別。昨日氏答宴於日人俱樂部。邀請海上各界雋流旧雨。及芸術同志。藉以話別。……來賓約三百許人。中日各一半。濟濟跼跼。極一時之盛」（馬孟容、「日本俱樂部飲宴記」、『申報』、一九三〇年十一月二十七日）。

(168) 「贈土屋計左右先生合画冊」（大阪市立美術館・渋谷区立松濤美術館、前掲書、二〇〇七年、一四三頁）。

(169) 原文「錢瘦鉄先生、我記得很清楚。日中戦争開始之前、錢先生在日本逗留中、住在我家半年左右。關於錢先生、先父曾經跟我談了許多。時至今日還令我懷念。上次訪問中国的時候、我到了上海芸術院參觀。在那兒、我談了談對錢瘦鉄、王一亭、吳昌碩諸位先生的懷念的話、對方很感驚訝。當時他們告訴我、錢先生曾經是該芸術院的重要會員。日中戦争期間、沒有錢先生的消息、先父也在擔心。可是後來、他聽到了錢先生在中国很活躍、感到欣慰。我有錢先生的幾張画兒和篆刻……」（土屋計雄「錢大礼宛書簡」、一九八四年十二月三日）。

(170) 「植物文獻刊行会をつくり、稀覯書として入手困難な科学書を複製頒布して研究者の便に供し、数年にわたる正倉院薬物の科学的調査を助成し……」とあるように五代目は積極的に文化事業を行っていた（『武田二百年史（本編）』武田薬品工業株式会社、一九八三年、三四八頁）。

(171) 五代目武田長兵衛（武田和敬）は、一九二三年九月、関東大震災により東京で貴重な典籍が灰燼に帰したことを大いに痛嘆し、日本・中国の本草医書の散逸を防ぐことが、将来、社会・学界のために極めて有意義であると考え、早川佐七氏蔵書、藤浪剛一氏蔵書などを、機会に應じ私財をもつて購入し、後に「杏雨書屋」と呼ばれる文庫を形成しました。ちなみに杏雨とは杏林（医学）を潤す雨の意です（出典は takeda-scior.jp、二〇二〇年八月十三日閲覧）。

(172) 武田科学振興財団・杏雨書屋編『第六十五回杏雨書屋特別展示会「杏雨書屋の蔵書印」』、武田科学振興財団、二〇一六年参照。

(173) 清原が二〇二〇年七月二十二日に杏雨書屋で調査を行った。

(174) 『書道全集別巻Ⅱ（印譜 日本 付索引）』平凡社、一九六八年、一三六頁。

(175) 武内義雄『軽雲外山翁伝』、商業興信所出版、一九二八年、一五二頁。

(176) 外山捨造の経歴は、『外山捨造氏』『朝日新聞』（一九四一年四月十二日、七頁）、原静村『昭和に輝く』（南海新聞社、一九三五年、十八頁）、山本尚志『昭和戦前期にピノを弾いた少女たちの人生と家族と憧憬』（学習院高等科紀要）十二号、二〇一四年、八十一―九十九頁）参照。尚『満州・朝鮮・台湾・上海等外地各所に工場、支店、関係会社を設けて市場の拡大を図った』（『斯の人を…続・日本経済を育てた人々』関西経済連合会、一九六八年、三二八頁）から、外山が中国にも事業を展開していたことがわかる。

〈参考文献〉

（目 本）

- 〔一〕 小杉放菴「界方事件」、『芸術』第四卷一号、一九二六年
- 〔二〕 小杉放菴「放庵雑話」、『アトリエ』第四卷第七号、一九二六年
- 〔三〕 小杉未醒「支那現代の南画」、『支那時報』五卷二号、一九二六年
- 〔四〕 放庵「支那の青年画家」、『アトリエ』四号、一九二七年八月
- 〔五〕 「支那画家錢瘦鉄氏個展」、『朝日新聞』一九二九年九月六日、第五版
- 〔六〕 「錢瘦鉄氏個展」、『文芸時報』、一九二九年九月十八日
- 〔七〕 「王済氏の画」、『東京朝日新聞』一九二九年十月二十日、五面
- 〔八〕 「錢瘦鉄氏の個展」、『書画骨董雑誌』第二五六号、一九二九年十月号
- 〔九〕 錢瘦鉄「帝展寸感」、『アトリエ』十二号、アトリエ社、一九二九年
- 〔一〇〕 澤村幸夫『上海人物印象記』第一集、東亜研究会、一九三〇年
- 〔一一〕 會津八一「個展をひらく 錢瘦鉄君を伝う」、『新潟新聞』、一九三六年十一月六日
- 〔一二〕 「瘦鉄氏個展 作画と篆刻の発表」、『新潟新聞』、一九三六年十一月七日
- 〔一三〕 『朝日新聞』、一九三七年十二月二十八日

- 〔一四〕 斎藤恵太郎編『関雪詩存』、出版社不詳、一九三九年
- 〔一五〕 『日本美術年鑑』、美術研究所、一九三九年
- 〔一六〕 金井紫雲「白鵬亭林響を憶う」、『美術』十四号、美術発行所、一九三九年
- 〔一七〕 大鹿卓「錢瘦鉄氏のこと」、『桃源』十一号、一九四八年
- 〔一八〕 會津八一、錢瘦鉄「のこる美術のこす美術」、『中央公論』六月号、一九四九年
- 〔一九〕 橋本関雪、橋本節哉「白沙村人随筆」、中央公論社、一九五七年
- 〔二〇〕 河野幸之助「高島菊次郎伝」、日本時報社出版局、一九六二年
- 〔二一〕 吉池進「會津八一先生伝」、會津八一先生伝刊行会、一九六三年
- 〔二二〕 安藤更生「書豪 會津八一」、二玄社、一九六五年
- 〔二三〕 高嶋菊次郎「思い出すまま」、高嶋菊次郎回顧録刊行協賛者同人発行、一九六七年
- 〔二四〕 『槐安居春秋』、槐安居春秋刊行会、一九七〇年
- 〔二五〕 書論編集室『書論』七号、書論研究会、一九七五年
- 〔二六〕 『墨美』第二五六号、墨美社、一九七五年
- 〔二七〕 宮川寅雄『秋艸道印譜』、二玄社、一九七九年
- 〔二八〕 安藤更生他『會津八一全集』、中央公論社、一九八三年
- 〔二九〕 『武田二百年史（本編）』、武田藥品工業株式会社、一九八三年
- 〔三〇〕 『生誕一〇〇年橋本関雪展』、朝日新聞大阪本社企画部、一九八四年
- 〔三一〕 植田茂雄「秋艸道人会津八一書簡集」、恒文社、一九九一年
- 〔三二〕 松村茂樹「高島槐安論——その収蔵と素養——」、『大妻国文』二十三号、一九九二年
- 〔三三〕 『没後五〇年記念橋本関雪展』、朝日新聞社、一九九四年
- 〔三四〕 『橋本関雪・錢瘦鉄交流回顧展』、『橋本関雪・錢瘦鉄交流回顧展』実行委員会、一九九四年
- 〔三五〕 『資生堂ギャラリー七十五年史 一九一九—一九九四』、資生堂企業文化部編集、一九九五年
- 〔三六〕 高嶋泰二『上海寄情』、求龍堂、一九九五年
- 〔三七〕 角田勝久「渡辺湖畔宛會津八一書簡——錢瘦鉄に関するもの——」、『全国大学書道学会紀要』、全国大学書道学会、二〇〇二年
- 〔三八〕 角田勝久「未見の會津八一書簡…渡辺湖畔宛錢瘦鉄に関するもの」、『書叢』十六号、二〇〇二年
- 〔三九〕 角田勝久「未見の會津八一書簡…渡辺湖畔宛錢瘦鉄に関するもの・補遺」、『書叢』十七号、二〇〇三年
- 〔四〇〕 鶴田武良「日華（中日）絵画聯合展覧会について——近百年來中国絵画史研究七——」、『美術研究』三八三号、二〇〇四年
- 〔四一〕 西原大輔『橋本関雪——師とするものは支那の自然——』、ミネルヴァ書房、二〇〇七年
- 〔四二〕 大阪市立美術館・渋谷区立松濤美術館『上海——近代の美術——』、美術館連絡協議会、二〇〇七年
- 〔四三〕 柿木原くみ「日本における錢瘦鉄」、『書学書道史論叢』萱原書房、二〇一一年
- 〔四四〕 柿木原くみ「錢瘦鉄と有島生馬の周辺・補訂…住友寛一と石井林響と」、『相模国文』三十九号、二〇一二年

- [四五] 角田勝久「會津八一と山田正平・錢瘦鉄」、『新潟大学教育学部紀要』、新潟大学書道研究会、二〇一二年
- [四六] 雁魚来往研究会、會津八一記念館編『雁魚来往』一八号、新潟市會津八一記念館、二〇一三〜二〇二〇年
- [四七] 出光佐千子「小杉放菴の名勝画冊…石濤筆『黃山八勝画冊』の周辺」、『出光美術館研究紀要』十九号、二〇一三年
- [四八] 角田勝久「孤高の書家 會津八一」、龍鳳書房、二〇一四年
- [四九] 蔡家丘「小杉放庵の「東洋趣味」について——東アジア旅行、中国絵画への認識と受容をめぐる」、『美術史』一七六号、美術史学会、二〇一四年
- [五〇] 西嶋慎一「風姿花伝」、芸術新聞社、二〇一五年
- [五一] 武田科学振興財団・杏雨書屋編『第六十五回杏雨書屋特別展示会「杏雨書屋の蔵書印」』、武田科学振興財団、二〇一六年
- [五二] 『生誕一三五年 石井林響』美術出版社、二〇一八年
- [五三] 角田勝久「錢瘦鉄と會津八一」、『金石書学』二十四号、芸文書院、二〇二〇年
- [五四] 堀川英嗣、浅野泰之、段毅琳「錢瘦鉄をめぐる日本文化人との交流について——一九二二から四九年を中心に——（上）」『公益財団法人 日本習字教育財団学術研究助成成果論文集』六号、二〇二二年

（中国）

- [一] 『芸術新聞』、『申報』、一九二五年四月二十日
- [二] 『上海漫画』一九二八年四月六日
- [三] 「中日画家聯歡絵画展覧会」、『申報』、一九二九年七月九日
- [四] 「書画訊」、『申報』、一九二九年八月三十日
- [五] 王个簣「安吉吳昌碩先生已巳追薦會記事」、『申報』、一九二九年十二月二十二日
- [六] 馬孟容「飲宴日本画家橋本閑雪記（上）」、『申報』、一九二九年十二月十一日
- [七] 馬孟容「飲宴日本画家橋本閑雪記（下）」、『申報』、一九二九年十二月十三日
- [八] 「攝影專号…芸壇消息…瘦鉄夫人韓步伊女士此次東渡極為彼邦人士……」、『美周』第十期、一九二九年
- [九] 錢瘦鉄「亡失韓秀伝」、『時代』第十一期、一九三〇年
- [一〇] 俞劍華「重光饒土屋」、『申報』、一九三〇年十一月九日
- [一一] 馬孟容「日本俱樂部飲宴記」、『申報』、一九三〇年十一月二十七日
- [一二] (米) Aida Yuen Wong “A Chinese Seal Carver in Japan: Qian Shoutie and the Literati World of Hashimoto Kansetsu”『世変・形象・流風：中国近代絵画1796-1949』学術研討會論文集、財団法人鴻禧芸術文教基金会、二〇〇八年
- [一三] 『西泠印社』総第二十九集、西泠印社出版、二〇一一年
- [一四] 徐泳霞・張燕飛「橋本閑雪の中国情縁」『美術大観』十二期、二〇一五年
- [一五] 錢明直、錢晟「鉄骨丹青——錢瘦鉄紀念文集」、上海社会科学院出版社、二〇一九年
- [一六] 『解衣磅礴——錢瘦鉄橋本閑雪交流回顧展』、浙江美術館、二〇二〇年

附録「錢瘦鉄が日本人に刻した印一覧表」

清原健

1	名前・職業	印文（朱文／白文）	出典	備考 年齢は錢瘦鉄の刻印時
會津八一（一八八一—一九五五） 會津八一の養子 美術史家・歌人・書	會津紀伊子（一九二二—一九四五） 會津八一の養子	紀伊（白文）		一九四一年四月二七日付日夏耿之介宛書簡に押印。一九四一年。四五歳。
		紀伊子（朱文）		一九四一年四月二七日付日夏耿之介宛書簡に押印。縦長印。一九四一年。四五歳。
		秋艸道人（白文）	⑥一〇頁 ⑦一二二頁 ②中二六五頁 ⑬上二三八頁 ②七一九頁	「三代古鈐。為會津老友摹之。丙子三月。叔厓」一九三六年。四〇歳。
		游于芸（白文）	⑥一八頁 ②上五五頁 ⑬上九四頁	「叔厓集周宣王獵碣文字。丙子十月」縦長印。一九三六年。四〇歳。
		會津朔印（白文）	⑥九頁 ⑦一二二頁 ②中二五七頁 ⑬上二三三頁	秋艸道人（朱文）と対印。 一九四一年四月二七日付日夏耿之介宛書簡に押印。一九四一年。四五歳。
		秋艸道人（朱文）	⑥九頁 ②中二五七頁 ⑬上二三六頁	會津朔印（白文）と対印。 一九四一年四月二七日付日夏耿之介宛書簡に押印。一九四一年。四五歳。
		會朔（白文）	②中二五九頁	
		秋艸道人（白文）	⑥一二頁 ②中二五九頁 ⑬上二三三頁	「瘦鉄治石」連珠印。
		會朔審定（白文）	⑥一四頁 ②中二五九頁 ⑬上二三四頁	一九四四年二月二八日付丹吳康平宛書簡に押印。一九四四年。四八歳。
		會朔（白文）	⑥七頁 ②中二六一頁 ⑬上二三五頁	「己巳夏。為會津先生法家。略仿漢私印中之平直者。瘦鉄時客平安吉田山智福堂」一九二九年。三三歳。
		渾齋（朱文）	⑥七頁 ②中二六一頁 ⑬下二〇八頁	「秋艸道人属篆。庚午三月。瘦鉄製於淞濱」一九三九年。四三歳。
		明月蘆華（白文）	⑥一五頁 ②中二六三頁 ⑬上二二四頁	「瘦鉄刻石」。
		思无邪（白文）	⑥一七頁 ②中二六三頁 ⑬上二四一頁	「明日蘆華。庚午春。瘦鉄刻」一九三〇年。三四歳。
		八一之鉢（朱文）	⑥八頁 ⑦一二二頁 ②中二六五頁 ⑬上二三七頁	「叔厓為會津博士仿三代小鉢。丙子八月朔」一九三六年。四〇歳。 一九三七年四月五日付後藤是山宛徳富蘇峰書簡の便箋に印刷。
		秋艸道人（朱文）	⑥一三頁 ⑦一二二頁 ②中二六七頁 ⑬上二三六頁	
2		渾齋（白文）	⑥一三頁 ⑦一二二頁 ②中二六七頁 ⑬下二〇七頁	
		八一（朱文）	⑥一二頁 ②中二六七頁 ⑬上二二三頁	「厓」縦長印。
		渾齋（白文）	⑥一二頁 ②中二六七頁 ⑬上二二三頁	「厓」縦長印。
		八一長寿（白文）	⑥六頁 ②中二六九頁 ⑬上二四〇頁	「厓」。
		北溟老漁（白文）	⑥一五頁 ②中二六九頁 ⑬上二四〇頁	「厓作」。
		樂道（白文）	⑥一八頁 ②中二七一頁 ⑬上二〇〇頁	「樂道。厓刻」縦長印。

[illegible]

12	11	10										9	8	7											
伊藤小坡（一八七七―一九六八） 日本画家	石渡岩雄（一八七二―一九四四） 政治家・書家	石井林響（一八八四―一九三〇） 日本画家										池田醇一（一八九三―一九七四） 美術史家	有田八郎（一八八四―一九六五） 外交官・政治家	有島生馬（一八八二―一九七四） 洋画家											
小坡（朱文）	佐登（白文）	墨禪手拓（朱文）	礼賛郷土（朱文）	三郎 印影未確認	白閑亭（朱文）	山骨（白文）	五松居（朱文）	大和子（白文）	石井林響（白文）	野人林響（白文）	野人林響（白文）	林響（白文）	古日（朱文）	池田醇印（白文）	澤農（朱文）	有田八郎印（白文）	9、印影未確認	8、印影未確認	7、印影未確認	6、印影未確認	5、印影未確認	4、印影未確認	3、印影未確認	2、印影未確認	1、印影未確認
①九頁 ⑬上一九一頁 ⑳二三頁	①九頁 ⑬上一九一頁 ⑳二三頁	⑫中三七頁	⑳一九二頁	⑳一九二頁	⑳一九二頁	⑳一九二頁	⑳一九一頁	⑳一九一頁	⑳一九一頁	⑳一九一頁	⑳一九一頁	⑳一九一頁	⑳一九一頁	⑫中二八一頁 ⑬上四二頁 ⑳一八八頁			⑫四三頁に言及	⑫四三頁に言及	⑫五〇頁	⑫五〇頁	⑫五〇頁	⑫五〇頁	⑫五〇頁	⑫五〇頁	⑫五〇頁
			「林響生叨法家正之。乙丑十月瘦鉄治石」「山骨子」一九二五年。二九歳。刻し直し或いは合作。	「瘦鉄遊交」。	「石井先生属刻。丙寅。厓」一九二六年。三〇歳。	「瘦鉄乙丑九月」一九二五年。二九歳。	「林響先生正之。乙丑十月銭厓」一九二五年。二九歳。	「林響先生正之。瘦鉄拝贈」石井林響（白文）と画面印。	「林響先生正之。瘦鉄拝贈」大和子（白文）と画面印。	「厓製。乙丑冬」やや円形。一九二五年。二九歳。	「石井先生雅属。瘦鉄遊交」。	池田醇印（白文）と画面印。	「戊子冬。為古日兄作。瘦鉄」一九四八年。五二歳。古日（朱文）と画面印。	一九三七年四月五日付後藤是山宛徳富蘇峰書簡の便箋に印刷。四一歳以前の刻。				「十月亭主正之。厓」変形印。	「丙寅六月有島先生索刻。厓記」4、5と三顆一組。一九二六年。三〇歳。	「瘦鉄。仿漢」4、6と三顆一組。一九二六年。三〇歳。	「瘦鉄。丙寅六月」5、6と三顆一組。一九二六年。三〇歳。	「丙寅六月。時客五松居」1、2と三顆一組。一九二六年。三〇歳。	「丙寅六月。有島先生属正。銭厓治石」1、3と三顆一組。一九二六年。三〇歳。	「丙寅六月。時客五松居。厓刻」2、3と三顆一組。一九二六年。三〇歳。	

28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
片岡美登 洋画家	甲斐虎山（一八六七—一九六一） 南画家	小村権三郎（一八八三—一九三八） 日本画家	落合為誠（一八六六—一九四二） 侍従・漢詩人	岡田明達 英語学者	小笠原長生（一八六七—一九五八） 海軍軍人	大村種五郎（一八九一—一九八三） 日本画家	大鹿卓（一八九八—一九五九）	大井虔堂	江崎権一	江川碧潭（一八九三—一九七三） 書家・僧侶	上村松園（一八七五—一九四九） 日本画家	上田操 裁判官	稲垣晴雪（一八九五—一九八七） 日本画家	伊藤鉄石 彫刻家	伊東深水（一八九八—一九七二） 日本画家・版画家
美登私印（白文）	虎山詩画（朱文）	碧雲湖畔是吾家 （朱文）	為誠私印（白文）	明達（朱文）	鉄桜（朱文）	広陽（朱文）	長楽（朱文）	虔堂清賞（白文）	江崎権（朱文）	印影未確認	松園（白文）	上三竿（朱文）	三竿道人（白文）	晴雪（白文）	鉄石山人（朱文）
①一〇頁 ⑬上一八四頁 ⑳三三頁	①一五頁 ⑬上一七五頁 ⑳三六頁	①一八頁 ⑬上一七六頁 ⑳三七頁	①二三頁 ⑬上四六頁 ⑳四〇頁	⑩三二頁	②二八頁 ⑫中二九一頁 ⑬上一二〇頁 ⑳一一頁	①二三頁 ⑬上四九頁 ⑳三九頁	⑬上五八頁	⑧七頁	①一五頁 ⑬上一四九頁 ⑳三六頁	⑳	①九頁 ⑬上一九一頁	④二八頁	④二八頁	①一三頁 ⑬上一五一頁	⑫下三九一頁 ⑬上六一頁
△		△		「岡田先生雅属、瘦鉄治石」岡田之印（白文）と対印。一九三六年。四〇歳。	一九三七年四月五日付後藤是山宛徳富蘇峰書簡の便箋に印刷。四一歳以前の刻。		△一九四四年。四八歳。				縦長印。	変形印。一九三八年。四二歳。 一九三八年。四二歳。			縦長印。

39	38	37	36			35	34	33	32	31	30	29									
北上聖牛（二八九一―一九七〇） 日本画家	岸浪百草居（二八九一―一九七〇） 日本画家		菊池隆志（二九一一―一九八二） 日本画家			菊池契月（二八七九―一九五五） 日本画家			岸田劉生（二八九一―一九二九） 洋画家		川村驥山（二八八二―一九六九） 書家	川村曼舟（二八八〇―一九四二） 日本画家	河辺元子（二八六八―一九三二） 南画家		河西笛州 篆刻家	唐沢俊樹（二八九一―一九六七） 内務省警保局長	金島桂華（二八九二―一九七四） 日本画家				
聖牛（朱文）	百草居主（朱文）	百草（朱文）	隆志（朱文）	完爾（白文）	完爾印信（白文）	契月（朱文）	劉生（白文）	劉生（朱文）	驥山 印影未確認	曼舟（朱文）	青蘭（朱文）	河辺元印（白文）	笛州心賞（白文）	唐沢俊樹（白文）	香隆廬主（朱文）	香隆廬主（白文）	桂華（朱文）	金氏桂華（白文）	金島桂華（朱文）		
①一四頁 ⑬上一七八頁 ⑳三五頁	③③七一頁	③③七一頁	②四三頁 ⑳二四頁	②四二頁 ⑳二三頁	②一九頁 ⑫中三二七頁 ⑬上一七〇頁 ⑳五頁	②一一〇頁 ⑦一一九頁 ⑫上八七頁 ⑬上一七〇頁 ⑳五頁	①九頁 ⑦一二五頁 ⑫下四六三頁 ⑬上一八五頁 ⑳三三頁	①二一頁 ⑦一二五頁 ⑫下四六三頁 ⑬上四七頁 ⑳三九頁	⑳にて言及	①一二頁 ⑬上一八九頁 ⑳三四頁	①二三頁 ⑳四〇頁	①九頁 ⑬上一九二頁 ⑳三三頁	⑧七頁	②二二三頁 ⑫中二九一頁 ⑳一四頁	⑧一〇頁	②三一〇頁 ⑬上五四頁 ⑳一九頁	②三五頁 ⑳一七頁	①二三頁 ⑬上四七頁 ⑳二七頁	②三五頁 ⑫中二八三頁 ⑬上一四四頁 ⑳二七頁		
	一九二六年。三〇歳。		縦長印。				一九二三年。二七歳。										縦長印。		田字格印。		

48	47	46	45										44	43	42	41	40			
小室翠雲（一八七四―一九四五） 日本画家・南画家	小林斗盦（一九一六―二〇〇七） 篆刻家	五島貞雄（二八八二―一九五八） 日本画家	小杉放菴（二八八一―一九六四） 洋画家										国府宗一（二八九三―一九三六） 日本画家	栗林	工藤莊平（二八八〇―一九五七） 宮内相官	木村杏園（二八八五―一九五七） 日本画家	北村春歩（二八八九―一九六〇） 篆刻家			
長興山莊主（朱文）	斗盦（朱文）	五島（朱文）	小樹画印（白文）	安明山叟（朱文）	石上人（朱文）	石上人（朱文）	安明山客（白文）	未醒（朱文）	未醒山人（白文）	放菴半禿（白文）	放菴半禿（朱文）	魚舟（朱文）	放菴（朱文）	清山（朱文）	栗林之印（白文）	文哉居士	滕壯（白文）	双鳳軒主（白文）	杏園（朱文）	春歩心賞（白文）
①一三頁 ⑬上一七九頁 ⑳三五頁	⑦一三五頁 ⑫中二九三頁 ⑬上六八頁 ㉓六六頁	⑬上八四頁	㉓	⑫中三二一頁	⑨二〇頁	⑫中三三三頁 ⑨二〇頁	⑨二〇頁	⑨二〇頁	⑨二〇頁	⑨二〇頁	⑨二〇頁	⑫中三三一頁 ㉓五八頁	②四一頁 ⑦一二三頁 ⑫中三一九頁 ⑬上六〇頁 ⑳二八頁	①一二頁 ⑬上六三頁 ㉓三九頁	①一二頁 ⑬上四四頁 ㉓三九頁 ②一八頁 ㉓四頁	②一頁 ㉓四頁	②一九頁 ⑫三二三頁 ㉓五頁	②四四頁 ㉓二四頁	②四四頁 ㉓二四頁	⑧一〇頁
	「斗盦弟索。戊子冬。叔厓」一九四八年。五二歳。		「庚子春、叔厓」縦長印。一九三〇年。三四歳。			一九三六年。四〇歳。		一九二九年。二三歳。	一九二七年。三一歳。	一九二五年。二九歳。	△縦長印。	楢円印。 一九四四年上海の錢瘦鉄に水谷清を通じて依頼したが、この印かは不明。	△	△						

57	56	55								54	53	52				51	50	49	
外山治子	外山且正	外山捨造（一八八三―？） 実業家								須田吉次 二代目（一八九二―一九七二） 陶芸家	庄田常喜（一八七九―一九四八） 日本画家	里見弴（一八八八―一九八三） 小説家				佐藤信雄	佐川寿勝（一八六七―一九四六） 日本画家	酒井忠正（一八九三―一九七二） 貴族院議員・農林大臣	
寿昌（白文）	外山治子（白文）	且正（朱文）	外山捨造（朱文）	外山捨造（白文）	外山捨造（朱文）	外山捨造（朱文）	外山捨造（白文）	外山捨造（白文）	外山捨造（白文）	外山捨造（朱文）	陶陶軒（白文）	鶴友（朱文）	山内英夫（白文）	里見弴印（白文）	白酔亭弴印（朱文）	白酔亭弴（朱文）	佐藤信雄（白文）	華谷（朱文）	伯爵酒井忠正 （白文）
⑬上一七三頁 ㊟四頁	②一八頁 ⑫中二八九頁	②三一頁 ㊟一五頁	②三一頁 ㊟二〇頁	②三九頁 ㊟一九頁	②三七頁 ㊟一八頁	②三三頁 ㊟一六頁	②一三頁 ⑬上一五六頁 ㊟二頁	②二五頁 ㊟一〇頁	②一一頁 ⑬上一五六頁 ㊟二頁	②四六頁 ⑬上一五五頁 ㊟二五頁	①八頁 ⑬上五〇頁 ㊟二一九頁 ㊟三二頁	①一四頁 ⑬上一八一頁 ㊟三五頁	個人蔵	個人蔵	個人蔵	個人蔵	△	①一四頁 ⑬上一七九頁 ㊟三五頁	一九三七年四月五日付後藤是山宛徳富蘇峰書簡の便箋に印刷。四一歳以前の刻。
△竹田寿昌の印か。											△縦長印。				縦長印。	楕円印。			

64	63	62	61										60	59	58
武田長兵衛（一八七〇―一九五九） 武田薬品社長・五代目武田長兵衛	竹田霞村（二八八四―一九五五） 日本画家	田川憲（一九〇六―一九六七） 版画家	高嶋菊次郎（二八七五―一九六九） 実業家										高草藍山子	高折妙子 橋本関雪の娘	田岡春径（二八八七―一九六九） 南画家
杏雨書屋（朱文）	杏雨書屋（朱文） 杏雨書屋圖書之記 （朱文）	大愚（白文）	飛鵲田人	高守中印	硯田無悪歳	性本愛丘山（朱文）	清秘（白文）	鳳毛麟角（白文）	飛鵲田人（白文）	楽天（朱文）	自在（白文）	尺田人（朱文）	槐安（白文）	妙子	春径（白文）
②五三頁	②五三頁	①一三頁 ⑬上一五一頁 ⑲三三五頁	③④	③④	③④	③④	⑫上九三頁 ⑬下二四〇頁 ⑳	⑲二五頁 ⑫上八一頁 ⑬上八一頁 ⑳一七二頁 ㉑	⑳	②二二頁 ⑲八頁 ㉑	⑳	⑳	⑳	①二二頁 ⑲三九頁	⑫中二八七頁
「杏雨書屋主人雅属。叔厓刻」。	「叔厓」木印。縦長印。 「杏雨書屋主人正之。丙子九月叔厓刻」一九三六年。四〇歳。 「庚寅正月。瘦鉄無漢画」一九五〇年。五四歳。印額側面に虎の図。		「叔厓」。高守中印と対印。	「叔厓仿漢」。飛鵲田人と対印。	「硯田無悪歳。辛未七月叔厓刻」一九三一年。三五歳。	「叔厓。辛未夏」一九三一年。三五歳。	「叔厓集漢開母廟石関」。	「瘦鉄」縦長印。	「己巳秋九月為槐安先生製。瘦鉄」一九二九年。三三歳。	「厓篆」横長印。	「厓制。己巳秋九月」縦長印。一九二九年。三三歳。	「瘦鉄」。	「略擬趙無悶刀法。厓記」。	「瘦鉄」。乙丑十月」一九二五年。二九歳。	「癸亥六月。瘦鉄」小印。一九二三年。二七歳。高折妙子「錢瘦鉄さんのこと」『橋本関雪印譜』東京堂出版、一九九一年、二〇九頁にて言及。

76	75	74	73	72				71	70	69				68	67	66	65	
徳富蘇峰（一八六三―一九五七） 思想家・歴史家	徳川達考（一八六五―一九四二） 宮中官僚・華族	坪谷善四郎（一八六二―一九四九） 出版人・政治家	坪内逍遙（一八五九―一九三五） 小説家	土田麦僊（一八八七―一九三六） 日本画家				秩父宮雍仁親王 （一九〇二―一九五三）	丹呉協平（一九一一―一九八五） 高校教師	谷崎潤一郎（一八八六―一九六五） 小説家				田中	田中	橘盛義	竹友庸雄（一八九一―一九五四） 詩人・英文学者	
蘇峰（朱文）	網陵翰墨（白文）	水哉（朱文）	逍遙（朱文）	双柿舎（白文）	麦僊（白文）	麦僊（朱文）	麦僊（白文）	麦僊（白文）	協平（朱文）	谷崎潤一郎蔵書 （白文）	摂州武庫郡岡本 （白文）	谷崎潤一郎（朱文）	雪後庵 印影未確認	潺湲亭（朱文）	田中泰印（白文）	田中経印（白文）	橘盛義印（白文）	竹友之鈔（白文）
	①一六頁 ⑬上一七七頁 ⑳三六頁	②二九頁 ⑬上八四頁 ㉑一二頁	⑬六四頁	⑬六四頁	②三四頁 ㉑一六頁	②三一頁 ⑬上一二頁 ㉑二〇頁	②三八頁 ⑦一二五頁 ⑬上六九頁 ㉑一八頁 ⑬下三六一頁	②三頁 ㉑一八頁	一九四六年の會津八一の書簡にて言及。		⑬にて言及	⑬にて言及	⑬にて言及	⑬上九六頁	①一五頁 ⑬上一七五頁	①一二頁 ⑬上四九頁 ㉑三九頁	①一六頁 ⑬上一四九頁 ㉑三六頁	⑫中三三三頁
一九三七年四月五日付後藤是山宛徳富蘇峰書簡の便箋に印刷。四一歳以前の刻。		縦長印。	「逍遙先生正篆。己巳夏瘦鉄」。一九二九年。三三歳。双柿舎（白文）と対印。	「双柿舎主人属。瘦鉄治石」。一九二九年。三三歳。逍遙（朱文）と対印。	縦長印。				一九三七年四月五日付後藤是山宛徳富蘇峰書簡の便箋に印刷。四一歳以前の刻。 円形印。	「谷崎氏蔵書」と依頼。一九二七年。三二歳。	一九二六年。三〇歳。谷崎潤一郎（朱文）と同時期。	一九二六年。三〇歳。摂州武庫郡岡本（白文）と同時期。	一九四七年。五一歳。	「谷崎兄正之。丁亥二月。厓記」一九四七年。五一歳。	△		△	

81					80	79					78										77
中村不折（一八六六—一九四三） 洋画家・書家					中島清之（一八九九—一九八九） 日本画家	中川一政（一九八三—一九九二） 洋画家					長尾雨山（一八六四—一九四二） 漢学者										富岡鉄斎（一八三七—一九二四） 文人画家・儒学者
																					鉄斎（朱文）
中村不折（白文）					清之（朱文）	印影未確認					長尾甲印（白文）										鉄斎（朱文）
中村鉾印（白文）					⑬上九〇頁	⑤一三四頁					⑬上二六九頁 ⑫中二八九頁										①一三頁 ⑦一二五頁 ⑫中二八九頁 ⑬上一六二頁 ②一七頁 ⑦一二五頁 ⑫中

90	89	88	87										86	85	84	83	82
野原櫻州（二八八六一一九三三） 日本画家	庭山耕園（二八六九一一九四二） 日本画家	西脇吳石（二八七九一一九七〇） 書家	西山翠嶂（二八七九一一九五八） 日本画家										西村源次郎（二八七七一一九三八） 日本画家	西沢笛畝（二八八九一一九六五） 日本画家	仁賀保香城（二八七七一一九四五） 漢詩人・書家	檜崎鉄香（二八九八一一九五九） 日本画家	中村玲章（一一九五五） 日本画家
五十六億七千万年 （朱文）	万波一水（朱文）	耕園（朱文）	卯（朱文）	卯之鉢（朱文）	祇南莊（朱文）	京都市東山八坂塔下 西山翠嶂（朱文）	嶂（朱文）	翠嶂（朱文）	翠嶂（朱文）	翠嶂（白文）	西村源印（白文）	五雲（朱文）	五雲（白文）	笛畝（朱文）	香城之印（朱文）	鉄香画印（朱文）	素山（白文）
⑪二〇三頁 ⑫中二五五頁	⑪二〇三頁 ⑫中二五五頁	①一二頁 ⑬上一八四頁 ⑲三四頁	②一一一頁 ⑲六頁	②一一一頁 ⑲六頁	②四頁 ⑫中三一九頁 ⑬上九六頁 ⑲二六頁	②四七頁 ⑫中二八五頁 ⑬上一五三頁 ⑲二六頁	②三一四頁 ⑫中二八五頁 ⑲二二頁	②四八頁 ⑫中二八五頁 ⑬上一五四頁 ⑲二六頁	②三頁 ⑫中二八五頁 ⑬上一五四頁 ⑲二二頁	②四九頁 ⑫中二八五頁 ⑬上一五四頁 ⑲二七頁	①二二頁 ⑬上四八頁 ⑲三九頁	①二一頁 ⑦一二五頁 ⑫下三六三頁 ⑬上四八頁 ⑲三九頁	①一四頁 ⑬上一七六頁 ⑲三五頁	⑲二六頁	①一四頁 ⑬上一八〇頁 ⑲三五頁	⑧一一頁	⑲一九頁 ⑳六頁
変形印。	「癸亥五月、櫻州道兄索、刻于白沙村莊中、金匱錢厓并記」一九二三年。二七歳。 変形印。					隸書印。縦長印。		楕円印。	縦長印。	横長印。	縦長印。	縦長印。	縦長印。	縦長印。			
楕円印。																	

橋本閑雪（一八八三—一九四五） 日本画家		
潜龍窟（朱文）	⑪二〇三頁 ⑫中二五五頁	「癸亥六月、瘦鉄為大日本国画家野原櫻洲氏製、洛陽東山白沙村莊客中游刃」縦長印。一九二三年。二七歳。
野原安司（白文）	①一七頁 ⑬上七二頁 ⑳三七頁	櫻洲（朱文）と対。
櫻洲（朱文）	①一七頁 ⑬上七一頁 ⑳三七頁	
櫻洲山樵（朱文）	①一三頁 ⑬上一八九頁 ⑳三五頁	
橋本弘印（白文）	⑪三頁 ⑫中二五五頁 ⑬上一六六頁	
閑雪（朱文）	⑪三頁 ⑫中二五五頁 ⑬上五四頁	
橋本弘印（白文）	⑫中二三三頁	
橋本弘印（白文）	⑧一二頁	
閑雪（朱文）	⑧一二頁	
橋本弘印（白文）	白沙村莊で実見	旧款「大正丙辰秋日。香村刻」一九一六年。
閑雪（朱文）	白沙村莊で実見	旧款「大正丙辰秋日。□□□」一九一六年。「己巳七月瘦鉄治石」。一九二九年。三三歳。
閑雪（朱文）	⑫中二三三頁	
閑雪（朱文）	⑪三頁 ⑫中二二七頁	「雪」字簡略。橢円印。
閑雪（朱文）	②四一〇頁 ⑦一二三頁 ⑫中二二七頁 ⑬上五六頁 ⑳二七頁	橢円印。
閑雪（朱文）	⑪三頁 ⑫中二二七頁 ⑬上五四頁	「仿古泥封。叔厓」。縦長印。
閑雪（白文）	①七頁 ⑬上一七六頁 ⑳三二頁	
閑雪私印（白文）	⑪五頁 ⑫中二三一頁	縦長印。
閑雪審定（朱文）	⑪五頁 ⑫中二二九頁	
閑雪自檢（白文）	①七頁 ⑳三二頁	「仿漢將軍印意。闕逢困敦之年蒲月。瘦鉄」一九二四年。旧曆五月、二八歳。
橋氏清賞（白文）	①六頁 ⑪五頁 ⑫中二二九頁 ⑬上五二頁 ⑳三一頁	
閑（朱文）	②一二二頁 ⑪七頁 ⑫中二二七頁 ⑬上五五頁 ⑳六頁	
閑（朱文）	⑪七頁 ⑫中二二九頁	
古澗雪（朱文）	⑪七頁 ⑫中二二七頁	橢円印。

老泉亭主（白文）	⑪一七頁 ⑫中二三頁 ⑧一三頁	「己巳夏日、為閑雪先生作。瘦鉄」一九二九年。三三歲。天遣我狂（朱文）と対印。
无逃境主（朱文）	⑪一七頁 ⑫中二三頁 ⑧九頁	橢円印。
墨癡（朱文）	⑪一五頁 ⑫中二四九頁	縦長印。
明治遺臣（朱文）	②三頁 ⑪一五頁 ⑫中二三頁 ②九頁	旧款「香村刻」「是□擬趙之謙刀法。奉閑雪先生正之。己巳夏。瘦鉄」縦長印。一九二九年。三三歲。
明治遺臣（朱文）	⑪一五頁 ⑫中二三頁 ⑬上一五七頁	縦長印。
走井居（朱文）	⑪一三頁 ⑫中二三九頁	「癸亥春分節、瘦鉄治石」。一九二三年、二月。二七歲。縦長印。
夢白軒（白文）	⑧一〇頁 ⑪一三頁 ⑫中二三九頁 ⑬上一七二頁	
東山酒徒（白文）	①七頁 ⑪一三頁 ⑫中二三九頁 ②九頁	
東山草堂（白文）	⑪一三頁 ⑫中二三九頁	「甲子三月橋本先生属仿古羅居士刀法。錢厓」。一九二四年。二八歲。
白沙村人（白文）	①八頁 ⑪一一頁 ⑫中二三頁 ⑬上一五頁 ②九頁	
白沙村民（白文）	⑪一一頁 ⑫中二三頁	
白沙村莊（朱文）	①二五頁 ⑪一一頁 ⑫中二三頁 ⑬上一五頁 ②九頁	「瘦鉄」。楷書印。
無劍齋主（白文）	⑧九頁	
無劍狂客（朱文）	⑪一一頁 ⑫中二三頁	円形印。
無劍齋（朱文）	⑪九頁 ⑫中二四一頁	橢円印。
了余（朱文）	②三六頁 ⑪九頁 ⑫中二四一頁 ⑬上一七頁 ②九頁	
了余齋（朱文）	②四九頁 ⑪九頁 ⑫中二四一頁 ⑬上一七頁 ②九頁	
了余齋（朱文）	②四一〇頁 ⑪九頁 ⑫中二四一頁 ⑬上一七頁 ②九頁	橢円印。
四明狂客（白文）	⑪七頁 ⑫中二三頁	縦長印。
四明狂客（白文）	①六頁 ②九頁 ③上一九四頁	橢円印。
古澗雪（白文）	①七頁 ③上一九〇頁 ②九頁	縦長印。
古澗雪（朱文）	①六頁 ③上一五三頁 ②九頁	縦長印。

天遣我狂（朱文）	⑪二七頁 ⑫中二三五頁 ⑧一〇頁	「瘦鉄為夢白軒主人作」一九二九年。三三歳。老泉亭主（白文）と対印。
帝室技芸員（白文）	⑪一七頁 ⑬上九六頁	一九三四年刻か。
思凡亭主（朱文）	②四九頁 ⑪一七頁 ⑫中三二一頁 ⑬上八〇頁 ②九二七頁	楷書印。
丈草蝸屋（朱文）	⑪一九頁 ⑫中二四五頁	隸書印。
東海謫仙（白文）	⑪二一頁 ⑫中二四七頁	家住蓬萊（朱文）と対印。
家住蓬萊（朱文）	①七頁 ⑪二一頁 ⑫中二四七頁 ⑬上一九〇頁 ②九三二頁	東海謫仙（白文）と対印。
自換（白文）	②一一四頁 ⑪二一頁 ⑫中二二九頁 ⑬上一〇八頁 ②九二七頁	
自娛（白文）	⑪二一頁 ⑫中二四九頁 ⑬上九八頁	
百年清苦（白文）	⑧六頁 ⑪二三頁 ⑫中二四三頁 ⑬上一二七頁	
清閨室（朱文）	⑪二三頁 ⑫中二三七頁	体古意新（白文） 先帝遺臣（白文）と三顆一組。木印。
体古意新（白文）	⑪二三頁 ⑫中二三七頁	「霜草蒼蒼虫切切。村南村北行人絶。独出前門望野田。月蕎麦如雪。関雪夫子正之。白香山詩意。瘦鉄」。百年清苦（白文） 先帝遺臣（白文）と三顆一組。木印。
先帝遺臣（白文）	⑪二三頁	百年清苦（白文） 体古意新（白文）と三顆一組。木印。縦長印。
百年清苦（朱文）	⑪二五頁 ⑫中二四九頁	
百年清苦（白文）	①二五頁 ②九四一頁	
放情（白文）	⑪二五頁 ⑫中二四九頁	縦長印。
詩画禪（白文）	⑪二五頁 ⑫中二五三頁	
山高流長（朱文）	⑪二五頁 ⑫中二五一頁	「山高流長集秦繹山碑文字。叔厓。」縦長印。
山高水長（朱文）	⑧一二頁	△縦長印。
仿古（朱文）	①二五頁 ⑪二七頁 ⑫中二四九頁 ⑬上三九頁 ②九四一頁	横長印。
筆研答昇平（朱文）	⑪二七頁 ⑫中二三五頁	楕円印。
邁歩（白文）	⑪二九頁 ⑫中二五三頁	草書印。変形印。
水火既濟（朱文）	⑪二九頁 ⑫中二五一頁	一九二五年。二九歳。縦長印。
邁歩（朱文）	⑫中二五三頁	草書印。縦長印。

明月襟懷（朱文）	③頁数不明 ⑬上一二頁 ⑳六五頁	「伴白沙村莊主人遊雲間得龍泓精刻□印一鈕是刻□□其刀法。厓」。明月襟懷（朱文）と対印か。
酒瓢詩卷（白文）	③頁数不明 ⑬上八五頁	「閔雪先生詩書画皆登上乘□□□□没有晋人風。好遊山水□□□□今□游曼江南出石属□□□□不能応命因□金鉄□□無□□藏金石文字若干□□□十二廻□□非常所□。瘦鉄□忘」。酒瓢詩卷（白文）と対印か。
解衣磅礴（朱文）		一九二六年刻か。
醉古仏龕主（朱文）	①二五頁 ⑳四一頁	旧款「嘉慶丁卯夏日。曼生」。一八〇七年。
醉古仏龕（朱文）	①六頁 ⑳三一頁	縦長印。
心静興長（朱文）	①七頁 ⑳三二頁	
蛙吹草堂（朱文）	⑬上一〇八頁	
蛙吹草堂（白文）	①六頁 ⑬上五三頁 ⑳三一頁	
中隱室（白文）	①八頁 ⑬上五三頁 ⑳三二頁	
太平醉民（白文）	①一九頁 ⑫中二四五頁	
太平醉民（朱文）	①八頁 ⑬上五二頁 ⑳三三頁	
先秦遺民（白文）	①六頁 ⑬上五二頁 ⑳三一頁	
存古樓清秘（朱文）	①七頁 ⑬上五一頁 ⑳三三頁	縦長印。
百年清苦（白文）	⑬上三七頁	縦長印。
懶雲洞主（白文）	⑫中三二三頁	
閔雪自檢（白文）	①五頁 ⑫中二三一頁 ⑬上五一頁	「仿漢將軍印意。閔逢困敦之年蒲月。瘦鉄」。一九二四年。二八歳。
書研家風（白文）	①二七頁 ⑫中二二九頁	「橋本先生法家屬。仿漢鑿印之蒼渾者。瘦鉄。壬戌孟秋」。一九二二年。二六歳。
劍（朱文）	①一五頁 ⑫中二四九頁	
太平龕（朱文）	⑫中二四五頁 ⑳一一六頁	
名山老布衣（朱文）	①一九頁 ⑫中二四五頁 ⑬上一二二頁	縦長印。
名山老画師（朱文）	①一九頁 ⑫中二四三頁 ⑬上一二二頁	「名山老画師。白沙村莊主人雅命。瘦鉄」。
天真爛漫（朱文）	①一九頁 ⑫中二五三頁 ⑬上一〇二頁	縦長印。
凡（朱文）	②三一〇頁 ①二九頁 ⑫中二五三頁 ⑳一九頁	「厓刻。閔雪先生書。乙亥夏五月」。楷書印。一九三五年。三九歳。

102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92										
福田雅之助（一八九七―一九七四） テニス選手	福田恵一（一八九五―一九五六） 日本画家	広幡忠隆（一八八四―一九六一） 政治家	広瀬済（一八七五―一九三〇） 日本画家	日向紫翠 日本画家	土方寧（一八五九―一九三九） 東京帝国大学法科大学長	東原方僊（一八八六―一九七二） 日本画家	林芙美子（一九〇三―一九五二） 小説家	林俊衛（一八九五―一九四五） 洋画家	服部敬雄（一八九九―一九九二） 実業家	橋本節哉（一九〇五―一九六五） 洋画家・橋本関雪の長男										
雅（白文）	福田（白文）	福田雅之助（白文）	恵一（朱文）	広幡忠隆（白文）	広幡忠隆（白文）	広瀬済印（白文）	紫翠（朱文）	紫翠（朱文）	寧（朱文）	方僊（朱文）	恬澹（白文）	芙美子（朱文）	俊衛（白文）	俊衛（朱文）	洗心齋主（朱文）	新篁会印（朱文）	天賜醉郷（白文）	安（朱文）	拙哉（白文）	橋本節哉（朱文）
			⑬上二〇〇頁	②二六頁 ⑬上九〇頁 ⑲一〇頁	②二六頁 ⑬上九〇頁 ⑲一〇頁	②二六頁 ⑬上九〇頁 ⑲一〇頁	②二六頁 ⑬上九〇頁 ⑲一〇頁	②二六頁 ⑬上九〇頁 ⑲一〇頁	②二六頁 ⑬上九〇頁 ⑲一〇頁	②二六頁 ⑬上九〇頁 ⑲一〇頁	②二六頁 ⑬上九〇頁 ⑲一〇頁	②二六頁 ⑬上九〇頁 ⑲一〇頁	②二六頁 ⑬上九〇頁 ⑲一〇頁	②二六頁 ⑬上九〇頁 ⑲一〇頁	②二六頁 ⑬上九〇頁 ⑲一〇頁	②二六頁 ⑬上九〇頁 ⑲一〇頁	②二六頁 ⑬上九〇頁 ⑲一〇頁	②二六頁 ⑬上九〇頁 ⑲一〇頁	②二六頁 ⑬上九〇頁 ⑲一〇頁	②二六頁 ⑬上九〇頁 ⑲一〇頁
一九四一年。四五歳。一九四一年四月二七日付日夏耿之介宛書簡に押印。変形印。	一九四一年。四五歳。一九四一年四月二七日付日夏耿之介宛書簡に押印。	一九四一年。四五歳。一九四一年四月二七日付日夏耿之介宛書簡に押印。	「瘦鉄撫古璽印意」印の恵字には草冠がある。後に松丸東魚の蔵となっている。個人蔵。	一九三七年四月五日付後藤是山宛徳富蘇峰書簡の便箋に印刷。四一歳以前の刻。	縦長印。	縦長印。	△「恬澹為上。瘦鉄集老子句。時客東京」⑬上四二頁と一〇六頁は同一。縦長印。	縦長印。	縦長印。	楕円印。	楕円印。	楕円印。	楕円印。	楕円印。	楕円印。	楕円印。	楕円印。	楕円印。	縦長印。	縦長印。

117	安田鞍彦（二八八四―一九七八） 日本画家	印影未確認	②	
116	森村宣稲（二八七一―一九三八） 日本画家	稲香室主（朱文）	①一五頁 ⑬上一四六頁 ⑳三六頁	△縦長印。
115	森田恒友（二八八一―一九三三） 洋画家	恒印（白文）	②二一〇頁 ⑬上一二五頁 ⑳一二頁	△丸型印。
114	村山龍平（二八五〇―一九三三） 朝日新聞社社長	香雪莊藏（朱文）	⑫中三〇九頁	△
113	三井寿太郎（二八七四―一九三七） 実業家	男爵三井寿太郎 （朱文）	⑳	「己巳夏六月為三井男爵篆。瘦鉄」一九二九年。三三歳。
112	三井蘊（二八八二―一九三四） 南画家	飯山（白文）	①一五頁 ⑬上一四六頁 ⑳三六頁	
111	水谷清（一九〇二―一九七七） 日本画家	青霞（朱文）△ 青霞創作（朱文）△	⑬下二三五頁 ⑫下三七七頁 ⑳五四頁	隸書印。或いは呉青霞か。
110	三木翠山（二八八七―一九五七） 日本画家・版画家	翠山（朱文） 翠山（白文）	⑫中二八一頁 ⑬上一八頁 ⑫中二八一頁 ⑳一三頁	
109	馬淵銳太郎（二八六七―一九四三） 京都市長	華陽（朱文） 馬淵銳印（白文）	①一七頁 ⑬上七〇頁 ⑳三七頁 ①一七頁 ⑬上七〇頁 ⑳三七頁	
108	松丸東魚（二九〇一―一九七五） 篆刻家	長（朱文）		「叔厓仿秦尔銘」。個人蔵。
107	松田	松田（白文）	②一七頁 ⑳四頁	
106	松井大浩（二八〇四―不明） 日本画家	大浩（白文）	①一四頁 ⑳三五頁	
105	牧野伸顕（二八六一―一九四九） 政治家・外交官	牧野伸顕（白文）		一九三七年四月五日付後藤是山宛徳富蘇峰書簡の便箋に印刷。四一歳以前の刻。
104	前田直行（二八六六―一九四三） 華族・能書家・漢書家	雅堂（朱文） 前田直行（白文）	①一六頁 ⑬上一五一頁 ⑳三六頁 ①一六頁 ⑬上一四九頁 ⑳三六頁	△
103	細野燕台（二八七二―一九六一） 茶人	燕台珍賞（朱文）	②三二六頁 ⑬上一二〇頁 ⑳二二頁	縦長印。

129		128	127					126	125	124	123	122		121	120	119	118					
渡辺湖畔（一八八六一一九六〇） 実業家・漢詩人		渡辺公観（一八七七一九三八） 日本画家						林朗庵（一八九八一九六八） 実業家	吉原	吉田苞竹（一八九〇一九四〇） 書家	吉田利兵衛（一八七二一九四二） 彫刻家	吉田秀光 日本画家	横山大観（一八六八一九五八） 日本画家		山元金右衛門（一八七二一九三三） 日本画家	山田良政	山際柳隄（一八五二一九三七） 新潟県農工銀行頭取	山岡莊八（一九〇七一九七八） 小説家				
湖畔（朱文）	彰（朱文）	渡辺（白文）	公観（朱文）	游魚洞（朱文）	林氏漢研斎（朱文）	看雲聽水之齋（朱文）	林朗庵鑑藏印（白文）	某鶴家風（朱文）	朗齋長寿（白文）	朗齋藏硯（朱文）	吉原迪（朱文）	字子貞（白文）	白嶺（白文）	秀光（白文）	鉦鼓洞主（白文）	鉦鼓洞主（白文）	春拳（朱文）	蘆花浅水莊主（白文）	山田良政之章（白文）	臨古（朱文）	萱坡（朱文）	印影未確認
⑩六二頁	②三三頁 ②九一六頁	②二二一頁 ⑬上一〇八頁 ②九一三頁	⑬上一〇三頁	⑬上一〇二頁		②四四頁	②四四頁	②三一頁	②三一頁	②三一頁 ②九一五頁	⑬上八七頁	②三一頁 ②九一五頁	⑫中三三三頁	②三一二頁 ②九二〇頁	②一四頁 ⑫中三三五頁 ⑬上一六三頁 ②九二頁	②一一一頁 ⑦一二三頁 ⑫中三三五頁 ⑬上一六三頁 ②九六頁	①一二頁 ⑬上一八五頁 ②九三四頁	①一三頁 ⑬上一七四頁 ②九三五頁	①一三頁 ⑬上一七四頁 ②九三五頁	①六六頁 ⑬上一一〇頁	①六六頁	②
「渡辺先生正之。厓製」一九二九年。三三歳。		一九三五年。三九歳。	「游魚洞主人雅属。乙巳夏六月瘦鉄作」縦長印。一九二九年。三三歳。		縦長印。		「瘦鉄治石、壬戌暮春」縦長印。一九二二年。二六歳。	「叔厓」。	「歳在玄黙閣茂暮春。瘦鉄膺朗庵道長属。仿漢玉印之平直者」。										「瘦鉄刻石。辛未夏」一九三一年。三五歳。	「叔厓」。一九三六年の個展で購入か。変形印。		

130	渡辺秋谿（二八六五―一九四九） 南画家	秋谿之印（朱文）	①一二頁 ⑬上一九三頁 ⑳三四頁
	晩翠莊主（白文）	①一二頁 ⑬上一八四頁 ⑳三四頁	

〔凡例〕

- ・本表は錢瘦鉄が日本人に刻した印を現行の印譜、文献資料から抽出し整理をしたものである。
- ・本表には計一三〇名四〇七顆を収録した。錢瘦鉄と日本文化人との交流を知る基礎資料である。
- ・本表は五十音図順に番号を振り並べ、名前、職業、印文（朱文／白文）、出典、備考の順に整理をした。側款は備考に記す。
- ・本表の△印は未確定の印である。
- ・本表の作成には以下①～⑳を用いた。

- ① 錢瘦鉄『瘦鉄印存』西泠印社、一九二四年
- ② 錢瘦鉄『瘦鉄印存四集』（私家版）、一九三五年
- ③ 大鹿卓「錢瘦鉄のこと」、『桃源』十一月号、吉昌社、一九四八年
- ④ 上田操「名人錢瘦鉄への回顧」、『法曹会』一六九号、一九六四年
- ⑤ 中川一政『中川一政文集』第二卷、筑摩書房、一九七五年
- ⑥ 宮川寅雄『秋艸堂印譜』、二玄社、一九七九年
- ⑦ 小林斗盦『中国篆刻叢刊第四〇卷（近代四 趙石・錢厓・鄧散木他）』二玄社、一九八三年
- ⑧ 『篆美 第五十九集 錢瘦鉄特集』、篆社、一九八三年
- ⑨ 『小杉放菴画集』、日本経済新聞社、一九八七年
- ⑩ 『近世篆刻と古印材展 玄美听展特別陳列目録』、玄美社、一九九〇年
- ⑪ 水野恵『橋本閑雪印譜』、東京堂出版、一九九一年
- ⑫ 『中国篆刻叢書 錢瘦鉄印譜』、文沛美術図書出版社、一九九七年
- ⑬ 呉頤人・錢大札『三聯印叢現代篆刻家精品印譜系列 錢瘦鉄印存』上海三聯書店、二〇〇一年
- ⑭ 角田勝久「未見の會津八一書簡——渡邊湖畔宛錢瘦鉄に関するもの」、『書叢』十六号、新潟大学書道研究会、二〇〇二年
- ⑮ 朱力主『近現代名家篆刻』、上海辭書出版社、二〇〇四年
- ⑯ 角田勝久「山際柳隄旧藏・呉昌碩の畫印」、『書叢』十八号、新潟大学書道研究会、二〇〇四年
- ⑰ 『吳昌碩流派印風』、重慶出版社、二〇〇五年
- ⑱ 了廬、錢明直『錢瘦鉄年譜』、上海人民美術出版社、二〇〇七年
- ⑲ 柿木原くみ「錢瘦鉄と谷崎潤一郎の周辺」、『書学書道史研究』、書学書道史学会、二〇〇九年
- ⑳ 柿木原くみ「日本における錢瘦鉄」、『書学書道史論叢』、書学書道史学会、二〇一一年

- ②① 柿本原くみ「錢瘦鉄と有島生馬の周辺・補訂…住友寛一と石井林響と」、『相模国文』三十九号、二〇一二年
- ②② 『林朗庵自用印展』華麗なる鑑蔵印、古河市篆刻美術館、二〇一三年
- ②③ 袁慧敏『袖珍印館 近現代名家篆刻系列 錢瘦鉄印拳』、上海書画出版社、二〇一五年
- ②④ 方玲琅『錢瘦鉄芸術展暨錢大札從芸七十五周年作品集』、西泠印社出版社、二〇一五年
- ②⑤ 『第六十五回杏雨書屋特別展示会「杏雨書屋の蔵書印」』、公益財団法人武田科学振興財団、二〇一六年
- ②⑥ 神野雄二「日本印人研究——中川一政の篆刻と篆刻論——」、『書学書道史研究』二十六号、二〇〇六年
- ②⑦ 程十髮芸術館『錢瘦鉄・錢直明作品集』、上海尾文化出版社、二〇一七年
- ②⑧ 『生誕一三五年 石井林響』美術出版社、二〇一八年
- ②⑨ 錢瘦鉄『瘦鉄印存』、丸孫商店出版部、二〇一九年
- ③⑩ 呉頤人『海派代表篆刻家系列作品集 錢瘦鉄』、上海書画出版社、二〇一九年
- ③⑪ 『書林』、出版年不詳
- ③⑫ 「鈍刀硬入刻的印、錢瘦鉄原石百品」篆刻微刻 https://mp.weixin.qq.com/s/JAv8QWbGU8XXM3PUCcj0_g
- ③⑬ 『生誕一二〇年 岸浪百草居展』群馬県立館林美術館、二〇〇九年
- ③⑭ 西泠印社オークションカタログ『文房清玩・田黄暨槐安居蔵印専場』、二〇一八年

漢字と仮名の調和における平仮名の表現方法に関する考察

— 中学校国語科書写と高等学校芸術科書道を

縦断的につなぐ視点から — (上)

三浦 拓眞
川瀬 英幹

はじめに

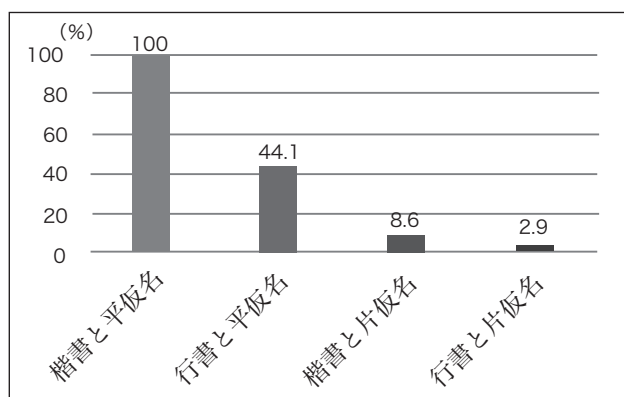
高等学校芸術科書道に漢字仮名交じりの書が導入されて三〇年以上が経過し、教育現場では漢字仮名交じりの書の効果的な学習指導方法が模索されてきた。しかしながら「作る本人が何から何まで自ら決めなければならぬ自由創作には、発案の第一歩から常に『迷い』が伴う」と述べられるように、漢字仮名交じりの書は漢字の書や仮名の書とは異なる問題点が存在する。その理由としては、自分で創作するという新たな創造性が求められているにもかかわらず、中学校国語科書写において生徒は、「正しく整えて書くこと」を意識してきたことが考えられる。具体的な課題の一つとして、「漢字と仮名の調和」が挙げられ、仮名（本論文における「仮名」は「平仮名」と「片仮名」を合わせた総称を指し、「平仮名」と表記した場合は「片仮名」を含まないものとする）をどのように表現していけばよいかについては、書写と書道を縦断的につなぐ視点からも考え直す必要がある。生徒は日常的に扱っている平仮名が楷書や行書に調和するように工夫されているという認識ができておらず、「学習の系統上、楷書に調和する平仮名を基準として考える

意識している	意識していない	どちらともいえない	計
14.2% (31)	72.5 (158)	13.3% (29)	218

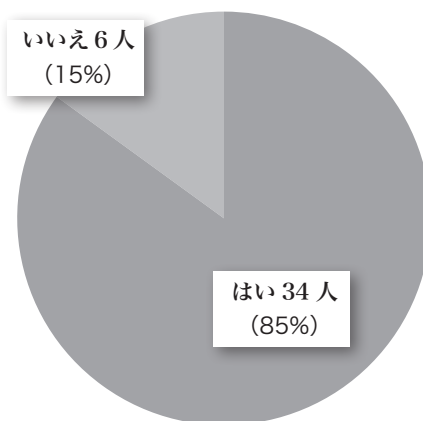
【表1】 高等学校芸術書道科への展開を意識しているか。() 内は回答数

ことが一般的^②」となっている。実際、書写において漢字と仮名の調和を考える機会は限られており、書を作成する要素や用筆・運筆から生み出される表現効果について、十分に学習しきれていないという実態がある。そこで、書写における仮名の指導の順序を踏まえた上で、調和の考え方や調和を図っていくための観点を明確にし、仮名表現への迷いを軽減させることにより、生徒が主体的に表現することができるのではないかと考えた。

本研究の目的は、漢字と仮名の調和における平仮名の表現方法に関する問題点を整理・分析し、高等学校芸術科書道における漢字仮名交じりの書の学習指導方法を再考していくことである。高等学校学習指導要領（平成三〇年告示）では、改訂の具体的な方向性として「感性を働かせて、能動的に、表現を構想し工夫したり、作品の意味や価値を見いだしたりする学習になるよう、内容の改善を図る」や「国語科書写との円滑な接続を図るとともに、生活や社会の中での文字や書の働き、書の伝統と文化についての理解を深める学習の充実を図る^③」と述べられ、漢字仮名交じりの書は、書を生活に生かす資質・能力を育成する基本的な分野として位置付けられている。また、中学校国語科書写（平成二九年告示）の第三学年の目標は、「身の回りの多様な表現を通して文字文化の豊かさに触れ、効果的に文字を書くこと^④」と示され、「多様な文字やその表現の在り方に関心をもたせることで、文字の芸術性に関心を向ける素地を養い、高等学校芸術科書道への接続も見通している^⑤」とある。この双方の視点を踏まえ、縦断的な接続を図り、螺旋的・反復的に学習を繰り返すことにより、求められる資質・能力を育成をしていかなければならない。しかし、全書研特別研究委員会から報告された「中学校国語科書写の学習指導における生徒・指導者の意識および実態調査^⑥」（平成二八年）における高等学校芸術科書道への展開を意識して授業実践していますか^⑦という問いでは、七二・五％の指導者が高等学校芸術科書道への展開を意識していないと回答した【表1】。このことは、中学校国語科書写が高等学校芸術科書道へ接続するという視点を多くの指導者が持ち合わせていないということを表しており、今後は縦断的な接続を意識できるような系統的な学習指導方法を構築していく必要がある。本研究の課題としてあげる「調和」についても同様に系統的な指導が必要であろう。そのためには、小中学校の学習を発展させたより高次な学習指導方法を確立させなければならない。



【グラフ2】 授業で扱った調和のパターン（設問イ）



【グラフ1】 文字を調和させた経験の有無

そこで、漢字仮名交じりの書を学習する前段階において、生徒は漢字と仮名の調和についてどのような意識を持っているのかについて明らかにする。また、「仮名調和表」を作成する場面を設定し、漢字と仮名の調和に関する状況や書表現について整理・分析を試みる。それらの結果から、平仮名の表現方法に関する学習指導方法のあり方を考え、同時に「仮名調和表」の作成が、三浦が述べる自己調整学習を促すための学習方略^⑦として有効に働くかどうかについても検討していく。

第1章 漢字と仮名の調和に関する高校生の実態

漢字仮名交じりの書を学習する前段階として高校生が「漢字と仮名の調和」をどのように理解し、どのような意識をもっているのかについて明らかにする必要があると考えた。そこで、愛知教育大学附属高等学校に在籍する一年生（書道選択者四〇名）に「漢字と仮名の調和に関するアンケート」（設問ア～コ）を古典（六つの楷書）の臨書学習を終えた直後に実施した【資料1】。はじめに、設問ア～ケにおける回答状況を示す。設問アにおいて、小中学校の授業で漢字仮名交じり表記の言葉を書いたことを「覚えている」と回答した生徒は八五％であった【グラフ1】。実際の授業において、漢字と仮名を調和させているという意識があったかどうかについては言及できないが、多くの生徒が小中学校において漢字仮名交じり表記の言葉を使った経験があると回答している。どのような書体を調和させていたか（設問イ）については、【グラフ2】のような回答状況であった（複数回答可）。これより設問アにおいて「はい」を選択した生徒全員が「楷書と平仮名の調和」を選択したことが分かる。次いで「行書と平仮名の調和」（四四％）が多く、楷書や行書に片仮名を調和させる書字活動の経験は非常に乏しいということが明らかになった。

設問ウでは、書字活動において表現した言葉について調査した【表2】（複数回答可）。かきぞめコンクール（競書会）にて表現した言葉「新たな挑戦」から「大きな希望」までが全体の八三％を占める一方で、生徒が言葉や内容を考えて表現したものは「文化祭の案内状」の一件のみであった。他には「夏の空」や「夜空の星」、「新しい道」の教科書に掲載された言葉（六％）や、「思いやり」から「赤いはね」までの公

漢字と仮名の調和に関するアンケート

1年（ ）組（ ）番

ア 小中学校の授業で漢字と仮名が交じった題材（紙に漢字と平仮名もしくは片仮名の2種類以上が入った題材等）を書いたことを覚えていますか。

- 1 はい 2 いいえ

イ アの授業ではどのように書きましたか。（複数選択可）

- 1 楷書と平仮名を調和させた 2 行書と平仮名を調和させた
3 楷書と片仮名を調和させた 4 行書と片仮名を調和させた
5 その他（ ）

ウ イについて、どのような言葉を書いたか教えてください。手紙や掲示文などを書いた場合はその内容についても覚えていることを詳しく教えてください。

エ 小中学校の書写の授業での学習を振り返って、漢字と仮名が交じった言葉を書くときに普段気を付けようと意識するようになったことはありますか。

- 1 ある 2 少しある 3 全くない

オ エで「ある」、「少しある」と答えた人はどのようなところに普段気を付けるようになりましたか。

カ 高校の書道の授業によって、漢字の表現について変化が起こりそうですか。

- 1 起こると思う 2 少し起こると思う
3 あまり起こらないと思う 4 起こらないと思う

キ カで「起こると思う」、「少し起こると思う」と答えた人はどんなところに変化が起こると思いますか。（複数選択可）

- 1 文字の大きさ 2 字形 3 構成 4 線の太細 5 線質
6 墨の濃淡 7 墨の潤滑 8 その他

ク 高校の書道の授業によって、平仮名の表現について変化が起こりそうですか。

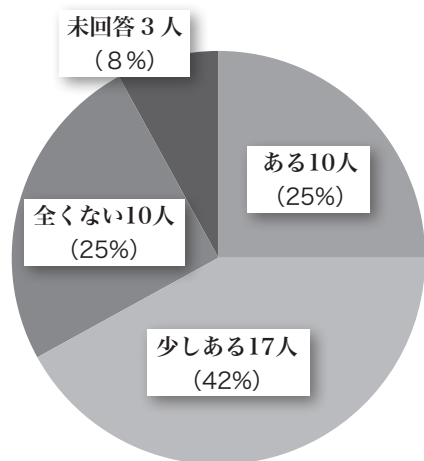
- 1 起こると思う 2 少し起こると思う
3 あまり起こらないと思う 4 起こらないと思う

ケ クで「起こると思う」、「少し起こると思う」と答えた人はどんなところに変化が起こると思いますか。（複数選択可）

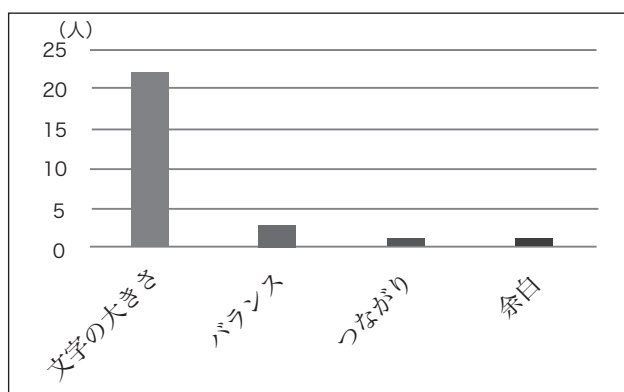
- 1 文字の大きさ 2 字形 3 構成 4 線の太細 5 線質
6 墨の濃淡 7 墨の潤滑 8 その他

コ 漢字と仮名を調和させて書くときにどのようなことが大切だと考えていますか。

【資料1】 漢字と仮名の調和に関するアンケート



【グラフ3】 漢字と仮名が交じった文を言葉を書くときに、普段気を付けていることの有無（設問エ）



【グラフ4】 設問エにおける具体的な注意点（設問オ）

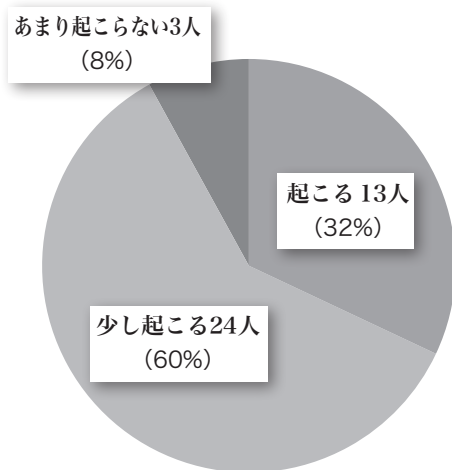
表現した言葉（題材）	依拠・出典	回答数
新たな挑戦	市町村主催の かきぞめコン クール、競書 会等	8
輝く生命		7
希望の道		6
強い信念		5
春の大地		4
大きい力		3
大きな力		2
新たな生命		2
大きな夢		1
自然の美		1
美しい空		1
大きな希望		1
夏の空	教科書	1
夜空の星		1
新しい道		1
思いやり	JA 共 済、国 税庁で主催す るコンクール (夏休み課題)	1
税の役割		1
赤い羽根		1
赤いはね		1
文化祭の案内状	学校行事	1

【表2】 小中学校の書字活動で表現した言葉（設問ウ）

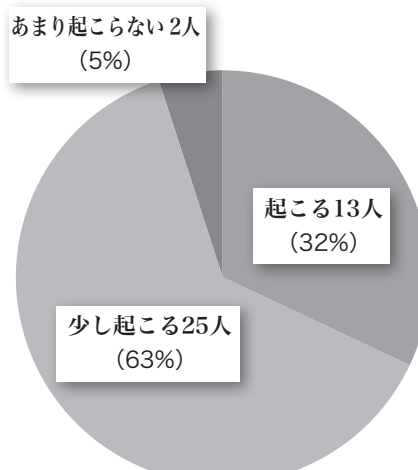
募作品の言葉（八％）を回答する生徒もいたが僅かであった。

設問エ、オは、小中学校の書字活動が日常生活へ生かされているかどうかを調査したものである。漢字と仮名が交じった言葉を書くときに、普段気を付けようと意識するようになったことが「ある」、「少しある」と回答した生徒を合わせると六七％であった【グラフ3】。その内訳は【グラフ4】に示した。「漢字に比べて仮名を小さく書くこと」など文字の大きさに関する記述が二二人と最も多く、「バランス」という抽象的な回答が三人、「画と画とのつながり」や「余白」に関する記述がそれぞれ一人であった。

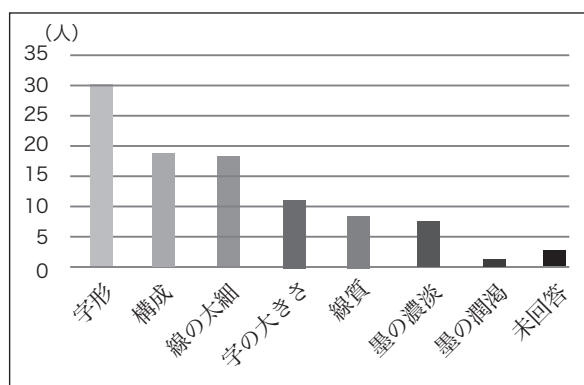
設問カ、キは「漢字の表現」、設問ク、ケは「平仮名の表現」をするときに変化が起こりそうかどうかを尋ねたものである。これは既習の臨書学習が、生徒の表現方法を広げたり深めたりする契機となり得るかを明らかにするための問いである。前者については【グラフ5】が示すように、変化が「起こる」、「少し起こる」と回答した生徒は三八人（九五％）であり、その内訳は【グラフ6】（複数回答可）が示すように、字形と構成が共に三三人（八六％）と最も高く、線の太細が一四人（三六％）、線質が一〇人（三四％）と続く。後者については【グラフ7】が示すように、変化が「起こる」、「少し起こる」と回答した生徒は三七人（九二％）であり、その数値は前者と大差はない。同様にその内訳は【グラフ8】（複数回答可）が示すように、字形が三〇人（八一％）と最も高く、構成が一九人（五一％）、線の太細が一八人（四八％）と続き、線質は九人（二四％）であった。平仮名の表現は漢字の表現と比較す



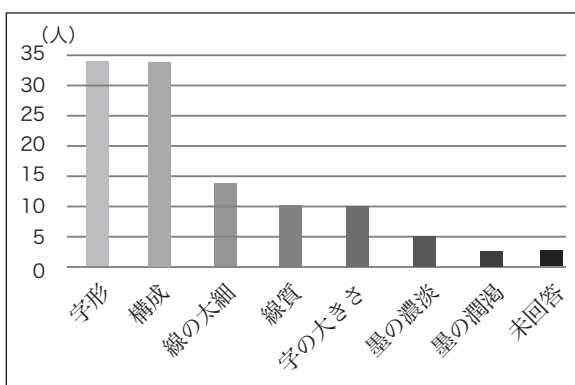
【グラフ7】「平仮名の表現」の変化（設問ク）



【グラフ5】「漢字の表現」の変化（設問力）



【グラフ8】「平仮名の表現」内訳（設問ケ）



【グラフ6】「漢字の表現」内訳（設問キ）

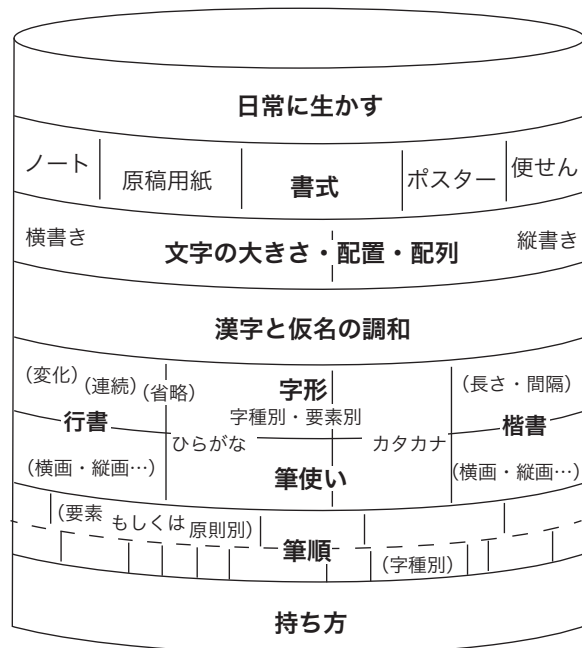
ると線の太細は一二%高く、構成は三五%、線質は一〇%低い結果となった。これらのアンケート結果から、高校生の実態について次の二点を読み取ることができる。

一つ目は、小中学校書写の学習を通して、多くの生徒が「仮名は漢字よりも小さく書く」ことについて深く理解しており、漢字と仮名を調和させるためには「文字の大きさ」を変化させればよいと認識していることが分かる。小学校学習指導要領（第三・四年）の書写に関する事項には「漢字や仮名の大きさ、配列に注意して書くこと」とあり、小学校における学びの定着が窺える。

二つ目は、多くの生徒が「漢字の表現」では字形と構成、「平仮名の表現」では字形と構成、線の太細に表現の変化が起これと考えているが、線質について変化が起これと考える生徒は少ないということである。確かに、学習の流れや指導上の留意点がこの結果へ影響を及ぼすことはあるだろうが、古典の臨書学習を通して、生徒は最も字形への理解を深めたことが分かる。ここで、押木が示した「マクロ的書写の汎用性」【図1】の考え方⁽⁸⁾によってこの結果を捉え直してみる。汎用性については、例えば、下層に位置する「持ち方」はすべての書字活動に必要な内容であることから汎用性が高く、上層に位置する「便せん」や「ポスター」は書式によって表現は異なることから汎用性が低いことを示している。この考え方を芸術科書道に転用し、書を構成する要素や用筆・運筆に関してマクロ的な捉え方をするために【図2】を作成した。例えば、「墨の濃淡」や「墨の潤滑」は、現代社会においては筆記具



【図2】 マクロ的に見た書道の汎用性



【図1】 マクロ的に見た書写の汎用性 (押木 2000)

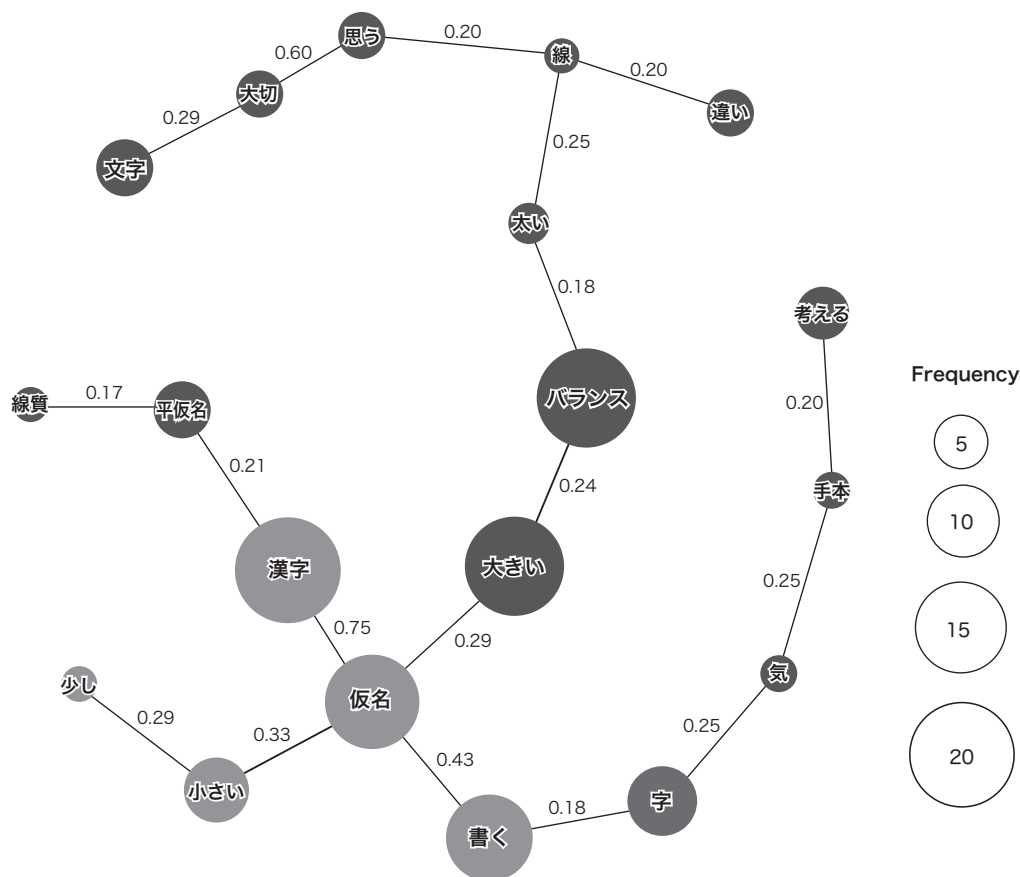
【文字の大きさ】 - 漢字よりも仮名を小さくする 4 - 漢字と仮名の大小 4 - 仮名を小さめに書くこと 2 - 漢字が大きくなりすぎず、仮名が小さくなりすぎないこと 1 - 文字の大きさを考えて、手本をしっかりと見ること 1 - 漢字と仮名の字の大きさに気を付ける 1 - 文字の大きさ 3 - 見た目の大きさの比率が揃っているかどうか 1 - 漢字を目立たせるように書く 1 - 仮名は控えめに書く 1 - 漢字と仮名に違いを付ける 1 - 漢字と仮名の大きさの違い 1 - 漢字と仮名の大きさに差を付けること 1 - 漢字を大きく、仮名を気持ち小さく書くこと 1	【配置・構成】 - 軸を揃えること 1 - 文字の配置に気を付け、全体のバランスをよくすること 1 - 文字とのつながりも意識してなるべく違いが出ないように 1
【その他】 - バランス 2 - 文字のバランス 2 - 大きさのバランス 4 - 漢字と仮名のバランス 2 - 大きさのバランス 1 - バランスを考えること 1 - バランスよく書くこと 1 - 仮名はやわらかく書く 1 - やわらかさ 1 - お手本に合わせて書くこと 1 - 手本の真似をする 1 - 読める文字で書くこと 1 - 漢字と仮名の文字の雰囲気統一し、一体感を持たせること 1	【線質】 - 漢字と仮名の線質を可能な限り近づけること 1 - 線質を寄せる 1 - 漢字と仮名の文字の形や線などを似つかわせること 1 【線の太細】 - 仮名は漢字よりやや太めに書くこと 1 - 線の太さ 3 【字形】 - 字形 1

【図3】 設問「漢字と仮名を調和させて書くときにどのようなことが大切だと考えていますか」における高校生の回答のまとめ（KJ法、数字は選択した人数）

として筆を使用する機会は限られており、それらについて考える機会は極めて少ないことから、汎用性が低いと判断して上層に位置付けた。それに対して、「筆使い」や「字形」については読みやすさにも関わるため、日常的に意識する事項として下層に位置付けた。また、筆使いや扱う用具に伴って「線質」、「線の太細」は影響を受けるため同層に位置付けた。つまり「筆使い」、「線質」、「字形」、「線の太細」は、多くの場面で活用できる学習内容^⑨として汎用性が高いと考えられる。押木は書写教育の分野において、「他の学習内容に比べ、ある学習内容が難易度が低い場合、より基礎基本的な内容であると考える」と難易度と書写の基本構造について述べている。漢字の表現と平仮名の表現において、変化が起こる要素として生徒の選択が多かった「字形」、「構成」、「線の太細」は、汎用性の高さが一概に同じとは言えないが、生徒が漢字仮名交じりの書を創作する際の学習方略として、他の要素に比べて獲得しやすいと考えることができる。

設問コ「漢字と仮名を調和させて書くときにどのようなことが大切だと考えていますか」については、漢字と仮名を調和させて書くときに大切だと考えることを自由記述の形式で回答させ、得られた回答項目についてKJ法を援用した手法によって分析した(分析1^⑩)。次に、テキストマイニングを用いて、共起関係をもとに、生徒の調和に対する意識を明らかにすることにした(分析2)。分析1の結果【図3】から、設問オと同様に「文字の大きさ」(二三人)が最も多く、次いで「バランス」(二三人)の表記が多い。その一方で、設問キ〜ケにおいて数値が最も高かった「字形」の記述は一件のみであった。古典の臨書学習を通して「字形」に意識を向ける生徒が最も多かったが、その考えは「漢字と仮名の調和」に直接的には結び付いていないことが窺える。加えて、「線質」(三件)や「線の太細」(四件)が漢字と仮名の調和に結び付くと考える生徒も極めて少なく、ほとんどの生徒が調和を図るための方略としては、「文字の大きさ」に関する視点しか持ち合わせていないことが明らかとなった。

【図4】は分析2の結果を共起ネットワークで表したものである。共起ネットワークは、言葉の出現頻度を円の大きさで表し、それらのつながりを線で結んで視覚化したものである。同一グループは同色かつ実線で表示される。円の位置関係や語区間の距離はグループ分けとは無関係である。共起関係の媒介性に基



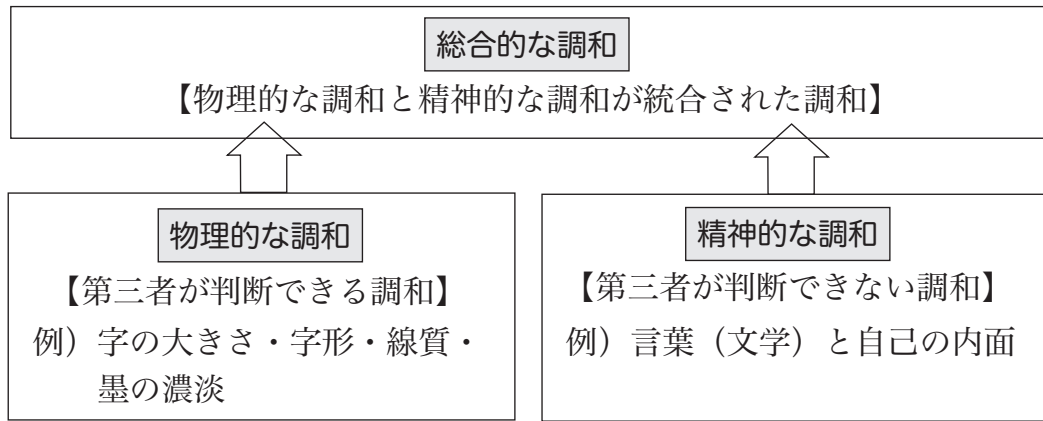
【図4】 設問「漢字と仮名を調和させて書くときにどのようなことが大切と考えますか」における分析結果の共起ネットワーク図

づくサブグラフ検出を行った結果、六つの分類が示された。この結果から「仮名」を「漢字」より「少し」「小さく」「書く」ことを心掛けていることが分かる。また、KJ法でその他の項目に位置付けた「バランス」が、バブルスロットの「大きい」と結び付いていることから、文字の大きさのバランスを意識していると言える。しかし、生徒の考える「バランス」とは文字の大きさに限定できるのか、線の太細や構成に関することも含まれるのか、直感的なことなのかなど、その真意までは読み取ることができない。そもそも「バランス」という言葉の持つ曖昧さを考慮すると、生徒は「バランス」を整えるためにどのようにすべきであるかという具体的な方略にまでは考えが至っていないとも考えられる。

以上の分析結果から、書写における学習の定着率は高いものの、アンケートを実施した時期である古典の臨書学習を終えた直後の段階では、高等学校における「漢字の書」の学習が、漢字と仮名の調和へと発展的に繋がるという意識は育まれていないことが分かる。つまり、書道で学習する書を構成する要素についての汎用性は現段階では高いとは言えない。このことから、年間学習指導計画において「漢字の書」や「仮名の書」の学習がそれぞれで完結するのではなく、漢字と仮名の調和（漢字仮名交じりの書）を意識した体系的な学習指導方法を構築し、汎用性を高めていく必要があるだろう。

第2章 自己調整学習の視座から考える調和の構造

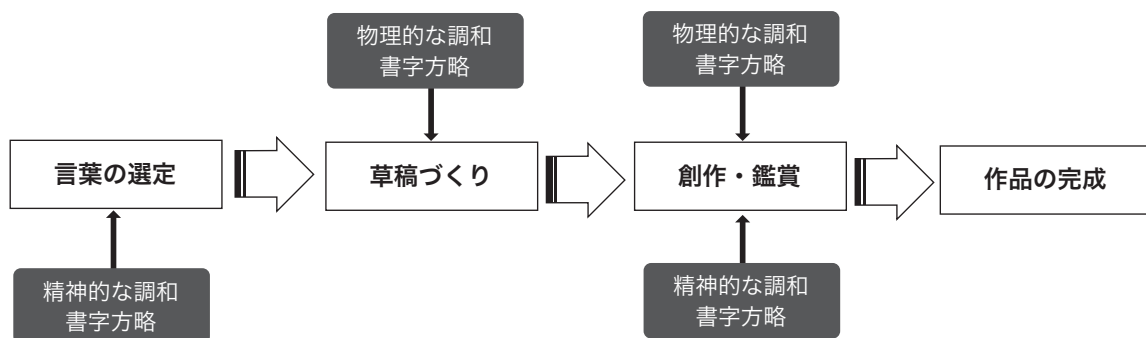
生徒に漢字と仮名の調和をどのように理解させ、調和を図らせるのかを



【図5】 調和的書字方略における調和の種類と構造

考える前に、調和の構造を整理しておく必要がある。「調和」という言葉は、日本国語大辞典に「①ととのいやわらぐこと。偏りや矛盾や衝突がなく、互いがほどよく和合すること。またそうさせること。ちょうか。②よくつりあうこと」と説明されている。これを踏まえると、漢字仮名交じりの書における調和とは、「一つの作品内に表現される漢字と仮名の偏りや矛盾、衝突がなくその表現内でつり合っていること」と捉え直すことができる。また、先行研究を概観すると、種村は「調和体作品とは、書かれている漢字とかなが感覚的にも視覚的にも、自然で一体となったものでなくては書とは言えません」「一般には、漢字、かなのどちらか一方に近寄った地点で調和させるのが普通」として、書を構成する要素や用筆・運筆等の工夫により、互いに違和感のない地点へ歩み寄らせることの重要性を述べている。これらの調和に関しては、谷口の線質を中心に漢字仮名交じりの書のあり方を研究したものや、広瀬の漢字仮名交じりの書の導入期と発展期における学習指導方法について研究したものがある。一方、駒井は「漢字のスタイルに仮名をどう接近させたら良いかや形の上での歩み寄りについて問題と考えるだけには止まってはならない」「直接に詩や歌の内容を表現するのではなく、その詩文（題材）に接したときの感動を、作家として内面をさらに燃焼させて、その時の情感を表現するのだ」と述べている。この文学性においては、久米が「素材となる詩文・語句選びこそ、主体的表現活動への鍵」と述べたり、大森が「生徒の心に響く素材」について研究したりしている。これらは、書を構成する要素や用筆・運筆等の工夫のみならず、表現する言葉の意味や価値に向き合うことの重要性を示唆していると考えられる。

ここまでの先行研究に基づき、「調和」について分類・整理すると、「物理的な調和」、「精神的な調和」、「総合的な調和」に大別できるのではないかと考えた【図5】。物理的な調和とは、書を構成する要素や用筆・運筆等を意識し、漢字と仮名が感覚的にも視覚的にも調和が図られた状態を指す。これは第三者にも判断することができる調和である。一方で、精神的な調和とは、作品の文学性に書字者が自己の内面を近接させ、言葉（文学）と書字者の内面との調和が図られた状態を指す。これは第三者が判断できない調和である。総合的な調和とは、物理的な調和及び精神的な調和が統合された最も高次の調和を指し、漢字仮名交じりの書が最終的に目指す調和である。また、調和を図るための方略を「調和的書字方略」とし、物

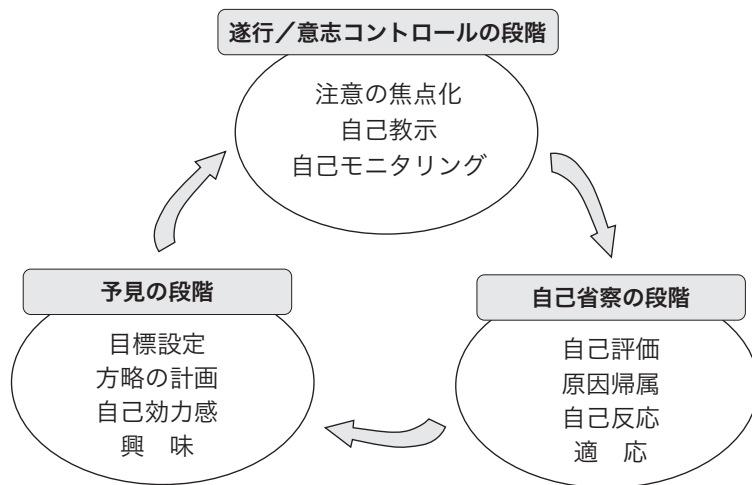


【図6】 漢字仮名交じり書の制作過程における書字方略の使用例

理的な調和及び精神的な調和に関わるそれぞれの方略を「物理的な調和書字方略」、「精神的な調和書字方略」とすることとした。また、これらの方略の獲得について順序性はなく、物理的な調和書字方略を獲得してから精神的な調和書字方略を獲得するといった性質のものではないと考える。

漢字仮名交じりの書の制作過程を考えた場合、【図6】のようにどの制作過程においても物理的な調和や精神的な調和を図るために、生徒が調和的書字方略を吟味して使用できることが望ましい。例えば、「言葉の選定」において、生徒が自分の心情に合う最も適切な言葉について思いを巡らし、その言葉と心情を近接させて一致を図るためには精神的な調和書字方略が必要である。また、「草稿づくり」において漢字と仮名の文字の大きさや字形について推敲し、漢字と仮名の表現の一致を図るためには物理的な調和書字方略が必要である。総合的な調和を目指すには、物理的な調和書字方略と精神的な調和書字方略の双方が不可欠であり、この二つの方略を適切に活用してこそ真の調和が成り立つ。

しかしながら、漢字仮名交じりの書の制作のあり方をめぐっては「いきなり主観を発揮する自律的で自発的な世界に飛び込めないのは無理からぬこと」⁽²⁰⁾や、「高等学校一年生という導入期に自由な表現は無理である」⁽²¹⁾と述べられるなど課題は多い。メタ認知的な思考を働かせ、書字方略を適切に使用できていないことが様々な要因のうちの一つではないかと考える。達富・青山が「学習者が日常的な書字場面でメタ認知的な思考を働かせ自覚している方略」を「メタ認知書字方略」と定義している⁽²²⁾。メタ認知書字方略は、メタ認知のなかでも「目的に応じた効果的な方略についての知識」とされる「方略についての知識」に分類される。また、方略についての知識は「宣言的知識」、「手続的知識」、「条件的知識」の三つに分類できる⁽²³⁾。宣言的知識とは方略についての知識、手続的知識とはその方略を具体的にどのように使うかについての知識、条件的知識とはその方略をいつなぜ使うのか（どのような効果であるのか）についての知識である。また、達富・青山は、方略の使用についての研究が進む読解方略に着目し、古賀の研究に基づいて、メタ認知書字方略についても意識性・選択性・統合性が伴うと結論付けている⁽²⁴⁾。これらを書字活動に照らし合わせて定義付けると、「意識性」とは個々の書き方が書字者に意識化されている性質を、「選択性」とは複数の書字方略の中から適切なものが選択される性質を、「統合性」とは複数の書字方略が組み合わせられ



【図7】 自己調整学習の自発的フィードバックループ

予 見	目標設定や方略的な計画を含む課題分析、自分の学習についての自己効力信念、学習の結果についての期待（知覚された価値）、課題に対する内発的興味（知覚された価値）、目標志向性（学習志向性の方が遂行志向性よりも良いという）を含む自己動機づけ信念。
遂行／意志コントロール	イメージ化、自己教示、注意の焦点化、課題方略の適用を含む自己統制、自己記録、自己実験（何が最もうまくいくか様々な方法を試すこと）を含む自己観察。
自己省察	何らかの基準（以前の自分のパフォーマンス、他者のパフォーマンス、何らかの絶対的な基準）に基づくパフォーマンスの自己評価、結果の原因帰属（統制の所在についての信念）を含む自己判断。 その後の動機付けを向上／低下させる自己満足程度、より効果的な学習方略の使用や自己イメージの保持につながる適応的／防衛的調整（テストを受け損なったりコースを途中でやめたりするなど）を含む自己反応。

【表3】 伊藤（2009）が考える自己調整学習の3要素の説明

いて「Zimmermanは」生徒が自分たちの学習方法、方略の効果をモニターし、ある学習方略から他の方略に切り替えるような自己認知の内面的変化から行動の外面的変化に及ぶ多様な方法で、このフィードバックに反応する」、「この循環については、学業上の目標達成に向け、自己調整学習方略が適用され、その結果、遂行が向上すれば、自己効力感が高まる。そして、自己効力感が動機づけとなり、さ

て活用される性質を指すと考えられる。達富・青山は「学習者が意識的かつ柔軟に文字を書くためには、『宣言的知識』や『手続き的知識』だけでなく、実際の書字場面を想定した『条件的知識』が必要となる」としている。条件的知識については、古賀が、読解方略を自己調整学習の観点で捉え、「自己調整学習理論は条件的知識の側面を含んだ形で方略の学習過程を説明する理論である」としている。⁽²⁶⁾
自己調整学習とは「学習者が、メタ認知、動機づけ、行動において、自分自身の学習過程に能動的に関与していること」や「学習者が〈動機付け〉〈学習方略〉〈メタ認知〉の三要素において自分自身の学習過程に能動的に関与していること」と定義付けられ、それを抽象化した自発的フィードバックループは【図7】のように提示されている。また、各段階の説明は【表3】のとおりである。このフィードバックループにつ

らに知識や技術の獲得を目指して、学習者は、自己調整学習方略を適用しつづけようとする⁽³⁰⁾」としている。

これらをまとめると、条件的知識を獲得することによって自己調整学習は促され、自己調整学習が循環することにより高次の学習へと導くことができるということである。この考えを踏まえ、自己調整学習の視座に立つて、漢字仮名交じりの書における漢字と仮名の調和を捉え直してみる。予見の段階では、調和についての目標（どのように表現したいか）が設定され、方略が計画・選択される。遂行コントロールの段階では、予見で選択された調和的書字方略によって調和が図られる。自己省察の段階では遂行の結果の評価をし、調和が不完全な場合は方略を吟味した後、再選択、統合して問題解決を図っていくことになる。生徒が条件的知識を習得し、適切に活用することによって、調和における課題を乗り越えていけると考える。しかしながら、物理的な調和と精神的な調和の双方について、先行研究を見る限りは、調和を図るための方略の獲得過程や生徒が方略を使用した際の成果については明らかにされていない。ここで改めて、物理的な調和と書字方略と精神的な調和と書字方略の相互の関係性について考えてみたい。総合的な調和を図るためにはどちらの方略も欠かせないが、どの程度調和が図られているのかを第三者が評価するという条件を付けた場合、そこには優位性が存在するようになる。精神的な調和と書字方略によってその言葉（文学性）と書字者の内面の調和は十分に図ることができたとしても、物理的な調和と書字方略を獲得できていなければ、総合的な調和が図られた作品を制作することはできない。

例えば、ある詩において、その内容や作者の制作意図等を書字者が十分に理解し、精神的な調和を図ることができたとする。しかし、書を構成する要素や用筆・運筆等における知識や技能が十分に習得できていない場合、イメージを正確に表現することは難しく物理的な調和には達しない。つまり、物理的な調和と書字方略は書字者の心情を可視化するための方略であると考えることができる。書字者の抱いた感情を直接第三者が見ることはできないが、物理的な調和を図ることで間接的に書字者の内面を表出させ、鑑賞者にも精神的な調和を体感させることができる。つまり、第三者が作品を鑑賞することを踏まえれば、物理的な調和と書字方略を獲得することは不可欠である。そこで、学習者が物理的な調和と書字方略を獲得する初期段階（小中学校）の認知メカニズムを説明していく。そうすることによって、中学校国語科書写から高

等学校芸術科書道への円滑な接続を図るための有効な手掛りが得られると考えた。

第3章 教科書を通して獲得できる調和的書字方略

教科書は「学習指導の中枢をなすものであり、教育内容や目標を具体的にあらわしたもの⁽³¹⁾」と述べられており、現場では多くの教員が使用している。本研究では採択率が高い小学校三社（平成二六年検定⁽³²⁾）、中学校三社（平成二七年検定⁽³³⁾）を調査対象とし、学習指導要領における「漢字と仮名の調和」に関する記載事項を参考にした。

第1・2学年	(ア) 姿勢や筆記具の持ち方を正しくして書くこと (イ) 点画の書き方や文字の形に注意しながら、筆順に従って丁寧に書くこと (ウ) 点画相互の接し方や交わり方、長短や方向などに注意して、文字を正しく書くこと
第3・4学年	(ア) 文字の組立て方を理解し、形を整えて書くこと (イ) <u>漢字や仮名の大きさ、配列</u> に注意して書くこと (ウ) 毛筆を使用して点画の書き方への理解を深め、筆圧などに注意して書くこと
第5・6学年	(ア) <u>用紙全体との関係に注意して、文字の大きさや配列などを決めるとともに、書く速さを意識して書くこと</u> (イ) 毛筆を使用して、穂先の動きと点画のつながりを意識して書くこと (ウ) 目的に応じて使用する筆記具を選び、その特徴を生かして書くこと

【表4】 小学校における各学年の書写の内容 *傍線部は筆者

第1学年	(ア) <u>字形を整え、文字の大きさ、配列などについて理解して、楷書で書くこと</u> (イ) 漢字の行書の基礎的な書き方を理解して、身近な文字を行書で書くこと
第2学年	(ア) <u>漢字の行書とそれに調和した仮名の書き方を理解して、読みやすく速く書くこと</u> (イ) 目的や必要に応じて、楷書又は行書を選んで書くこと
第3学年	(ア) 身の回りの多様な表現を通して文字文化の豊かさに触れ、効果的に文字を書くこと

【表5】 中学校における各学年の書写の内容 *傍線部は筆者

小学校学習指導要領（平成二九年告示）解説国語編における書写に関する事項ではいずれの学年においても「調和」という言葉は出現しない。しかし、漢字と仮名の関係性に着目した記述を精査すると、第三学年及び四学年の学習内容（イ）や第五学年・第六学年の学習内容（ア）が漢字と仮名の調和に関する事項として取り上げられている【表4】。中学校学習指導要領（平成二九年告示）解説国語編における書写に関する事項では、第一学年において楷書と仮名の調和に関する内容が、第二学年において行書と仮名の調和に関する内容がそれぞれ取り上げられている【表5】。これらを踏まえ、漢字と仮名の調和の学習初期段階（小学校第三学年及び第四学年）、楷書と仮名の調和の学びを深める段階（中学校第一学年）、行書と仮名の調和を目指す段階（中学校第二学年）を調

メタ認知書字方略の構造

- 規範的な書字
例) 点や画のとめ・はね・はらいを意識して書く
- 審美的な書字
例) きれいな字を書く、美しい字を書く
- 社会的な書字
例) 誰が読むのかを意識して書く
- 強制的な書字
例) 筆圧を強くして濃い字を書く
- 効率的な書字
例) 字をはやく書くようにする

【図8】 メタ認知書字方略の構造（遠富・青山 2019）

調和的書字方略の構造

- 要素意識
例) 文字の大きさ・配列・字間を意識して書く
- 比較・選択
例) 対象を比較して、望ましい書き方を理解して書く
- 他者意識
例) 読み手の読みやすさを意識して書く
- 効率・連続
例) はやく連続性を意識して書く

【図9】 調和的書字方略の構造

査対象とし、教科書の表記にどのような傾向や工夫が見られるかについて考察することとした。

また、書写教科書の分析において、メタ認知書字方略の先駆的な研究をする遠富・青山は、「メタ認知書字方略の構造」【図8】に基づき、教科書における「学習のてびき」が生徒に意識化させる多くは「規範的な書字方略」であり、行書の学習に伴う中学校では、「効率的な書字方略」の使用が多くなると分析している⁽³¹⁾。このことから、漢字と仮名の調和を図る学習においても同様にメタ認知書字方略（または別の方略）を使用することが予想できる。そこで、小学校と中学校における教科書の「漢字と仮名の調和」に関する表記をそれぞれ【資料2】、【資料3】のようにまとめた。その方法として、各教科書において「漢字と仮名の調和」に関わる該当ページを挙げ、「発問・声かけ」もしくは「まとめ・ふりかえり」の記載内容を抜き出した。また、記載内容は「どのように漢字と仮名の調和を図らせようとしているかを整理・分類し、メタ認知書字方略の構造を参考にして分析した。

調査の結果、【資料2】、【資料3】に示した網掛けや下線、□部に、特徴的な傾向や違いが見られた。これらの特徴に着目すると、「要素意識」、「比較・選択」、「他者意識」、「効率・連続」の四つの方略に分類することができる【図9】。まず、どちらの校種とも最も多い表記は「○○に気をつけて書きましょう」、「○を確かめよう」等（網掛け部）であり、これらは注意喚起を促す方略として要素意識に分類した。○○に該当するのは、文字の大きさや配列、字間などであり、児童や生徒がこれらの要素に注意を向けられるように誘導する補助線が多く見られる【図10】。その誘導に従って漢字と仮名の調和の学習を進めていくことにより、「規範的な書字」へ向かっていくと考える。

次に、中学校に多く見られた「○○と△△を比較し、違いを見つけよう」（傍線部）【図11】等は、異なる

教科書	学年	見出し・題材 見出し…★ 題材…「」	発問・声かけ M、T社：見出し後の文 K社：めあて、キャラクターの 吹き出し	まとめ・ふりかえり ※漢字と仮名の調和に関する箇所を抜粋 M社：「たいせつ」、調和に該当する赤字 T社：「書写のかぎ」、「ふり返って話そう」 K社：「ふり返ろう」
M社	第4学年	★ノートの達人になろう こくごのノート ・「運転手の松井さん」 ・「いいえ、夏みかんですよ」	・ノートを <u>読みやすく</u> 書くためのポイントを考えよう ・文字の大きさのバランスがよいのは <u>どちらかな</u> 。理由も合わせて考えよう。 ・ <u>どちらが読みやすいかな</u>	・漢字を大きめに、平がなを小さめに書くと、 <u>読みやすくなる</u> ・行の中心をそろえ、字間（字と字の間）を同じくらい空けて書くと、 <u>読みやすくなる</u>
		★できているかな 横書きのノート 例「空気をあたためたり…」 (理科の実験ノート)	・横書きのノートでも、文字の配列に <u>気をつけて</u> 書いているかな	・下の線にそろえて（または、上の線と下の線の真ん中に）書いているかな ・漢字は大きめに、平がなは小さめに書いているかな・字間は同じくらい空いているかな
		★伝とう工芸の良さを伝えよう リーフレットの書き方 例「博多おり」	・文字の大きさや配列に注意して、 <u>読みやすい</u> リーフレットを作ろう	・かなは、漢字よりも小さめに書く ・行の中心をそろえる ・字間をそろえる
T社	第3学年	★文字の大きさと字間 ・「朝ごはんを食べる。」 ・「元気よく歩く。」	・次の文の書き方をくらべて、 <u>読みやすく</u> するために <u>気をつける</u> ことを見つけましょう	・となりの行の文字と重ならないように、けい線のはばよりも少し小さく書く ・ひらがなは漢字よりも少し小さく書く ・字間（文字と文字の間）は、同じくらいの広さにそろえてあける
		★読書記録カード 例「雪国にくらす人々・前野かおる・一月三十日」	・文字の大きさと字間に <u>気をつけて</u> 読書記録カードを書きましょう	・文字の大きさと字間について、書くときに <u>気をつけた</u> ことを話し合しましょう。
	第4学年	★ノートを書こう 例「文の組み立てを考えよう。…」	・字形の整え方と文字の大きさ、字間に <u>気をつけて</u> 書きましょう	・漢字とひらがなの大きさをくらべてみよう ・これまで学習してきた「書写のかぎ」をどのように生かしたか話し合しましょう
		★お礼の気持ちを手紙で伝えよう お礼の手紙 例「花村さん、お元気ですか。」	・行の中心や行間、文字の整え方に <u>気をつけて</u> 、 <u>読みやすく</u> 書きましょう	・手紙を書くときに、これまで学習してきた「書写のかぎ」をどのように生かしたか話し合しましょう
K社	第3学年	★はがき 暑中みまい 例「暑中おみまい申し上げます」	・文字の大きさや行の中心に <u>気をつけて</u> 書こう	・文字の大きさや行の中心に <u>気をつけて</u> 書いたかな
		★原こう用紙（セーフティ教室の作文） ★カード（てんらん会作品のカード）	・文字の大きさや配列に <u>気をつけて</u> 書こう	・文字の大きさに <u>気をつけて</u> 書いたかな ・配列に <u>気をつけて</u> 書いたかな
		★俳句「雪とけて村いっぱいの子どもかな」他	・文字の大きさや行の中心に <u>気をつけて</u> 書こう	・漢字とひらがなの大きさに <u>気をつけて</u> 書いたかな ・行の中心に <u>気をつけて</u> 書いたかな
		★手紙 お店見学のお礼じょう	・文字の大きさや行の中心に <u>気をつけて</u> 、ていねいに書こう	・文字の大きさや行の中心に <u>気をつけて</u> 書いたかな ・ <u>相手のことを考えて</u> ていねいに書いたかな
	第4学年	★ノート 理科のノート 例「予想が正しければ…」	・学習内ようが <u>わかりやすい</u> ノートのまとめ方を知ろう ・ <u>読みやすさ</u> のひみつはどこにあるでしょうか ・どんな工夫があるのか考えてみましょう	・学習内ようが <u>わかりやすい</u> ノートのまとめ方がわかったかな
		★はがき けい老の日はがき 「おじいちゃん、おばあちゃん、お元気ですか。…」	・文字の大きさや行の中心に <u>気をつけて</u> 書こう	・文字の大きさや行の中心に <u>気をつけて</u> 書いたかな
		★文化（短歌）「秋風にたなびく雲のたえまより…」 ★かるた（ぼうさいかるたを作る） 例「ひなんばしよ 歩いてかくにん 日ごろのそなえ」	・文字の大きさと配列に <u>気をつけて</u> 書こう	・文字の大きさに <u>気をつけて</u> 書いたかな ・配列に <u>気をつけて</u> 書いたかな

【資料2】 小学校における「漢字と仮名の調和」に関する表記のまとめ

【資料3】 中学校における「漢字と仮名の調和」に関する表記のまとめ

教科書		見出し・題材 見出し…★ 題材…「」		発問・声かけ		まとめ・ふりかえり	
学 年		Ｔ社：見出し後の文 Ｔ社： Ｋ社：めあて、キャラクターの吹き出し		※漢字と仮名の調和に関する箇所を抜粋 Ｍ社：「たいせつ」、調和に該当する赤字 Ｔ社：「書写のかぎ」、「ふり返って話そう」 Ｋ社：「ふり返ろう」			
第１学 年	★文字の大きさと配列 ・俳句「目には青葉 山ほととぎす 初がづを」(小筆)	・()に当てはまる言葉を書き込み、文や文章を読みやすく書くポイントを確認しよう	・これまでに学習したことを生かして、鉛筆で書こう ・19ページの点線を谷折りにして、上の文を書こう ・折り目を開き、左の例と比べてみよう ・横書きの書き方を確かめよう	・漢字の筆使い ・漢字の字形 ・平仮名の筆使いと字形 ・文字の大きさと配列	・仮名は漢字より小さく書く ・行の中心をそろえる ・字間と行間をそろえる ・用紙の上下左右に余白を取る ・用紙にあった文字の大きさを考える		
	★楷書と仮名のまとめ ・文章「あの坂をのぼれば」より(鉛筆) ・横書きの文章(鉛筆)			・横書きの書き方 下の線にそろえて書く方法(線との間は少し空ける)、線と線の中央に書く方法 ・速く書くときの書き方「払い」が「止め」になる、画が接するところが離れる、次の面に続く「縦画」の終筆が「はね」になる ・片仮名の筆使い 片仮名は漢字と同じ筆使いで書く			
	★行書と仮名の調和 ・「砂山に雨の消えゆく音」(毛筆) ・「夕映えの空」(鉛筆→毛筆)	・ア(楷書とそれに調和する仮名)イ(行書とそれに調和する仮名)に含まれる平仮名を比較し、違いを見つけよう ・鉛筆で線をなぞり、筆派を確認しよう ・行書と仮名の調和をさせるために、仮名でも行書の筆使いを意識する	比較の観点 ・筆派 ・筆圧の変化	・画の中での筆圧の変化を意識し、軽やかに筆を運ぶ ・筆派を意識し、次の画につながるように書く			
第２学 年	★行書に調和する仮名 ・「いろは歌(字源付き)」(小筆)	・小筆で書いて、行書に調和する仮名の特徴を確認しよう ・行書に調和する仮名の筆使いに慣れよう ・楷書に調和する仮名と比べてみよう		・行書に調和する仮名には、点画に行書と共通した変化が表れる ・始筆や終筆の形が変化する ・点画が直接つながる			
	★行書と仮名のまとめ ・「いろは歌」(硬筆) ・文章「平家物語」より(硬筆) ・「生」「三」「洋」	・鉛筆でなぞり、行書に調和する仮名の筆使いを確認しよう ・硬筆で書くときも、行書とそれに調和する仮名の特徴を意識しよう ・行書と仮名の調和を意識して、文章を書こう	・行書の字形の整え方	・「横画」は、楷書よりも右上がりに書く ・同じ種類の点画が並ぶときは、二画目と三画目を「連続」させる ・行書や、それに調和する仮名の特徴を意識して文章を書いた			

M社「中学書写」

丁社「新編 新しい書写」			
第1学年	★楷書に調和する仮名 ・平仮名の五十音表 (字源付き・毛筆) ・平仮名・片仮名の五十音表 (鉛筆)	・平仮名、片仮名の筆使いや字形を調べよう ・自分たちがふだん書いている文字と教科書の文字を比べてみよう ・好きな言葉を、平仮名や片仮名で書こう	・平仮名、片仮名の筆使いや字形 ・平仮名も、一つ一つの点や線をはっきりと丁寧に書く ・平仮名は、漢字よりやや小さめに書く ・片仮名の筆使いは、基本的には漢字と同じである
	★配列 ・「明るい心」(鉛筆)	・次の二つの「明るい心」を比べてとき、漢字と平仮名の大きさがどのように違っているか調べよう ・配列がどうなっているか、小筆で書いて確かめよう	・行の整え方(配列) ・小筆の持ち方 ・行の中心に文字の中心をそろえる ・画数の少ない漢字や仮名はやや小さめに書く ・字間・行間をそれぞれそろえる ・上下左右の余白を適度に取る ・行頭をそろえる ・提腕法と枕腕法について
	★配列 「夏山の緑うつりし小窓かな」 俳句(小筆) ・「美しい緑」(毛筆・鉛筆)	・楷書の書き方に気を付けながら毛筆や硬筆で書こう ・「美」「緑」の点画の書き方が違っていることに気をつけよう ・書き方の違いを確かめながら書こう	・字間や行間 ・楷書 ＊このように書くとき、「速く書きやすく」なります ・点画の長さ、方向を変えても良い(戸、比) ・点画を離してもよい(田、文) ・点画の終筆をはねてもよい(木、和) ・点画の終筆を止めてもよい(角、実) ・点画の形を変えてもよい(緑、楽) ・点画を曲げなくてもよい(南、空)
	★配列 文章「さんきち」吉橋通夫 ・横書き ・数字 ・アルファベット	・行の整え方や文字の大きさを確かめよう ・印刷文字と手書き文字は字形が違ふよ。書くときは気を付けよう ・上の二つの横書きア、イについて、それぞれ行のどの部分で文字をそろえているか調べよう	・横書きの行の整え方 ＊文字のそろえ方には、二つの方法がある ア 下のけい線に文字の下部を近づけてそろえる イ 行の中心に文字の中心をそろえる ア・イの二種類の書き方を交ぜて書かない ・文字の大きさや字間に気をつけて書いた ・横書きの行の整え方を理解して書いた
第2学年	★行書に調和する仮名 ・「流れる雲を見ていた」(鉛筆) ・平仮名の五十音表(字源付き・小筆) ・平仮名・片仮名の五十音表(鉛筆)	・行書に調和する仮名の筆使いや字形に気を付けて書こう ・楷書に調和する平仮名と行書に調和する平仮名の筆使いや字形の違いを調べよう ・行書に調和する仮名は、筆脈を意識して書くことを確かめよう ・行書に調和する平仮名は、平仮名の字源に似ているね ・行書と平仮名の調和の仕方を調べよう(流れる雲) ・「流れる雲」を毛筆や硬筆で書いて行書と平仮名の調和を確かめよう ・行書と平仮名の調和を確かめながら、毛筆や硬筆で「豊かな自然」を書こう	・行書に調和する平仮名 ・行書と平仮名の調和 ・点や線が「連続する」ことがある ・始筆・終筆の方向が変化することがある ・点や線の一部分が省略されることがある ・終筆の筆使いが変化することがある ・行書とともに書く仮名の特徴を理解した ・行書と仮名の調和に気を付けて書いた ・行書とともに書く平仮名の特徴を理解した ・行書と平仮名の調和に気を付けて書いた
	★配列 ・「枕草子」より(鉛筆)	・行頭と行末の位置はそれぞれどうなっているか調べよう ・行の中心や、漢字と仮名の大きさはそれぞれどうなっているか調べよう	・配列 ・配列を整えて書いた。 ・行書に調和する仮名の書き方に気を付けて書いた。

第1学年 K 社「中学書写」			
★楷書と仮名を調和させて書く う ・「いろは歌」(毛筆・硬筆) ・「伸びる芽」「楽しい夏」	・筆脈が表れているのは <u>どの部分だろうか</u> ・漢字と仮名の大きさ、配列は <u>どうなっているだろうか</u>	・筆脈 ・配列	・筆脈を <u>意識して</u> 書く ・仮名は漢字よりも小さめに書く ・配列に気をつける
★楷書に調和する仮名「いろは歌」 ・いろは歌(字源付き・毛筆) ・平仮名・片仮名の五十音表(鉛筆)	・楷書に調和する仮名の筆使いを <u>確かめよう</u>	・平仮名、片仮名の筆使い	・平仮名、片仮名の筆使いを <u>理解できたか</u>
★学習を生かして書く一行の中心― ・「竹取物語」より(鉛筆)	・漢字と仮名の大きさや行の中心を <u>理解して</u> 書く ・声に出して読んだあとに、硬筆で「竹取物語」の冒頭を書いてみよう ・どう書くかと楷書と仮名を調和させることができるか考えよう ・▼と▲を線で結び、中心を考えよう	・漢字と仮名の大きさ ・行の中心	・漢字と仮名の大きさを <u>理解して</u> 書けたか ・行の中心をそろえて書けたか
★学習を生かして書く - 配列 - ・原稿用紙に書(鉛筆) ・レポートの形式(横書き、鉛筆・サインペン)	・漢字と仮名の大きさや配列を <u>理解して</u> 、さまざまな形式に合わせて書く ・ <u>相手が読みやすいように</u> 、丁寧な文字で書く	・横書きの文字の位置	*横書きの文字の位置は次の二通りの書き方がある ・行の下の線をめあてに書く方法 ・行の中心にそろえて書く方法
・手紙を書く(万年筆)	・手紙を書くときは、書く <u>相手</u> や目的に合わせた書き方をする ことが大切だね	・漢字と仮名の大きさ ・配列 ・さまざまな形式	・漢字とかなの大きさや配列を理解して書けたか ・書写で学習した内容をさまざまな形式に生かして書けたか
・学校生活に生かして書く 掲示物(ポスター、新聞)(色鉛筆、ボールペン、サインペン、フェルトペン、毛筆(大筆))	・伝える <u>相手</u> や <u>目的を明確にして</u> 、配列と筆記用具を工夫して書く ・掲示物は離れたところから見ても、読みやすいように書く ・大きく目立たせたい箇所は、毛筆を効果的に使用する	・配列 ・用具	・伝える <u>相手と目的をはっきりさせる</u> ・伝えたい情報を整理して文章をわかりやすく構成する ・配列を考えて下書きする(鉛筆でけい線を引くなど) ・内容が伝わりやすいように、 <u>わかりやすく</u> 書く ・使用する筆記用具の効果を考えて選ぶ ・文字の大きさや字間、行間、余白の取り方など、配列に注意して書く ・行間の取り方を工夫する
★行書と仮名を調和させて書いてみよう ・「喜びの声」(毛筆・硬筆) ・「やま」「みね」「なし」	・点面の連続と配列を理解して書く ・筆脈が表れているのは、 <u>どの部分だろうか</u> ・漢字と仮名の大きさ、配列は、 <u>どうなっているか</u> ・行書に調和するように、仮名の書き方を変えている部分は <u>どこか</u> 見つけてみよう	・点面の連続 ・配列	*楷書に調和する書き方と行書に調和する書き方を <u>比較</u> ・点や線を「 <u>連続して</u> 」書く 終筆を軽く書く ・点面の連続を理解して書いたか ・配列を理解して書けたか

★行書に調和する仮名 ・いろは歌（字源付き・毛筆） ・平仮名の五十音表（鉛筆）	・行書に調和する仮名の筆使いを確かめよう	・連綿	・行書に調和する平仮名の筆使いを理解できたか
★文字の大きさと配列 ・論語より（色紙、小筆） ・生かそう ・好きな言葉を色紙に書いてみよう ・好きな短歌や俳句を短冊に書いてみよう	・紙面に対する文字の大きさや、調和のさせ方はどうだろうか ・漢字や平仮名の筆使いに表れる筆脈はどうなっているだろうか ・絵と調和させて書いてみよう	・文字の大きさ ・配列	・紙面に対する文字の大きさや、位置、余白の取り方に気をつけて、全体の配列を工夫する ・行間や行の長さ、高さを工夫して書くとき、よりよい表現ができる ・文字の大きさと配列を理解して書けたか
★書く速さを意識して書く ・「走れメロス」より（鉛筆）	・行書の学習を生かして、書く速さを意識しよう ・一分間でどこまで書けるか行書で書いてみよう ・行書の特徴がどのようなところに表れているか考えてみよう ・行書と仮名の調和のさせ方と、「速く書きやすくする」ための工夫について考え、なぞってみよう ・「試し書き」と「まとめ書き」とを比べて、気づいたことを書こう	・書く速さ	・行書と行書に調和する仮名の書き方を理解して、書く速さを意識できたか
★学習を生かして書く一行書と仮名の調和と配列— ・「枕草子」より（鉛筆） ・「平家物語」より（鉛筆）	・漢字と行書の連続、省略、変化と仮名の調和は、どうなっているだろうか ・漢字と仮名の大きさ、行の中心は、どう気をつけたらよいだろうか	・行書と仮名の調和 ・配列	・行書と仮名の調和と配列を理解して書けたか
★学習活動や日常生活に生かして書こう ・クラス旗、クラス目標、うちわ、クラスTシャツ、新聞、掲示物（ポスター）、案内状	・学習活動や日常生活の中で、場面に応じた書き方をするには、どんな点に注意するといいか、話し合ってみよう	・場面に応じた書き方	・場面に応じた書き方をするには、どんな点に注意するといいかを話し合えたか
★行書と仮名を調和させて書こう ・「旅立ちの朝」（毛筆） ・「自然のリズム」「充実した生活」（鉛筆）	・これまでの学習を生かして、点画の連続と配列を理解して書こう ・筆脈が表れているのは、どの部分だろうか ・漢字と仮名の大きさ、配列は、どうなっているか	・点画の連続 ・配列 ・文字の大きさ	・これまでの学習を生かして、点画の連続を理解して書けたか ・漢字と仮名の大きさ、配列を理解して書けたか
・学習を生かして書く— 配列 ・「おくのほそ道」より（鉛筆）	・行書と仮名の調和や配列を理解して書こう ・漢字の行書の連続、省略、変化と、仮名の調和は、どのようになっているだろうか ・声に出して読んだあとに、硬筆で「おくのほそ道」の冒頭を書いてみよう	・行書とかなの調和	・行書とかなの調和を理解して書けたか

第2学年

② 行の中心と字間をそろえる

どちらが読みやすいかな。理由も合わせて考えよう。



【図 10】 M社『書写 四年』
小学校第4学年

⑦ ①に含まれる平仮名を比較し、違いを見つけよう。
▼比較の観点・筆脈・筆圧の変化

⑦ 楷書とそれに調和する仮名

砂山に雨の
消えゆく音

① 行書とそれに調和する仮名

砂山に雨の
消えゆく音

(室生犀星『砂山の雨』より)

【図 11】 M社『中学 書写一・二・三年』中学校第2学年

る表現方法で提示した具体的な言葉を比較することにより、調和する一方を選択する方略として比較・選択に分類した。生徒にじっくりと考えさせることを大切にするため、要素意識の該当ページと比べ、補助線等の誘導は少ない傾向が見られる。さらに、「○○を読みやすくしていねいに書きましょう」(波線部)等は、「手紙を書く」、「ノートを書く」といった特定の書字場面に見られる方略として他者意識に分類した。どのように書くと第三者にとって読みやすいのか、分かりやすいのかという観点で調和を図るよう促しており、「審美的な書字」を目指していると考えられる。最後に、中学校のみ見られた「○○を連続して書く」(□部)等は「効率的な書字」を目指し速さや連続性を意識することによって調和を図ることができる方略として効率・連続に分類した。

このように、小中学校の教科書における調和的書字方略として考えられることとしては、「要素意識」、「比較・選択」、「他者意識」、「効率・連続」が挙げられるのではないだろうか。これらの方略を宣言的知識として生徒が意識して獲得することが望まれる。しかし、方略の一つである要素意識だけは宣言的知識として生徒が獲得していたとしても、小中学校の学習段階では、高等学校芸術科書道で学習する書を構成する要素は十分に理解できておらず、要素意識の観点は限定されることがが実情である。つまり、小中学校の段階では、古賀が述べる選択、統合ができるほど豊富な知識・技能を生徒は持ち合わせていないということであり、自己調整学習において条件的知識を使用したとしても必ずしも意図に基づいた調和を図ることができるとは限らないということである。

第一章で述べた高校生の実態を本分析によって捉え直すと、小中学校の学習において、「文字の大きさ」以外にも着目すべき要素意識(配列や字間、行間等)があることを指導者が分かりやすく提示すべきであると言える。また、調和的書字方略に

ついて、生徒が理解し、その方略を使用できるように学習指導方法を工夫していく必要があると考える。

第4章 縦断的かつ系統的な漢字仮名交じりの書の学習指導を目指して

I 漢字仮名交じりの書に求められていること

学習指導要領に漢字仮名交じりの書という分野が登場して三〇年以上になる。歴史的変遷から見れば、平成一一年改訂後の学習指導要領において、漢字仮名交じりの書は必修化されたことになった。それに伴い、【表6】のように三つの分野の構成順序が入れ替わり、平成一一年改訂版で漢字仮名交じりの書が前

面に押し出されるようになった。

これにより、漢字仮名交じりの書が実質的に漢字の書や仮名の書よりも重要な分野として位置付けられ、当時は【図12】のように学習する分野の選択も可能であった。

その背景には、「従来の技術中心主義からの脱却を図り、また、小中学校の国語科書写との系統性を踏まえ、生活に生かす態度の育成を図るため^{②5}」という考えがあり、「年間指導計画の作成にあたって『漢字仮名交じりの書』をいつ取り扱うかについては、生徒の特性や

平成元年改訂版	目標 書道の諸活動を通して、書写能力を高め、表現と鑑賞の基礎的な能力と態度を育てるとともに、書を愛好する心情を養う。 内容 A表現 (1) 漢字の書 (2) 仮名の書 (3) 漢字仮名交じりの書 B鑑賞
平成11年改訂版	目標 書道の幅広い活動を通して、書を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし、書写能力を高め、表現と鑑賞の基礎的な能力を伸ばす。 内容 A表現 (1) 漢字仮名交じりの書 (2) 漢字の書 (3) 仮名の書 B鑑賞
平成21年改訂版	目標 書道の幅広い活動を通して、生涯にわたり書を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、書写能力の向上を図り、表現と鑑賞の基礎的な能力を伸ばし、書の伝統と文化について理解を深める。 内容 A表現 (1) 漢字仮名交じりの書 (2) 漢字の書 (3) 仮名の書 B鑑賞
平成30年改訂版	目標 書道の幅広い活動を通して、書に関する見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の文字や書、書の伝統と文化と幅広く関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。 内容 A表現 (1) 漢字仮名交じりの書 (2) 漢字の書 (3) 仮名の書 B鑑賞

【表6】 学習指導要領（平成元年改訂～平成30年改訂）における書道Iの目標と内容 ＊傍線部は筆者

1	漢字仮名交じり書 + 漢字の書 + 仮名の書
2	漢字仮名交じり書 + 漢字の書
3	漢字仮名交じり書 + 仮名の書

【図12】 学習指導要領（平成11年改訂）における書道I選択の例

表現領域	
漢字仮名交じりの書①	書写から書道へ 用具・用材 漢字と仮名の調和 字形 文字の調和 全体の構成 (名筆を生かした表現)
漢字の書	用具・用材 点画 線質 用筆・運筆 〈創作活動〉 表現の構想と工夫 〈古典の学習〉 字形 全体の構成 ○立体への視点 (例 篆書→篆刻)
仮名の書	用具・用材 点画 線質 用筆・運筆 〈創作活動〉 表現の構想と工夫 〈古典の学習〉 単体 連綿 全体の構成
漢字仮名交じりの書②	表現の変化へ 名筆を生かした表現 漢字と仮名の調和 字形 文字の大きさ 全体の構成 目的や用途に即した形式 意図に基づく表現

【図 13】 年間学習指導計画「表現領域」の流れの例 (加藤)

成果として、導入期に扱うことで中学校国語科書写から高等学校芸術科書道への系統的な指導ができ、書道の芸術性を実感できる点を挙げつつ、一方では課題として、小中学校で身に付けた書写力の概念が崩れてしまうことを懸念する点を挙げている。これらを踏まえると、年間学習指導計画における導入期に漢字仮名交じりの書を扱うことにより、中学校国語科書写において学習した「文字を正しく整えて書くこと」は理解させつつも、生徒が芸術科書道という芸術性のよさを感じられるように学習指導方法を工夫することが大切である。また、【図 13】における「漢字仮名交じりの書②」は、漢字の書と仮名の書の基本的な表現技法を学んだ後に一層高度な表現を目指す段階である。この段階における漢字仮名交じりの書の学習活動について、加藤は「制作にあたっては、漢字仮名交じりの書の名筆を生かしたり、既習の漢字の書や仮名を踏ま

学校の実態等を考慮して工夫することが大切⁽³⁶⁾」と述べられ、漢字仮名交じりの書が書写と書道の連携を担う分野として扱われていたことが分かる。このことを踏まえ、加藤は【図 13】のような年間学習指導計画例を提示し、導入期に「漢字仮名交じりの書①」として設定したことによる成果や課題を次のように報告している。⁽³⁷⁾

○自分の言葉、または詩や歌のフレーズを技巧にこだわらずに自由に表現する。あるいは毛筆の表現力の幅広さを知り、自分なりの表現を追究し、書が「芸術」であることを実感させることができる。

○中学校国語科書写における「文字を正しく整えて書くこと」の「概念崩し」的な方向性に傾いていることも否めない。

平成元年改訂版	(3) 漢字仮名交じりの書 ア 主な用具・用材とその扱い方 イ 漢字と仮名の調和に適した線質、字形、文字の大きさ及び全体の構成 ウ 目的や用途に即した形式と表し方 エ 意図に基づく表現の構想とその達成
平成11年改訂版	(1) 漢字仮名交じりの書 ア 表現と用具・用材との基本的な関係 イ 漢字と仮名の調和した線質の表し方 ウ 字形、文字の大きさと全体構成 エ 目的や用途に即した形式と表し方 オ 意図に基づく表現の構想と工夫
平成21年改訂版	(2) 漢字仮名交じりの書 ア 用具・用材の特徴を理解し、適切に扱うこと イ 漢字と仮名の調和した線質の表し方を習得すること ウ 字形、文字の大きさと全体の構成を工夫すること エ <u>名筆を生かした表現を理解し、工夫すること</u> オ 目的や用途に即した形式、意図に基づく表現を工夫すること
平成30年改訂版	(1) 漢字仮名交じりの書漢字仮名交じりの書に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する ア 知識や技能を得たり生かしたりしながら、次の(ア)から(ウ)までについて構想し工夫すること (ア) 漢字と仮名の調和した字形、文字の大きさ、全体の構成 (イ) 目的や用途に即した表現形式、意図に基づいた表現 (ウ) <u>名筆を生かした表現や現代に生きる表現</u> イ 次の(ア)及び(イ)について理解すること (ア) 用具・用材の特徴と表現効果との関わり (イ) <u>名筆や現代の書の表現と用筆・運筆との関わり</u> ウ 次の(ア)及び(イ)の技能を身に付けること (ア) 目的や用途に即した効果的な表現 (イ) 漢字と仮名の調和した線質による表現

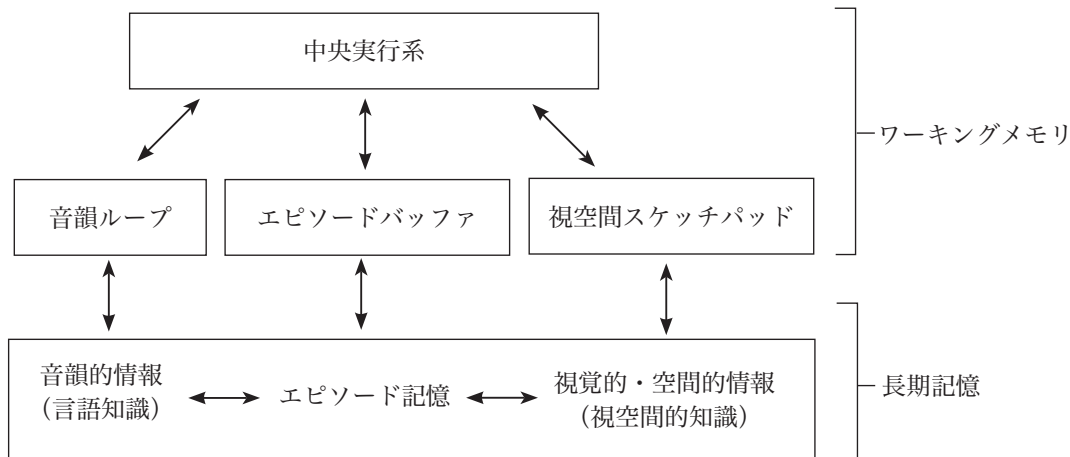
【表7】 学習指導要領(平成元年改訂～平成30年改訂)における書道Ⅰ(漢字仮名交じりの書)の指導事項 *傍線部は筆者

えた表現の深化が求められる⁽³⁸⁾と述べている。「名筆」とは、古典・古筆から近現代までの優れた書を描き、平成二一年改訂版には「名筆を生かした表現を理解し工夫すること」、平成三〇年改訂版には「名筆を生かした表現や現代の書の表現と用筆・運筆との関わり」のように、漢字と仮名の調和を図るための新たな指導事項として取り上げられている【表7】。加藤はこの名筆を生かした漢字仮名交じりの書の年間学習指導計画について、「発想の転換を図り、『漢字仮名交じりの書』を例えば「書道Ⅰ」において一番先に指導することも考えられよう。古典に依拠しない生徒の文字は実に頼りないものと映るであろうが、これをより良い作品にするために、個々の生徒が好きな古典を選択し、学習する。その結果を最初の作品と比較しながら、学習を進めていく⁽³⁹⁾」と提案している。

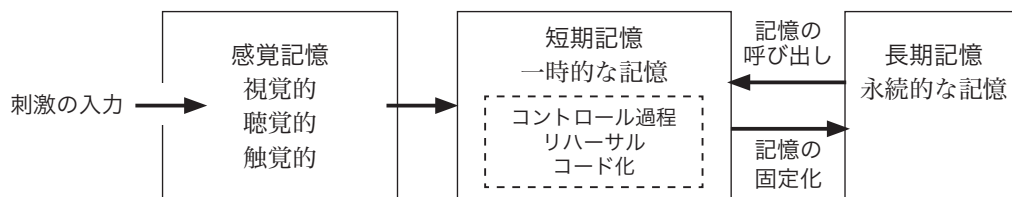
これらの学習指導要領の変遷や当時の見解を踏まえると、漢字仮名交じりの書はその学習の目的によって、漢字の書や仮名の書よりも前に扱うか後に扱うかの学習時期を考える必要がある。【図13】における漢字仮名交じりの書①は書写と書道の違いを認識させることを目的としている。それに対して、漢字仮名交じりの書②は漢字の書や仮名の書をそれぞれ独立した学びとして完結させるのではなく、既習内容の書を構成する要素や用筆・運筆等を生かし、漢字仮名交じりの書における表現を深化させることを目的としている。縦断的な学習の深まりを考えると、漢字仮名交じりの書①、②の学習において表現する言葉は変えずに表現させ、それらの作品比較によって、表現に質的な深まりがあつたかどうかを評価する方法も考えられる。このように、生徒が主体的に調和的書

再生	手掛かりを使わずに思い出すこと。
再認	以前に憶えたことや物、またリストが再度現れたときに思い出すこと。
再統合	リストを実際には覚えていなくとも、以前と同じ順序に並び替えることができること。
再学習の節約	リストをすっかり忘れてしまっても、まったく新しいリストを憶えるのに比べてより短時間で、同じリストを再び憶えること。

【表 8】 エビングハウスによる想起の 4 分類



【図 14】 ワーキングメモリのモデル



【図 15】 二重貯蔵庫モデル (Atkinson&Shiffrin, 1968 をもとに作成)

字方略を使用し、表現方法の練度が高まっていくように学習指導方法を構築することが求められる。縦断的かつ効果的な漢字仮名交じりの書の学習を実現するためには、生徒が自己調整学習の各段階において調和的書字方略を適切に使用できるように、既習の学習内容を意識するだけでなく、選択、統合できるような学習環境を整えることが大切である。

ここまで述べたことから、漢字仮名交じり書を年間学習指導計画に適切に位置付けるためには、中学校国語科書写において獲得した調和的書字方略を指導者が理解することに加え、漢字の書や仮名の書との系統性を意識した視点が重要である。既習の漢字の書や仮名の書を生かした漢字仮名交じりの書の学習を設定する場合、古典の臨書学習を生かした創作活動を展開できることが望ましい。しかし、限られた授業時間の中で習得した知識・技術を活用していくことは、生徒にとって容易なことではない。それは時間が経過すればするほど学習の記憶は薄れ、学習当時の記憶を辿って知識・技能を想起する必要があるからである。

記憶の仕組みについて研究するエビングハウスのように、想起には【表 8】に示した四つのタイプがある⁽¹⁰⁾とされている。また、想起後にその知識・技能を活用していくには、ワーキングメモリを適切に稼働させなければならぬ。ワーキングメモリは一九七四年に Baddeley と Hitch によって提言されたモデル【図 14】

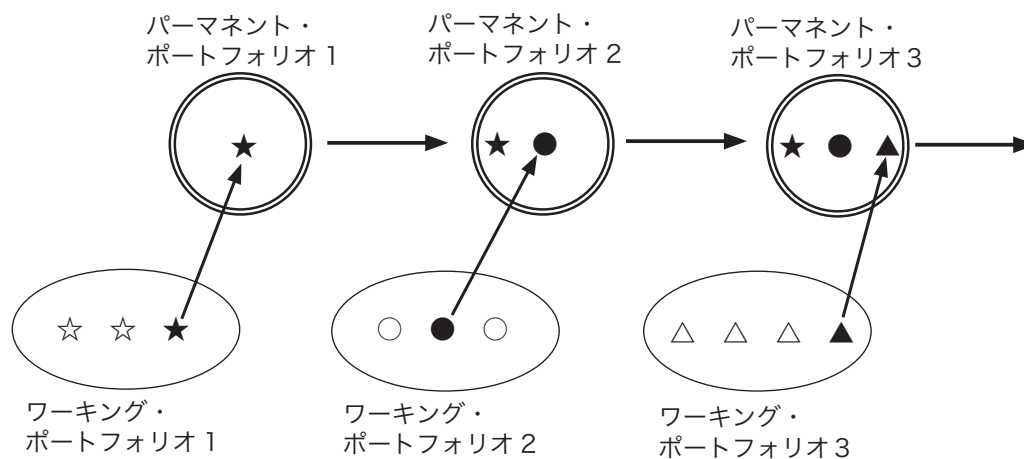
であり、嶋田は「言葉などの情報の保持、操作を行う音韻ループと視覚イメージ情報の保持、操作を行う視空間スケッチパッド、そしてそれらの中央実行系の三つからなる」と説明している⁽⁴¹⁾。

また、Atkinson と Shiffrin が提唱する二重貯蔵庫【図15】を例にすると、ワーキングメモリは短期記憶に該当し、「即時情報が目的に合うものであるかどうかの関連性を中央実行系が決める」とされている⁽⁴²⁾。これらを書道の学習に照らし合わせて考えてみる。例えば、漢字の書において「牛橛造像記」の臨書学習をし、書を構成する要素や用筆・運筆等の知識・技能が習得できたとする。しかし、それらの情報は使用頻度が少なければ長期記憶へ転送せずに忘却していく。たとえ効果的な学習によつて記憶が強化され、短期記憶から長期記憶に情報が転送できたとしても、同じく使用頻度が少なければ再生できず、再認しづらいことも考えられる。このことから、漢字仮名交じりの書の制作前段階において、古典の臨書学習の記憶を定着させる工夫や臨書学習を想起できるような学習指導方法を検討しなければならない。具体的には、記憶の定着を図るために、既習の臨書学習の内容を繰り返し意識させ、想起できるような場面を設定する必要があると考えた。

そこで、漢字仮名交じりの書の学習を系統的な学びにするための方法として、「長期的な見通しをもったカリキュラム設計が可能⁽⁴³⁾」と考えられているポートフォリオ学習が有効に働くと考え、試験的に学習に取り入れることにした。

II ポートフォリオ学習の試験的な導入

ポートフォリオづくり（学習）は、教育現場では総合的な探究の時間をはじめ多くの教科学習で取り入れられており、教育分野以外でも看護分野などで幅広く活用されている。西岡は「ポートフォリオ」の定義を「子どもの作品、自己評価の記録、教師の評価の記録などを、系統的に蓄積していくもの」とし、「子供は自分にとって何が課題として残されているか、的確に把握することができ⁽⁴⁴⁾」ことを効果として挙げ、結果的には「自律的に学習を進める力」が身に付くと述べている。また、ポートフォリオについては、「学習者の自己評価能力を高めるだけでなくメタ認知能力を高めるものである⁽⁴⁵⁾」と述べたり、下は「①学習者



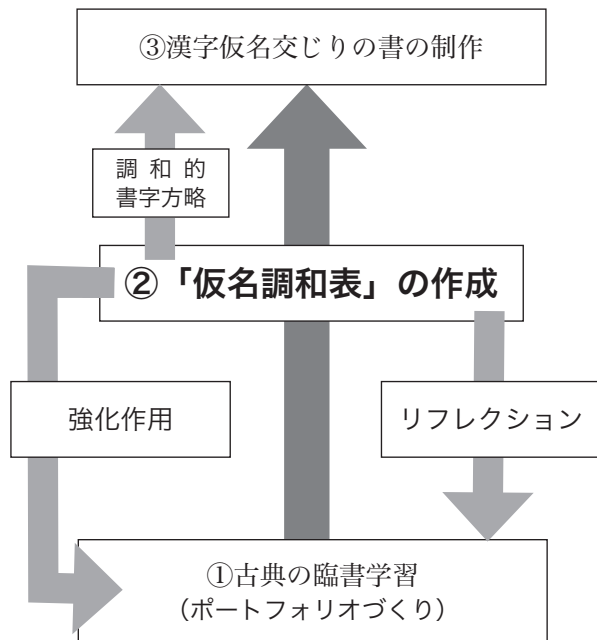
【図 16】 西岡が考えるワーキングポートフォリオからパーマネントポートフォリオへの再構成

が学習の過程を振り返ることができる。②一定の期間に迫る継続的な評価が行える。③学習者独自のものが作成でき、達成感を感じることができる⁴⁶⁾と述べたりしている。

これらの考え方は自己調整学習に近似するところがあり、古典の臨書学習にポートフォリオづくりの考え方を取り入れることによって学習に系統性を持たせるだけでなく、自らの学習をメタ認知的活動によってコントロールし、つまづきを解消することができるのではないかと考えた。西岡はポートフォリオづくりにおいて、「目的や目標に照らし合わせて意図的・系統的に行うことが大切である⁴⁷⁾」と述べている。これを古典の臨書学習に基づいて考えるワークシート活用時には、漢字仮名交じりの書との系統性を持たせたり、書に関する見方や考え方を働かせた活動にしたりするためにはどのような形式が適切であるのか熟慮することが挙げられる。古典の臨書学習において継続的なポートフォリオづくりをすることによって、古典別の書を構成する要素や用筆・運筆等の特徴を生徒自身が気付き、表現方法を広げられるような工夫が求められる。

また、西岡はワーキングポートフォリオ（日常的に資料をためておくポートフォリオ）からパーマネントポートフォリオ（資料を取捨選択したり並べ替えたりして作る永久保存版のポートフォリオ）へとポートフォリオを再構成する活動によって、子ども自身が目的と意義について納得し、より学習に主体的になれると述べている⁴⁸⁾。このことは、ポートフォリオの活用の仕方を工夫することの重要性を示している。例えば、まず、臨書学習において新たな古典作品を扱う度に、特徴や要点等を記入したワークシートをワーキングポートフォリオとしてファイルに綴っておく。次に漢字仮名交じりの書の学習の制作過程において、パーマネントポートフォリオの考え方にに基づき、蓄積した学習の記録（書体や書風に即した用筆・運筆、字形、全体構成などが記載されたもの）から意図に基づいた表現にするために必要な情報を取捨選択し、新たにポートフォリオを再構成することも可能である。ポートフォリオの資料を目的に応じて再構成することにより、漢字仮名交じりの書の制作過程において古典の臨書学習を振り返ることにつながるのではないだろうか。

また、ポートフォリオづくりについて、加藤は「学習者がリフレクション（自分の認知過程を省察する）、



【図 17】 仮名調和表を起点としたときの学習活動のイメージ図

モニタリングしながら効果的に学習を進めていく活動⁽⁴⁹⁾と述べている。古典の臨書学習との系統性をもたせた漢字仮名交じりの書の学習では、ポートフォリオを活用するため必然的に学習者が古典の臨書学習をリフレクションすることになる。このリフレクションについては、平成二年改訂版の学習指導要領以降、学習者が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れられるように教育過程実施上の配慮事項に追記されており、その重要性はますます高まってきた。

リフレクションについて、和栗は「体験を一過性の刺激に留めるのではなく、体験を紐解き、整理し、次の行動へつなげていくための大切な作業」と述べており、学習者は「したこと・起こったこと、そしてそれに対する自身や他者の反応とそれらが与える影響等」を振り返る必要があると述べている⁽⁵⁰⁾。また、熊谷は「事実や経験に対する自分の判断や意見を、『意見』『経験』『感情』『価値観』に切り分けて可視化しながら、自らの行動を振り返り、結果と結びつけることで、次に取るべき行動が見えてくる」とし、「リフレクションがメタ認知力を高めるメソッド」になると述べている⁽⁵¹⁾。これらの先行研究を踏まえると、リフレクションによつて生徒のメタ認知力が高まり、学習に対する新たな課題の発見や異なる視点への気づきにつながっていくと考える。古典の臨書学習を漢字仮名交じりの書に生かすという一方向的なものだけではなく、漢字仮名交じりの書を古典の臨書学習に生かすという双方向的な仕組みづくりをすることにより、古典の臨書学習の価値を再び捉え直す契機が生まれるのではないかと考える。

また、熊谷はリフレクションには「認知」が深く関わると述べている。「認知」の定義を「過去の経験より形成された『ものの見方』を通して行われる」とし、認知のメカニズムは「知覚した事実をどのように捉えるのか(判断)は、過去の経験や知識によつて形成されたものの見方に依存します。新たな事実に対する知覚と判断を行うと、その経験を通して新たなものの見方が再形成され、蓄積されていきます」と述べている⁽⁵²⁾。このことから、古典の臨書学習後すぐに、漢字仮名交じりの書の学習に向かうのではなく、古典に基づいて平仮名の調和を図る活動を取り入れることにより、新たな視点で書体や書風に即した書

を構成する要素や用筆・運筆等を捉えることができるのではないかと考える。

そこで、新たな気付きを生む学習として、做書に近い性質があり、古典の臨書学習を次の漢字仮名交じりの書に体系的に生かすことができる「仮名調和表」の作成に取り組むことにした。仮名調和表の説明は第5章に譲るが、仮名調和表の作成は学習の流れにおいて二つの学習結果を生み出すと考える【図17】。一つ目は、次に学習する漢字仮名交じりの書における漢字と仮名の調和について考えるときの拠り所としての機能を果たす点である。二つ目は、過去のポートフォリオを振り返ることによって、古典の臨書学習を再構成するという強化作用を生じさせる点である。このように仮名調和表の作成を学習に取り入れることにより、漢字と仮名の調和の学習に系統性を持たせることができるかと考える。

第5章 「仮名調和表」作成時の生徒の意識と平仮名の表現方法

ポートフォリオづくりやリフレクションの考え方にに基づき、書道選択の生徒を対象として、六つの楷書の臨書学習をするとき、ポートフォリオ学習を試みた⁽³³⁾。その学習においては【資料4】のワークシートを試験的に導入し、臨書学習における学びを蓄積させていった。このワークシートは「観察↓分析（課題発見）↓試行・意見交換↓実践」という流れを意識して作成した。また、フレームワーク思考に基づいてワークシートの様式を揃えることにより、異なる古典においても観点を比較しやすくなり、記述するときの迷いを軽減したりできるように配慮した。古典の臨書学習後、漢字仮名交じりの書の学習の前段階として、生徒に六つの楷書から一つを選択させ、既習内容を生かしながら仮名調和表を作成させた。

I 仮名調和表の概要

「仮名調和表」とは、生徒が選択した一つの楷書に調和するような平仮名を表現したものが載っており、漢字仮名交じりの書を制作していくときの参考資料となるものである。仮名調和表には、平仮名九文字を載せ、それらの平仮名を表現するときの注意点を記述する欄を設けた【資料5】。平仮名九文字は「こ、せ、

基本データ

作品名 []

時代

作者

年 組 番 氏名

①初見の印象を書こう

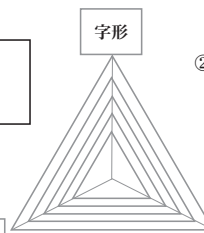
字形

②グラフ

②1枚目を自己評価しよう（数字に○をつけよう）



字形	0	1	2	3	4	5
大小	0	1	2	3	4	5
配列	0	1	2	3	4	5



大小

配列

③用筆・運筆の特徴を知ろう

気づいたことを書こう

対象の書

知ったことを書こう

④2枚目を相互評価しよう（⑦の観点を見て、できている部分・できていない部分を指摘しあおう）

指摘してくれた人

できている

できていない

⑤改善するためにどう直すか考えよう（何(どこ)をどうするか（A）、その結果どのように印象が変わる（B）だろうか）。自己評価の観点を参考に複数書こう。

⑥清書しよう

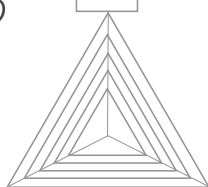
⑦清書を自己評価しよう（数字に○をつけよう）

字 形	0	1	2	3	4	5
構 成	0	1	2	3	4	5
用筆・運筆 (線 質)	0	1	2	3	4	5



字形

⑦グラフ



用筆・運筆

構成

⑨清書を振り返って良い点・悪い点をまとめよう

⑧再度教科書左ページを鑑賞して印象の変化を書こう

⑩学んだこと・感想、どのような創作に生かせると思うか、気づいたこと・考えたことを書こう

【資料4】 楷書の臨書学習で扱ったワークシート

() に調和する仮名調和表を作ろう () 枚目

組 番 名前 ()

	の		ぶ		こ
	よ		つ		せ
	ひ		と		い

★次の項目について、調和させるときに気を付けたことを書こう

①横方向 (こ)	
②縦方向 (せ)	
③斜め方向 (い)	
④点や句点 (ふ)	
⑤右回り (つ)	
⑥左回り (と)	
⑦大回り (の)	
⑧結び (よ)	
⑨折れ (ひ)	

★この楷書に調和する平仮名を書くときに意識したことをできるだけ挙げてみましょう。

★自分の仮名調和表の出来栄について評価し、今後「漢字仮名交じりの書」を表現していくときに生かせることについて書いてみよう。

	仮名調和表の 出来栄え !○○△×で 4段階評価
--	-----------------------------------

【資料5】 仮名調和表（ワークシート）

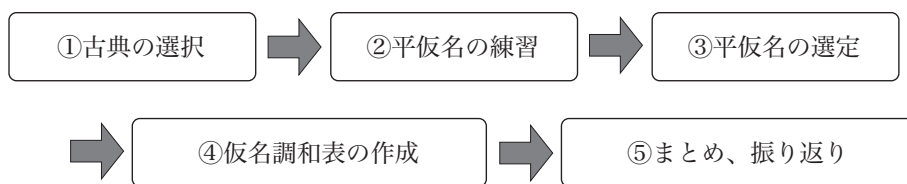
折れ	結び	回り			単一方向				用筆
		大回り	左回り	右回り	点	斜め方向	縦方向	横方向	
(浅い折れ) て (深い折れ) そてひ えぬれわをんゆ	よ ぬはよ なねほま	 のめあぬ ゆお	 しえせ くとしひ	 つちつろ うか やふ	 えな ふお べ	 いか さた み	 あこ にけ き	 あこ にけ き	例

【図 18】 用筆別に見た楷書に調和する平仮名の線

い、ぶ、つ、と、の、よ、ひ」であり、三浦・川瀬の二名が『明解 書写教育⁹⁴⁾』に示された「用筆別に見た楷書に調和する平仮名の線（横方向、縦方向、斜め方向、点、右回り、左回り、大回り、結び、折れ）」【図18】に照らし合わせて選定した。また、表現するところの注意点を自由記述させるときには、「用筆別に見た楷書に調和する平仮名の線」に限定することはせず、生徒が対象の平仮名をどのように捉えているかを考察できるようにした。

Ⅱ 仮名調和表作成に至った経緯と調和を図るときに前提とする考え方

三浦は、自己調整学習の視座から漢字仮名交じりの書を捉えたときに、生徒が言葉の選定、草稿づくり、創作・鑑賞活動の各段階において適切な学習方略を使用することにより、そのつまづきを乗り越えられると述べている⁹⁵⁾。これは漢字と仮名の調和における平仮名表現も同様の視点で考えることができ、調和的書字方略の一つとして仮名調和表の活用により、つまづきを解消できるのではないかと考えた。また仮名調和表は、第3章で述べた国語科書写と芸術科書道の縦断的な接続や、第4章で述べた年間学習指導計画に基づいた各分野の学習に系統性をもたせるという課題に対しても有効に働くのではないか。縦断的な接続を見据えた視点で考えると、生徒が書写で学習した「正しく整えて速く書く」平仮名と、古典を意識して調和を図った平仮名を比較することにより、書写と書道の違いを明確にし、そこから平仮名本来の表現方法に目を向けたり、調和の本質に迫ったりすることができる。また、年間学習指導計画における学習の系統性の視点で考えると、仮名調和表が漢字仮名交じりの書の制作における依り所（参考資料）としての役割を果たし、既習の書を構成する要素や用筆・運筆等を想起させやすくし、漢字と仮名をどのように調和さ



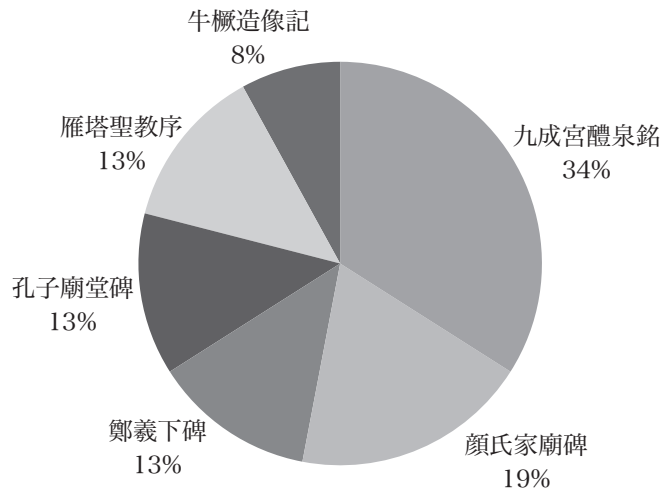
【図 19】 仮名調和表作成時の学習活動の流れ

せればよいか考えやすくさせると考えた。

ただ仮名調和表作成の前提として、平仮名を漢字に歩み寄らせて調和を図るときに生徒に認識させるべきことがある。それは、一般的に私たちが扱う平仮名はすでに調和が図られているという事実である。楷書と平仮名の調和については、「平仮名は、漢字の草書体を簡略化してできたために、その筆使いは楷書の筆使いとは本来的に調和するものではない。平仮名が曲線的であり、楷書が直線的であるためである。字形においても、平仮名が流動的であるのに対して、楷書は構築的であり、やはり調和しにくい要素をもっている」⁽⁵⁶⁾や「楷書は、点画を連続させず、直線的に書く書体であるため、平仮名が本来持っている特徴とは調和しにくい側面がある」⁽⁵⁷⁾と述べられている。しかし、実際には平仮名が楷書に歩み寄ることによって、その特徴の差異を小さくするための工夫により調和が図られている。その工夫とは「①平仮名本来の曲線を控え、直線的にする。②連続的な筆使いを弱める。③流動的な字形を避け、構築性を高める。④一点一画として、数えられるようにする」⁽⁵⁸⁾などである。学校教育で学ぶ平仮名は、これらの工夫により調和が図られていることを生徒に理解させた上で、力強い楷書や穏やかな楷書など意図に基づいた調和を図ることを目指させ、調和の図り方について深く考えさせたい。そのためには仮名調和表の作成は意義ある活動として、学習の流れに合わせて位置付けることが重要である。

III 仮名調和表作成の学習活動の流れ

本実践は、愛知教育大学附属高等学校に在籍する一年生の書道選択者（四〇名）を対象として、単元名「仮名調和表を作ろう」（全二時間）において、【図 19】に示した学習活動を行った。①では六つの楷書（孔子廟堂碑、九成宮醴泉銘、雁塔聖教序、顔氏家廟碑、牛橛造像記、鄭義下碑）から調和を図る古典の一つを選んだ。②ではポートフォリオを参考にしながら、九つの平仮名を半紙に表現した。③では②で表現した平仮名の中から最も完成度の高いものを選択し、ワークシートの所定の位置に貼り付けた。④では平仮名九つを表現したときに気を付けたことをそれぞれワークシートに記述した。⑤では単元全体のまとめとして、選択した古典に調和させるために意識したことや、これから漢字仮名交じりの書を表現するときに生かせ



【グラフ 9】「仮名調和表」作成時に生徒が選択した古典

ることを記述した。

IV 仮名調和表作成時における生徒の意識

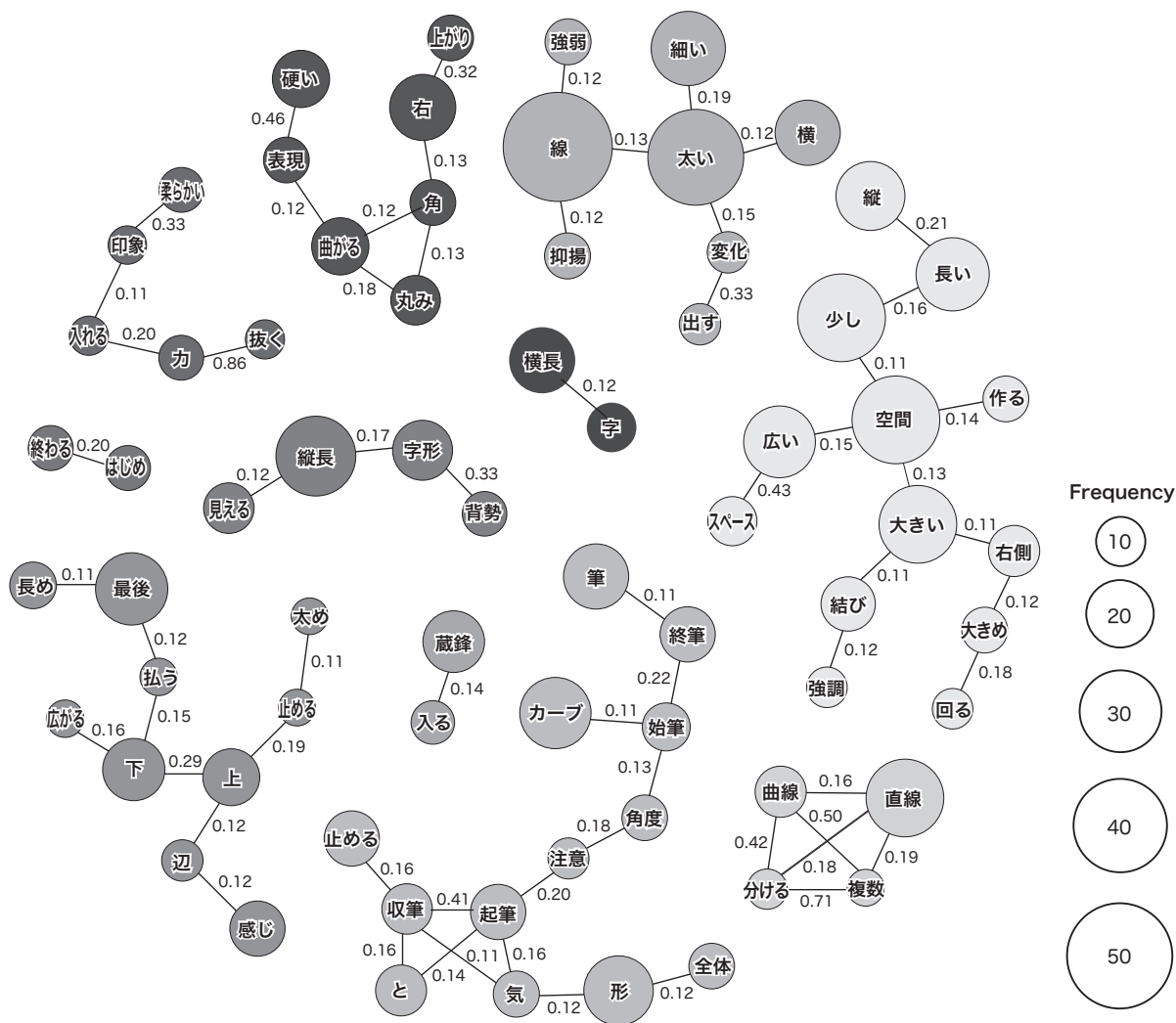
ここからは生徒が作成した仮名調和表を分析し、生徒が漢字と平仮名の調和をどのように捉えているのかについての意識を調査していく。調査方法としては、生徒がワークシートに記述した内容をテキストマイニングにより整理・分類し、その関係性について分析することにした。【グラフ 9】は仮名調和表作成時に生徒が選択した古典の内訳である。九成宮醴泉銘は三四%、顔氏家廟碑は一九%、鄭義下碑、孔子廟堂碑、雁塔聖教序はそれぞれ一三%、牛橛造像記は八%という内訳であり、生徒の三分の一が九成宮醴泉銘を選択している。それとは対照的に牛橛造像記を選択した生徒はわずか三人であったことが分かる。

A 共起ネットワークによる分析

【図 20】は、【資料 5】の「次の項目について調和させたときに気を付けたことを書こう」から得られた回答の共起ネットワークである。得られた自由記述の回答総数は四二四件であり、頻出回数上位五〇件の抽出語句間の共起性を図示した。生徒の意識の傾向を整理してみると、次の三点の特徴を読み取ることができる。

一点目は、線を意識して調和を図ろうとしていることである。線に関する語に着目すると、「太い」もしくは「細い」線で書くこと、「抑揚」や「強弱」のある線で「変化」を「出す」こと、「横」の線を意識して書くことなどが挙げられる。また、「曲線」を「複数」の「直線」に「分ける」や「上」に「上がる」、「下」に「払う」、「蔵鋒」を用いて「入る」、「始筆」の「角度」に「注意」するなど用筆・運筆に関わる筆使いを意識して線質を工夫しようとしていることが読み取れる。ここから、生徒が古典に調和する平仮名を作成するときに、多角的な観点で線を意識したことが分かる。

二点目は、空間を意識して調和を図ろうとしていることである。空間に関する語に着目すると、「広い」「スペース」を空け、「大きい」空間を「作る」ことを意識していることが挙げられる。「右側」に「大きめ」



【図 20】 共起ネットワーク（各平仮名を表現したときの生徒の意識）

に「回る」ことにも関係があると考えられ、特定の平仮名を表現するときに空間についての意識が強く働くことが推測される。

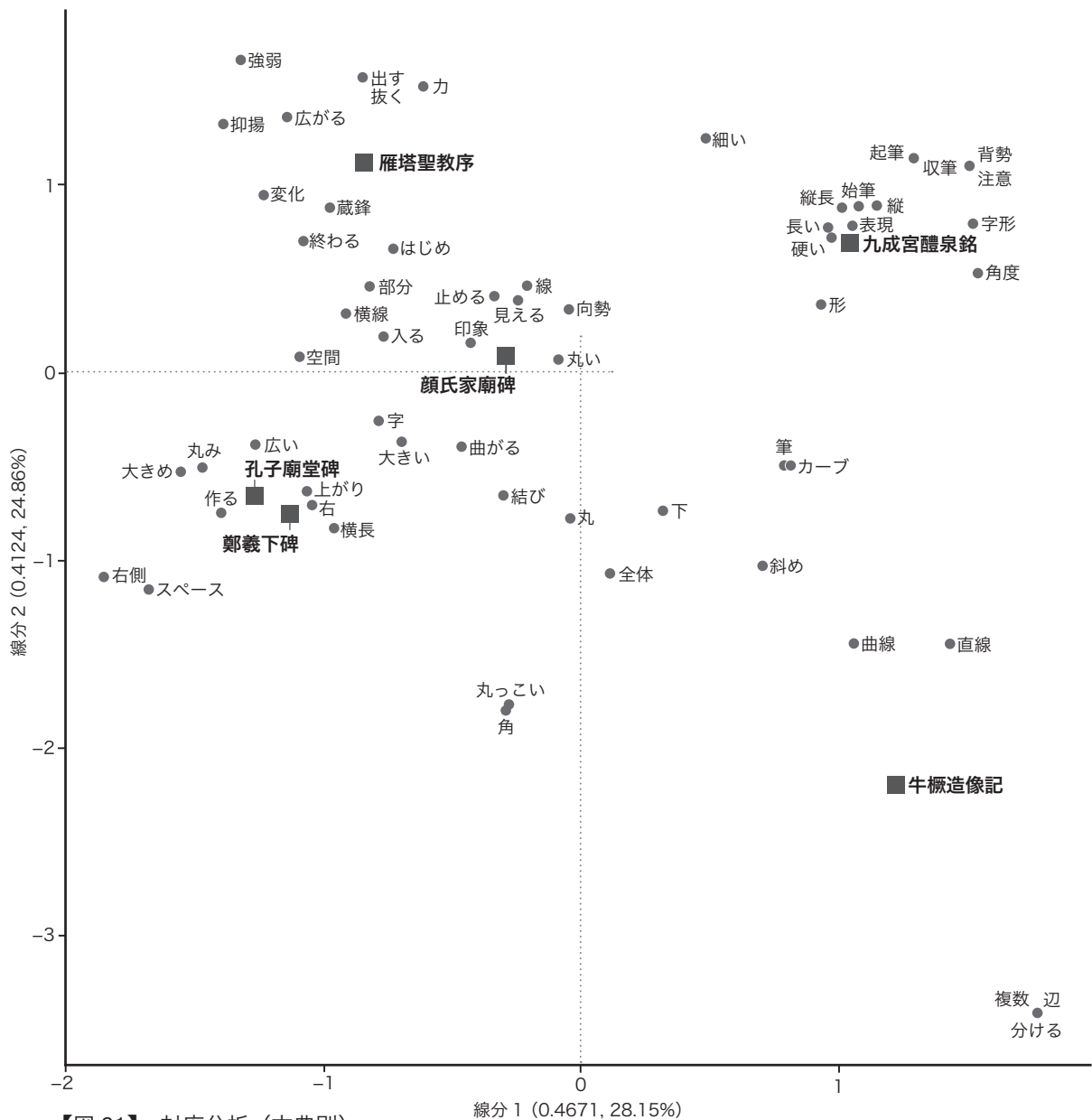
三点目は、字形を意識して調和を図ろうとしていることである。字形に関する語に着目すると、「縦長」に「見える」ようにすることや、「背勢」にすることなどが挙げられる。この「縦長」や「背勢」は、特定の古典（九成宮醴泉銘）に調和させようとしたときの意識であると推測でき、選択した古典によっては、字形を強く意識して調和を図ろうとしていたことが分かる。

これら三つの特徴が見られるが、選択した古典や対象となる平仮名によって、どの調和方法で表現するのかが異なる可能性がある。そこで、調和を図るときに書を構成する要素のどこに意識を向けているか、古典別にその傾向を明らかにしていく。

イ 対応分析による分析

【図 21】は平仮名を表現したときの生徒の意識（平仮名一文字ごとには限定しない）に外部変数を「古典名」としてクロス集計し、相関関係を示したものである（二語につき、記載回数が二〇未満の頻度の少ないものは除いた）。対応分析とは、二つの項目間あるいは変数を一緒に集計しその関係を視覚的に表す分析方法である。抽出された語のうち、偏りの小さい項目は原点の近くに、偏りの大きい項目は原点から遠く配置される。また、互いに関連の強い項目同士は、原点からみて同一方向に配置される。

【図 21】において雁塔聖教序、孔子廟堂碑、牛橛造像記、九



【図 21】 対応分析（古典別）

成宮醴泉銘の位置をそれぞれ点 A、B、C、D とする（鄭義下碑は孔子廟堂碑に近いため同一の点 B とみなす）。四点 A、B、C、D を結ぶと四角形となり、対角線 AC と BD を結んだ交点が原点近くにきており、そこに顔氏家廟碑が位置している。これはそれぞれの作品が他とは異なつた書を構成する要素や用筆・運筆があると生徒が認識していることが読み取れる。また、原点付近にある「丸い」、「向勢」、「曲がる」、「丸」などの要素は、どのような書風で表現するときも生徒は重要だと認識して調和を図ろうとしていることが分かる。これは平仮名の特徴を生徒が理解し、調和を図るとき指標として、既習の平仮名表現に歩み寄せようとしたためであると考えられる。また、この結果から、次の三つのグループに分類できる。

- ① 字形や空間より「線質」に重点を置いて調和を図ろうとするグループ
- ② 線質より「字形や空間」に重点を置いて調和を図ろうとするグループ
- ③ 「線質」と「字形や空間」に同程度の重点を置いて調和を図ろうとするグループ

まず、分類①については点A、Cを結ぶ直線及びその付近から次のような傾向が窺える。点Cの周辺には、「直線」、「カーブ」、「斜め」、「曲線」、「複数」などが見られる。具体的には、「直線的に書くようにする」「終筆を斜め上に上げるように線を引く」等があった。曲線と直線は対極にある言葉だが、これは多くの生徒が「曲線を複数の直線に分けて書いた」などと記載したものであるものであり、曲線を直線的に表現するという発想によるものだと考えられる。また、点Aの周辺には、「蔵鋒」、「変化」、「抑揚」、「強弱」などが見られる。具体的には、「線の太さに抑揚を付けて」、「変化をつけて書く」等があった。生徒は「力」を「抜く」ことによって抑揚、変化、強弱のある線を表現し調和を図ろうとしていたことが分かる。このように、牛轍造像記や雁塔聖教序に平仮名を調和させるには、主に線質に重点を置いて調和を図ろうとする生徒が多いことが明らかになった。

次に、分類②については点B、Dを結ぶ直線及びその付近から次のような傾向が窺える。点Dの周辺には「縦長」、「縦」、「長い」、「字形」などが見られる。具体的には、「縦長に見えるように書いた」、「『ひ』の2画目のところを縦に長くし」等があった。字形は原点から遠く離れて偏りが大きいことから、九成宮醴泉銘については多くの生徒が字形を縦に長くし、縦長の形を意識していることが読み取れる。また、点Bの周辺には、「横長」、「上がり」、「大きめ」、「丸み」、「右」等が見られる。具体的には「硬くなりすぎないように、なるべく丸みを持たせた」、「空間が広く取れるように少し大きめに書いた」等があった。これらの抽出語から考えると、鄭義下碑を選択した生徒は主に字形に、孔子廟堂碑を選択した生徒は主に空間に重点を置いて調和を図ろうとしていたことが推測できる。

最後に、分類③については原点に位置する顔氏家廟碑が該当し、生徒は線質にも字形や空間にも同程度重点を置いて調和を図ろうとしたと言える。生徒が線質、空間、字形それぞれの観点において顔氏家廟碑の書風を捉えることができ、物理的な調和書字方略として選択、統合できる要素が最も多いと考えることができる。

これらの分析を通して、生徒が着目する要素が古典ごとに異なり、その要素の捉え方が調和を図るとき意識につながったと推測できる。しかしながら、先に挙げた分類方法で一概に全ての平仮名の調和を図

ることができるわけではないだろう。例えば、九成宮醴泉銘の書風に調和する平仮名を表現しようとしたときに、縦長の字形に重点を置いて調和を図ろうとしたとする。その際、全ての平仮名の字形を縦長の字形にすれば、九成宮醴泉銘に調和した平仮名になるというわけではない。学習活動⑤における単元のまとめでは「特徴を捉えやすい字もあれば、どこを特徴として捉えればよいのか分からない字もあった」、「全ての字を意識しても、やりすぎて見えてしまうと思ったので、その調整が難しい」とワークシートに書く生徒もいた。このことから、調和を図ろうとする方法が平仮名によつては適さない場合があり、それぞれの平仮名において、生徒は調和させるときにどのような意識を働かせて表現するのか、その傾向や工夫を明らかにする必要があると考えた。

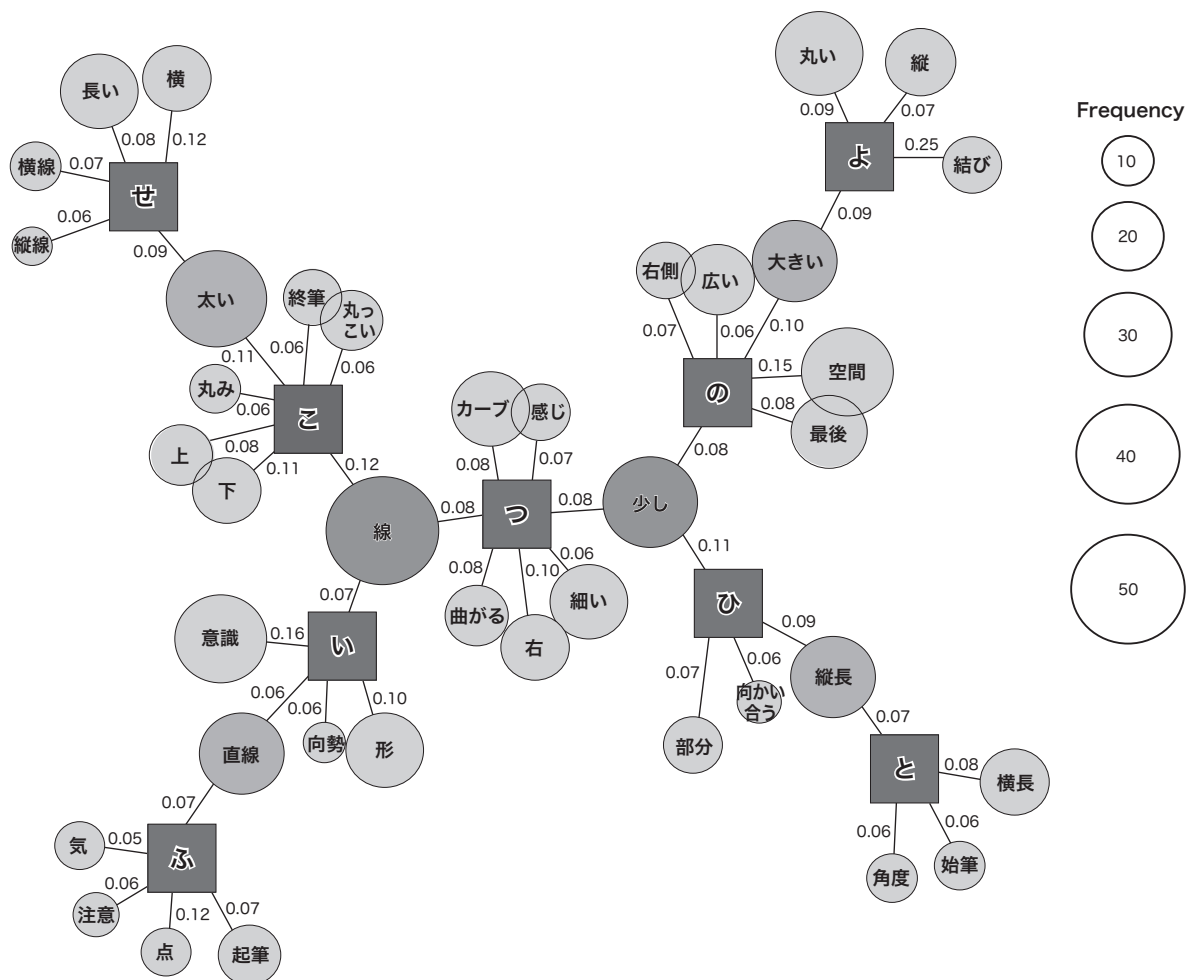
V 平仮名の表現について

ここでは実際の生徒の作品やワークシートの記述に基づいて、調和を図るときに意識していることを検証する。【図22】は「平仮名」を、【図23】は「古典名」をそれぞれ外部変数としてクロス集計し、相関関係を示した共起ネットワークである。この双方から生徒の意識を整理してみると、次のア、イのような傾向を読み取ることができる。それらは選択した古典によつて異なるため、表現に生徒の意識が顕著に表れているものをワークシートの記述と合わせて具体的に提示した。

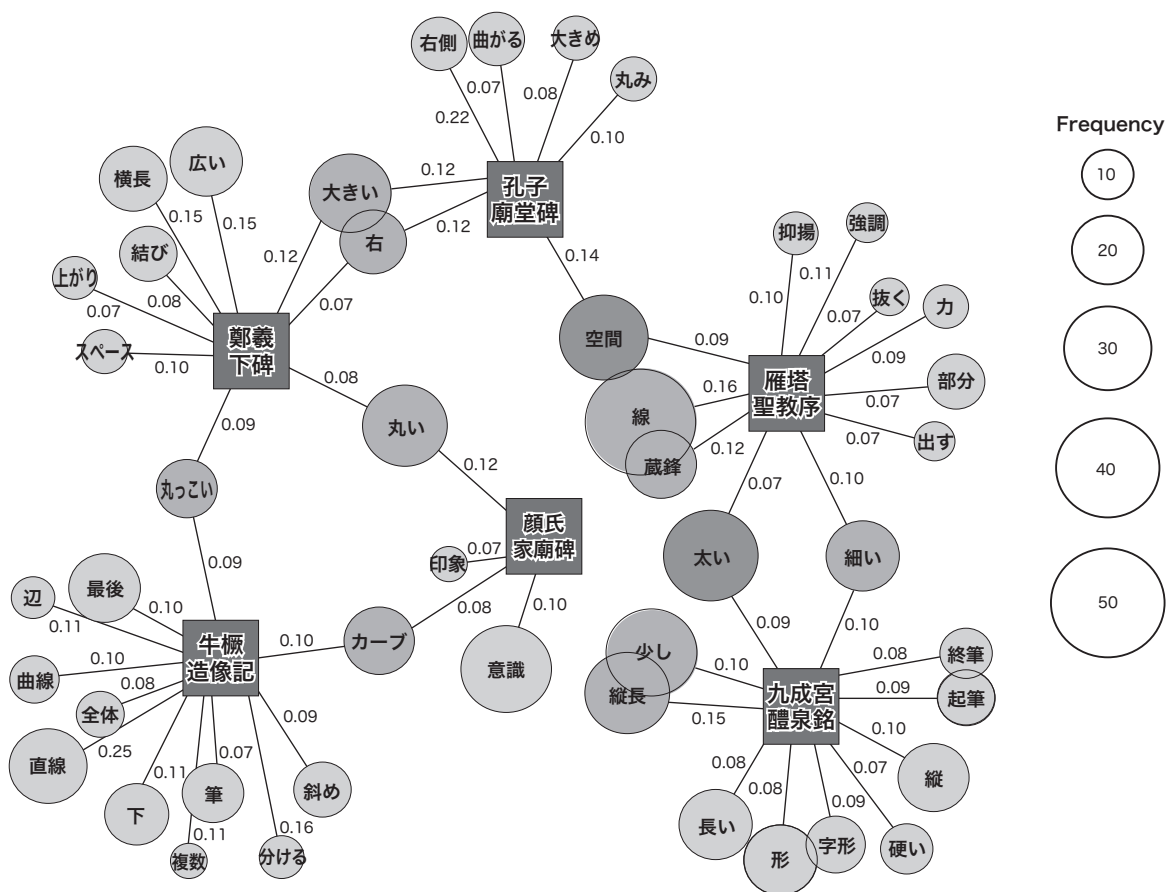
ア「回り」に着目した調和例

(i) 孔子廟堂碑に調和させる場合

【図24】を表現した生徒Aは、「特に右側の空間を大きく作って、左寄りに構える」と書き、また【図25】を表現した生徒Bは、「右側を大きめにする。最後のところを長めに、目立つようにする」と書いている。これらの「回り」はどちらも右側の空間を広くしようとする生徒の意識を読み取ることができる。また、生徒Bは「ひ」の最後の止めを長く表現し、伸びやかな右払いや横画が特徴的である孔子廟堂碑と調和を図ろうとしていることが分かる。



【図 22】 共起ネットワーク（平仮名別）



【図 23】 共起ネットワーク（古典別）

【図 28】 生徒 E の表現

【図 26】 生徒 C の表現

【図 24】 生徒 A の表現

【図 29】 生徒 F の表現

【図 27】 生徒 D の表現

【図 25】 生徒 B の表現

(ii) 牛轡造像記に調和させる場合

【図 26】を表現した生徒 C は、「カーブしないように全部直線で書いた。一回で書かずに四回に分けて書いた」と書き、【図 27】を表現した生徒 D は、「四角の字になるように斜めも曲がらないようにした」と書いている。生徒 C は牛轡造像記の特徴を直線的であると捉え、曲線を複数の直線に分けることにより、調和を目指している。また、生徒 D は「回り」が字形を決定づける大切な要素であると捉え、「と」を方形にするために、左へ膨らむ表現を避けていることが分かる。回りを縦方向の線へ変化させることにより、牛轡造像記の特徴の一つである方形へと歩み寄らせている。

イ「横方向」「縦方向」「斜め方向」に着目した調和例

(i) 牛轡造像記に調和させる場合

【図 28】を表現した生徒 E は、「牛轡造像記の特徴を意識して線をカーブさせずにまっすぐ書いた。収筆を斜め上に二つとも上げる」と書いている。本来、「こ」の横線は丸みを帯びた線で膨らみが見られるが、生徒 E の表現は膨らみを排除し、直線的にすることや収筆を工夫することにより、調和を図っている。「こ」の一画に対して、曲線を直線にし、収筆を上にするなどの古典の特徴を複合的に捉え、選択、統合して調和を図ろうとしていることが分かる。

(ii) 顔氏家廟碑に調和させる場合

【図 29】を表現した生徒 F は、「向勢となるように丸っこく書いた。そして縦長の形となるように書いた」と書いている。形を縦長の字形になるように意識し、向かい合う線は丸さを意識したことが分かる。また、この生徒 F は別の平仮名を書くときの注意点として蔵鋒を挙げており、この「い」の起筆にもその意識が窺える。

これらの考察は、平仮名表現の分析の一端に過ぎないものの、生徒が古典に調和する平仮名を表現するとき、生徒が臨書学習で習得した知識・技能を調和的書字方略として使用していることが分かる。しかしながら、中には異質な表現であったり、調和の図り方として適切ではない表現が見られたりした。仮名調

和表の作成により、調和を図るための観点は生まれやすくなるものの、生徒A～Fの表現から調和の図り方の是非については今後、検討する必要があると考える。

おわりに

本研究では、調和の構造を整理した上で、生徒が小中学校において調和的書字方略を獲得する際の認知メカニズムを明らかにし、高校生の漢字と仮名の調和に関する意識を明らかにしてきた。とりわけ、教科書の調査から物理的な調和書字方略としては、「要素意識」、「比較・選択」、「他者意識」、「効率・連続」の四つの特徴が明らかになった。これを踏まえて、高等学校における漢字と仮名の調和の学習は、書写と書道の縦断的な接続を図ることや、古典の臨書学習に系統性をもたせること、年間学習指導計画において目的に合わせて漢字仮名交じりの書を位置付けることが必要であることが見えてきた。また、ポートフォリオづくりは、生徒がメタ認知力を高める有効な手段である。学習を振り返る活動（リフレクション）にも活用しやすく、既に持っている知識・技能との関連付けを行うことからワーキングメモリを働かせるときに、長期記憶へと移行させやすいことも考えられる。また、仮名調和表の分析結果より、生徒は調和させようとする古典によつて線質、空間、字形など重点を置く要素が異なることが明らかになった。しかし、どの平仮名においてもその調和的書字方略（要素意識）は適用できるものではなく、要素によつては特定の平仮名には適さないことも分かってきた。

漢字と仮名の調和を図るための今後の展望として、次の三点を挙げる。

一点目は、作成した平仮名が調和しているかどうかの評価基準を明確にすることである。【表9】は、生徒が単元のまとめに、調和に対する自己評価を◎、○、△、×で評価したものである。顕著であったのは雁塔聖教序を選択した生徒五人全員が△を選択しており、平仮名を調和させることが困難であったことが読み取れる。それに対して、牛楓像造記や孔子廟堂碑、鄭義下碑は自己評価が高く、調和を図ることができたと考えている生徒が多い傾向が読み取れる。しかしながら、第三者が調和を判断するときに、どのよ

選択した古典	選択人数（全体）	◎	○	△	×
九成宮醴泉銘	13 人	1	8	4	0
顔氏家廟碑	7 人	0	5	2	0
鄭義下碑	5 人	1	3	1	0
孔子廟堂碑	5 人	0	4	1	0
雁塔聖教序	5 人	0	0	5	0
牛橛造像記	3 人	0	3	0	0

【表9】 調和に対する自己評価

うな視点で評価するのかについては、今回の研究では考察しきれていない。第三者が評価可能である物理的な調和について、書字者の意識ではなく、鑑賞者の意識について明確にすることにより、調和の捉え方に迫っていききたい。

二点目は、調和を図るとき「線質」において汎用性という切り口で生徒の意識を解明することである。第5章IVアにおいて分析した【図20】の共起ネットワークでは、線質に関する語として「太い（線の太細）」のバブルスロットは大きい。今回の条件では「線質」の語の抽出がなかったことや、「質」に言及した語ができた生徒は少数であった。今回の条件では「線質」の語の抽出がなかったことや、「質」に言及した語は極めて限定的であったことを考えると、調和的書字方略は汎用性の高低にも関わる可能性があると考える。漢字と仮名の調和を図るときに、仮にも要素の優位性があるとするならば、古典の臨書学習やポートフォリオづくり、リフレクションの活動では、それぞれの活動に重点を置く必要があるのかを追究していきたい。

三点目は、実際に作成した仮名調和表を活用して創作した作品について調査・分析することである。生徒の仮名調和表の使用状況や、平仮名表現の変化について整理・分析し、仮名調和表作りにおける成果と課題について検討していきたい。

〈注〉

- (1) デイオ・ロドルフ（二〇〇六）、「いわゆる『漢字仮名交じりの書路線』を総決算する——明くる指導要領改訂を見据えて——、お茶の水女子大学人文科学研究第二巻、一五頁—二五頁
- (2) 全国大学書写書道教育学会編（二〇〇九）、「明解書写教育」、萱原書房、七〇頁
- (3) 高等学校学習指導要領（平成三十年告示）解説芸術編、七頁
- (4) 中学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説芸術編、一一一頁
- (5) 中学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説芸術編、一二二頁
- (6) 全日本書写書道教育研究会（二〇一六）、「芸術ワーキンググループ取りまとめ（案）」、『全日本書写書道教育研究会第五十七回全国大会（埼玉） 紀要』、八一頁—八四頁
- (7) 三浦拓真（二〇二〇）、「漢字仮名交じりの書における効果的な学習指導方法の研究——生徒の学習方略獲得を目指して

- 」、書写書道教育研究第三十五号、四一頁—五一頁
- (8) 押木秀樹(二〇〇〇)、「汎用性と合理性という視点からみた書写教育の基礎についての試論」、書写書道教育研究第十四号、三一頁—四四頁
- (9) 前掲書 8
- (10) 前掲書 8
- (11) KJ法はアイデア等を整理、分類し、図解する手法である。分類作業にあたっては、回答をカード化し、回答の中に複数の要素を含む場合は、要素の数に合わせて分割した。
- (12) 日本国語大辞典第二版編集委員会(二〇〇一)、『日本国語大辞典 第二版第九卷』、小学館
- (13) 中野北溟・種村山童(一九八六)、『書作品のまとめ方 8 調和体』、二玄社、六頁
- (14) 前掲書 1
- (15) 広瀬裕之(二〇〇〇)、「教員養成における漢字仮名交じりの書導入期の指導法に関する研究」、『書写書道教育研究第一四号』、一〇六頁—一二五頁
- (16) 広瀬裕之(二〇〇一)、「教員養成における漢字仮名交じりの書応用発展期の指導法に関する研究」、『書写書道教育研究第一五号』、六一頁—七〇頁
- (17) 駒井鶯静(一九八二)、『近代詩文書基礎講座 第1巻 漢字・かな』、教育出版、一二頁
- (18) 久米公(一九九八)、「高校漢字仮名交じりの書の特長の背景、意義、授業の工夫」、墨一三三号芸術新聞社、六二頁
- (19) 大森アユミ(二〇〇四)、「高等学校芸術科書道における『生徒の心に響く素材』に関する研究」、書写書道教育研究第一八号、六一頁—七二頁
- (20) 前掲書 1
- (21) 前掲書 1
- (22) 達富悠介・青山浩之(二〇一八)、「日常的な書字活動におけるメタ認知書字方略に関する研究——メタ認知書字方略の実態を踏まえた書写指導の課題——」、『書写書道教育研究三十三号』、三一頁—四二頁
- (23) 三宮真智子(二〇〇八)、「メタ認知研究の背景と意義」三宮真智子編、『メタ認知 学習を支える高次認知機能』、北大路書房
- (24) 達富悠介・青山浩之(二〇一九)、「小中学生を対象としたメタ認知書字方略に関する研究」、『書写書道教育研究三十四号』、二二頁—三〇頁
- (25) 古賀洋一(二〇一五)、「説明的文章の読解方略指導における条件的知識の学習過程——自己調整理論を枠組みとして——」、『国語科教育第七十八集』、二九頁—三六頁
- (26) 前掲書 25
- (27) 前掲書 25
- (28) Zimmerman・Shank 他(二〇〇六)、『自己調整学習の理論』、北大路書房、五頁
- (29) 伊藤崇達(二〇〇九)、『自己調整学習の成立過程』、北大路書房、二頁

- (30) Zimmerman・Shank 他 (二〇〇六)、『自己調整学習の理論』、北大路書房、六頁
- (31) 河野智文 (二〇一八)、『教科書の歴史』 田近洵一・井上尚美編、『国語教育指導用語辞典 第四訂』、教育出版、三三八頁—三四一頁
- (32) 小学校「書写」の教科書(教育出版、光村図書、東京書籍)を参照とした。
- (33) 中学校「書写」の教科書(教育出版、光村図書、東京書籍)を参照とした。
- (34) 達富悠介・青山浩之(二〇二〇)、『言語活動に機能する書写教科書の分析』、『書写書道教育研究三十五号』、三一頁—四一頁
- (35) 加藤泰弘(二〇〇七)、『書道教育の課題と展望(1)』、『中等教育資料8月号』、六二頁・六三頁
- (36) 前掲書35、六二頁・六三頁
- (37) 加藤泰弘(二〇〇七)、『書道教育の課題と展望(1)』、『中等教育資料8月号』、六二頁・六三頁
- (38) 加藤泰弘(二〇一一)、『新学習指導要領による芸術科書道の授業の改善と工夫(1)』、『中等教育資料5月号』、六九頁・七〇頁
- (39) 加藤祐司(一九九九)、『学習指導の工夫と改善(8)——生徒が楽しく関わるために——』、『中等教育資料5月号』、六二頁
- (40) ニッキー・ヘイズ、サラ・トムリー(二〇二二)、『図解 教養事典 心理学』、ニュートンプレス
- (41) 嶋田総太郎(二〇一七)、『認知脳科学』、一〇七頁
- (42) 前掲書41
- (43) 西岡加名恵(二〇〇三)、『教科と総合に活かすポートフォリオ評価 新たな評価基準の創出に向けて』、図書文化
- (44) 前掲書43
- (45) Smolen, Newman C, Wathen T, Leed. (一九九五) Developing student self-assessment strategies, TESOL Journal, 五二頁—二七頁
- (46) 下絵津子(二〇〇六)、『第二言語教育におけるポートフォリオの活用』、『宮崎公立大学人文学部紀要』第十四巻第一号、一四九頁—一六七頁
- (47) 前掲書43
- (48) 前掲書43
- (49) 加藤千博(二〇一〇)、『自立学習のための学習者ポートフォリオの有用性』、『横浜国立大学論叢』第六十一号、四九頁—六九頁
- (50) 和栗百恵(二〇一〇)、『「ふりかえり」と学習——大学教育におけるふりかえり支援のために——』、『国立教育政策研究所 第一三九集』
- (51) 熊谷美香(二〇二二)、『リフレクション 自分とチームの成長を加速させる内省の技術』、デイスカバー・トゥエンティワン
- (52) 前掲書51
- (53) 川瀬英幹(二〇二二)、『作品カルテと授業展開——学習のポートフォリオ化——』、『愛知教育大学附属高等学校研究紀要第四十八号』、九五頁—一〇〇頁

- (54) 全国大学書写書道教育学会編（二〇〇九）、『明解 書写教育』、七一頁
- (55) 前掲書 7
- (56) 全国大学書写書道教育学会編（二〇二〇）、『国語科書写の理論と実践』、三二頁
- (57) 前掲書 56、三二頁

【 Research-aid resulting papers vol.7 】

A Research on the Exchange between Qian Shoutie and Japanese Literati(1922-49)
HORIKAWA Hidetsugu and ASANO Yasuyuki and DUAN Yilin and KIYOHARA Ken and WANG
Yafeng

A Study of how to express Hiragana in Harmony between Kanji and Kana: from the perspective
of vertically connecting Shosha Junior High School Japanese Language Class and High School
Art Course Calligraphy vol.1
MIURA Takuma and KAWASE Hideki

研究助成審査委員一覧

研究助成審査委員長

古谷 稔（東京国立博物館 名誉館員）

（1）幼児から小学校２年生までを対象にした文字教育に関する研究分野

審査委員

瀬川賢一（大阪教育大学 准教授）

森 哲之（広島文教大学 教授）

（2）小学校３年生から中学校３年生までを対象にした習字・書写書道教育に関する研究分野

審査委員

大橋修一（埼玉大学 名誉教授・川口短期大学 教授）

松本仁志（広島大学 教授）

（3）わが国又は東アジアの書学・書道史に関する研究分野

審査委員

福田哲之（島根大学 教授）

永由徳夫（群馬大学 教授）

（4）文字を用いた生涯学習に関する研究又は、美術館・博物館等における習字・書写書道教育（鑑賞・ワークショップ等を含む）に関する研究分野

審査委員

萱 のり子（東京学芸大学 教授）

丸山猶計（大東文化大学 准教授）

（5）教育史的立場から論じた習字・書写書道教育に関する研究又は文房具に関する研究分野

審査委員

樋口咲子（千葉大学 教授）

宮里 司（元大東文化大学書道研究所 室長）

学術研究助成成果論文集の刊行にあたって

当財団の研究助成事業は、日本習字創立六〇周年を記念して始めたもので、その願いは一重に書道文化、書道教育の振興発展に寄与し、次代を担う若手研究者の一助になればとの思いであつた。

こうした趣旨に賛同した数多くの研究者が、これを活用し、その後も目覚ましく活躍されていることは、誠に喜ばしい限りである。

本論文集の刊行も、当該事業の成果を発表する場として位置付け、斯界発展のために役立つことがあれば、望外の喜びである。

公益財団法人 日本習字教育財団

公益財団法人 日本習字教育財団 学術研究助成成果論文集 Vol.7

発行日 令和4年3月31日

発行所 公益財団法人 日本習字教育財団
福岡市中央区赤坂 2-6-11 日本習字ビル
TEL 092-721-4555
www.nihon-shuji.or.jp

©2022 公益財団法人 日本習字教育財団
本書の一部を無断で転載・複写することを禁じます。

協力 平出秀俊・勢力洋幸

